

リリカルなのは：介入  
するなら頑張っ

ゆかりフリカケ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

気が付くと見知らぬ空間

其処にいたのは不定形だった神っぽいなにか

伝えられた事は不鮮明な現状

告げられたのは・・・

「なんかごちゃごちゃに成っちゃっててるから適当に流れを正して」というお願い。

適当な特典をお願いし生まれ変わった世界は“リリカルなのは”が基準の世界

前世から大分変わった自分の境遇

お願いされたからには頑張りますよ

・ ・ ・でも自分以外に居るなら君らが頑張つてよ。

※タグやら感想受付やら少し変更

※(01/26) タグやらなんやら更に変更(後の展開的に基本原作沿い剥奪)

※以下の要素が含まれますので、苦手な方はお控え下さい。

- ・ 文才に乏しい感じ
- ・ 申し訳程度のTS要素
- ・ 基本やる気のない主人公
- ・ 安定しない構成
- ・ 使い古された展開
- ・ 処女作

# 目次

Ex: Chapter 番外編達

#Ex-1 「戯れの舞台裏」 | 1

導入編

#00 ぷろろーぐ | 19

無印編

#01 確認、開始 | 41

#02 日常、危険 | 59

#03 idle talk:01

75 #04 idle talk:02

93 #05 責任、決意 | 107

#06 idle talk:03

124 #07 勢揃、介入 | 134

#08 違歴、別行 | 153

#09 表側、其々 | 172

#10 idle talk:04

185 #11 肩入、思案 | 196

#12 Side:F「変調」

209 #13 接触、受信 | 226

#14 協力、局員 | 244

#15 宝種、搜索 | 260

354	# 21	『Next A's』	343	# 20	After	323	# 19	事情、躍者	312	# 18	史変、帰結	295	# 17	事態、急展	274	# 16	宝種、探索
-----	------	------------	-----	------	-------	-----	------	-------	-----	------	-------	-----	------	-------	-----	------	-------



Ex : Chapter 番外編達

# E x - 1 「戯れの舞台裏」

——ピッ

「あい、ビーも司会進行をやらされる私いつきです。そして此処は舞台裏という名のなかなか進まない本編に変わって設定をちよびつと吐露してゆく場完全メタ空間ですよー、ラジオ的な空間だと思っていただければー」

『唐突に始まったな、自分アルサナです。つで本編進めずになんでこんなもの企画された?』

「作者のアホが

【台詞で回す台本形式やりてえ、あといいい加減どつかで適当に設定出してふざけないと読者が飽きる。そして私も息詰まる】

とか思い立ったらいいですよ、くたばればいいのにな

『辛辣過ぎんぞ、あと言い回し自虐すぎんだろ』

「ハイハイ、そんなことはどうでもいいんですよ、重要な事じゃない」

『不憫な人のネタは止めろ』

「色んなネタやメタをぶっ込んでお送りしますよー。そしてゲストという体の賑やかしは本編及び原作よりこの方々です」

「やつほー、いつも可愛い、高町なのはなの！」

「ど、どうも、フェイト・テスタロッサです」

「将来有望至極美人、八神はやてちゃんやで！」

「フェイトちゃんよろしくー」

「よろしくね、イツキ」

「なのははは!？」

「わたしは!？」

「私もみんなをかまえるほど器用じゃないんですよー」

『どうでもいいけど開幕早々お前ら、なんか近くねえか』

「ですね、みんな離れて。今此処こたつ、4面あるのに1面（私の所）に入つてこようとしないで。まだ本編では私達、そこまで親しくないし、この関係性が出てくるのはまだまだ後なので。あとタグにまだ“百合”も“ハーレム”も付けて無いですから、控えてくださいー」



「このままがいいの!」

「このままじゃダメかな?」

「わたしは足が悪いからこのままがええな」

「狭いのと話が進まないのとで駄目です。あと此処では貴女の足は全快済みですよはやてちゃん」「チツ」

「ヒロインの一人が舌打とかししないで下さい。ハイ、それぞれ名札ある一角に戻って、終ってからなら良いですから」

「「はい」」

「では始めますよー。〃 どうせ誰も気にしないけど、作者もどこで出そうか若干扱いに困ってる設定〃 を質疑応答形式っぽくして吐露していきまーす」

「「いえーい」」

「ではまず『メーッル』：なんでDX方式? 『なんとなくだ』：いいですけど」

Q、主人公の容姿とか能力の詳細をば

「え？要ります？コレ」

「必要だと思うよ？他の人たちと違って明確な元がないし」

「無印終わった後にその時点での設定吐露も在りますので簡潔に行きますね。」

・ 全体↓モバマスの雪美ちゃん。だけど最近はF G Oのきよひーの方が近いと考える。前髪パツツンではない。目つきはやる気ない半目。

・ 身長↓124cm。

・ 髪色↓深緑。基本的に黒に見えるが光の反射で緑に見える。

・ 声質↓F G Oのマシユ。

・ 魔力光↓深緑。

現状は以上です。能力に関しては、まだ明かせません。

”決して詳細設定してない”訳ではありません。のであしからず。

一つ出せるとすれば、

『何かしらの希少<sup>レアスキル</sup>技能で貰ったものは一つとは限らない』

ぐらいいです」

Q、なして見つけたりたくないのに”変身魔法”使わんの？

「それはなのにも気になったの、もしかして使えないの?」

「使えますよ?むしろ使えない訳がないです」

「え?だったらなんで?私の時もわざわざリニスとアルサナに接触させるような回りくどい方向になってて手を出し辛い?」

「そうですね、どうしようかと思いましたが。でもアルサナという便利キャラが居るので『オイツ』どうとでもなると考えたのが一つ」

「他にもあるん?」

「まあ一番の理由として作者的に

「確かに変身魔法を使えばバレにくく簡単に物事を進めれるだろう、しかし身バレの危険性をはらんで居る方が展開に波を持たせやすいと考えたわけだ。∴正直に明かすと、ソレ使っちゃうと有名所な他作品様方々と被るから辞めた」

「ただそうですよ」

「基本設定からして今更感満載やのに、変なところで気を使ってるんやね」

「そういうのを〃無駄なあがき〃って言うの」

「でもそれが採用されてたら、私達、大人時代になるまで、それになった後もイツキ本人とは全く会えない方向になるよ?」

「……………」

「ハイ、次行きますよー。そんな悲しい顔しないで、どうせ神（作者&設定上のアイツ）によって巡り会わされてたと思いますから大丈夫ですよー」

「やよなー」「だよねー！」

Q、TS要素、空気じゃない？

「ハイ、その通りですね、次ー」

「え?!もうちよつとなにか無いの!?!」

「無いです。作者がTSジャンルを好きっていうだけで入れられた設定なだけなのでプロットでは男性の予定もありました」

「一人称が“僕”とか精神面で“俺”とかにすればよかったんとかちゃうの?」

「考えては居たようです。でも」

【安直過ぎるよね（・ω・）それに僕っ娘はマテ娘に居るし、中身“俺”で続けられるほど気が強い設定ではなかった】

という事で却下したようです」

Q、 “色んな要素／因子”とあるが、実際どれだけ入り込んでるの？

「ありったけの夢がかき集められています」

「雑やなー、もうちよい詳しく言った方が良いんとちゃう?」

「なら現状明かしても大丈夫な要素たちを出しますね。・アニメマス、・ペルソナ4、・h  
ack／／G・U、・Fate／ExシリーズとGO、等です。正直これだけあれば多  
少無茶な設定でもゴリ押しこじ付けが可能だと作者は考えている様ですよ。あとアイ  
マスは趣味です、生き甲斐です、あんたんさせて下さいお願いします」

「私たちがその要素によつて、何か特殊な力を身に付けることはあるのかな?」

「今の所は予定に無いそうです。ただ今後の展開煮詰まり次第ではインフレ速度をクリ  
アマインドする予定もあるそうですよ」

「因みに要素／因子って括つてるけど、どんな感じなの?」

「“その作品に出てくる特殊能力・特殊技能及び、それに準ずる効果を持つアイテム”ま  
でが作者の考える“要素／因子”の括りですね。今まで出てきたモノで例えると、某う  
たわれし御方の仮面は、仮面としてならただの変装道具／衣装で、それに神化と言いま  
すか力の解放や身体／思考強化の能力まで追加されたらそれは要素／因子の括りに  
引つ掛かる感じですよ」

Q、男性オリキャラ陣は誰狙いとかあったりするの?か

「あります。初期設定では、それぞれの陣営の娘達を狙つて、私がそれを邪魔して展開

だけでなく関係性も元に近づけるといふモノでした」

「へー……ん？」でした？」

「そう、過去形。所詮は初期設定。書いてる内に変わって行った様です」

「具体的にはどうなったのかな？」

「……いえ、その、言わなければだめでしょうか」

「何その仕草、あざといの！それに困った表情がとても可愛いの！今すぐ抱きつかせて  
!!」

「だ、ダメだよなのは！私もその衝動に駆られそうだけど抑えてるんだから、一人だけズルいよー！」

「ふっふっふ、甘いな、二人とも、わたしは既に移動してるでー！」

「ツ！みんなして私より大きいんですから、よっかからないで下さい！潰れます！」

『ハーレムだな（笑）』

「うっさい！折りますよ！はい、みんな離れて！」

「とりあえず、今後の展開のネタバレにも成りますので、ソレについてはいざれ出てきます、ハイ、この話終わり！」

Q、1つの話の中でも書く視点人称が一だったり三だったりでめちやくちやなんだが？

「それについて

【その日の気分によって書ける視点人称が変わってくる。出来れば自分も直したい】

だそうです。書けるときに書かないからこんな事になるのであれば寝る間も惜しんで仕上げればいいのに」

「なのはたちの口調が安定しないのは？」

「仕様です、作者の独断と偏見に基づいた、その他色々な創作物からも染み付いたイメージの影響ですね。」

【私が思う君たちが、この作品での君たちなのだ！】

という頭の悪いコメントも頂いておりますので、おそらく直せないかと。私もくだけた口調にしたいんですけどね」

Q、マテ娘は出るの？

「作者がB o A及びG o Dやってない&よく知らないのでキャラブレ起こした娘達になってもいいなら出る分岐はあるみたいですよ」

「もし出たらなんてなのは達はあの子達をなんて呼べばいいの？」

「さあ？innocent基準にでもなるんじゃないですか？」

『innocentもよく知らねーらしいぞ』

「ああもうこれ駄目ですね、出ない可能性の方が現状高いです」

Q、管理局に対してどうするの？原作時点での在り方からして癩に障るし面倒だし潰す？

「潰しません。SttS編無くす気ですか！」

『まあその方向のルートもあるにはあったが、今世の両親を局勤めにして色々張ってるからな』

「ハイ、余計なこと言わない」

Q、なして主人公の親がミッドの人っぽい事書いてるのに、地球にいるのん？

「そんなの、無印に合わせる為で、深く考えてるわけないじゃん

『伏線とは張りたくて張るんじゃない、張ってしまうのが創作者』という言質を』

割り込んでくるの止めてください。だとしても実際どうなんですか？」

『考えては在るみたいだが』



【正直出せる（描写する）所が、流れるにどうも出なさそう」  
らしいぞ』

「つまりは“何も考えてない”に同義ですね。此処見てる人多くは居ないとは思いますが居ましたら原作者の皆様は気を付けてくださいね」

Q、救済つてめっちゃ改変に当たるけどその辺どうなの

「絶対に読んでる人は疑問に思う事ですよ。ええ一応言い訳は用意して在ります」

「どんな風に？本来だったら私とリニスは再会できるはずが無かったわけだし」

「えーつとですね。“世界を騙せ、見た事、起こった事を、無かった事にせず、認識変えず、事実を変えるのだ”ツと言うことです」

「つまり、どういうことなの？」

「簡単に説明すると“起こるべき事象”を起こして、その中身を変えます。この言葉が出る原作で言うなら“血溜りで倒れている人物”を“特定の人物”が目撃する事がキーであり、“血溜りの人物の状態はキーという訳ではない”という事です。リニスで例えるなら“リニスはフェイトの教育を終えて、何処かに消えた”というのが原作における描写だとすると“消えるまでがキー”であって、“消えたのはその世界からあつて存在そのものではない、後に別の世界で生きていた”というifに組み上げるんです

よ」

「でもソレだと”助けた”までならいいけど”再会させた”だとマズインじゃないかな？」

「ええそうですね。まあ”オリ主・他転生者”が居る時点で半端じゃないIFですので今更感がありますが、あくまで”流れを沿わす”事を主柱として据えて居ますので、簡単に言えば”イベントが原作どおりに近い事が起きる”を重要視してますので。それに完全に元に沿わずと、ソレはソレでダメな筈なので元々のプロットでもA’s中盤以降はイベント事以外、ほぼほぼオリジナル展開に成って行く予定でした」

「今はどうなの？」

「最後の方でお答えします」

Q、アイテム系って何処に持ってたの？主人公誰よりも小さいみたいだけど

「身長はこれから伸びるしッ！」

『フラグかな？』

「まあこういうのこそ”ご都合主義”で片付けたいですがちゃんとした独自設定があります、ある程度こじつけですけど」

「デバイス自体が、セットアップ前のコアモードからセットアップした際に、レイジングハート R Hで言うところ、コアでは手に収まる宝石珠なのに発動すると杖になり、モード次第でパーツの増減があるので、そもそも余剰収納する機構があるのだろう。つという体の元、某空を飛ぶマルチプラットフォームフォーマルスーツ作品の如く、粒子収納領域が在る筈という設定の下、それ専用の文字通り倉庫ストレージデバイスを創ってその中にです」

つと言う事です。王の財宝的なレアスキル付与されてる訳ではないです」

「ハイ、長らくぐだぐだしましたが、次で最後です」

Q、大体一つの話にどれだけの時間を掛けて作成されてんの？

「これに関してですが」

「大体、流れが決まってるのは1日〜2日、オリジナル要素詰めると1週間前後、最長で半月掛かったものも在った。もはや展開がオリジナルに近づきつつあるから、基本原作沿い”を外すかもしれない。それはそうと執筆速度を上げたい」

とのことでした」

「一番かかったってというのはどれなん？」

「それに対する回答はこちらに」

【#8及び#9。あれらは元々一つの話に収める予定でしたが、長くなったので分割、すると思つてた以上に短くなったので増設を繰り返したら時間かかった】

らしいです。因みに注釈としてこんなのも預かっております

【実はここで、考えていたプロットと明確にズレた。元々、プレシアさんは原作通りの性格や態度や行動で原作通りに退場し、其処を秘密裏に主人公が助ける予定だったのだが、そうなると作者の考える“罪”と“贖罪”に対する認識的に救済の為のルートが作れなかった。仕方ないので、彼女にはこの舞台裏時点でも此処では語れない裏設定により浄化されて頂いた】

ですって」

「いきあたりばったりな創り方してるからそういうことに成るの」

「そうだね、計画はちゃんとしないとダメだよ。私もなのはに同意だよ」

「因みにこのプロットズレという改変が無ければ、フェイトちゃんはリニスと出会う、と言うより、リニスが会って話し合う事を考えるルート自体も在らず、みんなが私に出会うのはSttS編の中盤以降というプロットでしたが、それについては何かありますか？」

「グツジョブなの！よく改変したの！」

「そうだね、なのは！そのおかげで私達も早い内から仲良くなれたもんね」

「まあそんな二人とは裏腹に、わたしは最初っから仲良くなってるけどな？」

「そんな得意気になってるはやてちゃんに一つ面白いコメントがあります」

「どんな？」

「こんなのです」

「実はこの改変により出番が増えたのが、はやてちゃんです。初期プロットでは最初の閑話の図書館での出会いからA、S編まで一切出番が無く、夜天の書に関する独自設定も闇に葬られ、繋がりは殆ど消えてました。そうならなかった理由は”改変によってフェイト陣営を描く機会が増え、その裏と表というかいつきとアルサナの視点で各陣営の描写を入れる余裕（無駄）が生まれた為なのだ」

との事ですよ？」

「あつぶな！わたし、そんな理由で出番と繋がりの、1/0の明暗わけてたんか!？」

「そのようですね。当初のプロットでも”StS中盤から関わるが、関係性はこうなる予定は皆無だった”みたいですし」

「その予定やったから”原作沿い”とか付けてたん？」

「そのようですね。まあ”基本”ですし？書いてる内にオリジナル入れたほうが扱いや

すいと気が付いたみたいです。厳密なラインは判らないですけど、展開自体は其処までズレて無いですし、合っては無いが間違っては無い、状態ですね」

「『原作沿い』って難しいね、バオージ・・・」

「居ない体で語ってきたのにいきなりなんですか、黙ってください」

「さて、長々と垂れ流しましたが、そろそろお別れのお時間ですね」

「まあ基本的な何処で出す予定も無かったか、設定集みたいななん作らん限りは出んかったもん出ただけやったな」

「そうですね・・・評判が悪ければここは虚数空間に放逐されちゃいますので。まあそうなるっても、章毎の終わりにソレまでの設定集を出す予定ですので、問題ないですが、そうならない事を祈りたいです」

「なんでそうなっちゃうの？」

「台詞のみの回しつていいいますか台本形式つて、作者の私見ですけど、賛否両論分かれるって言いますかむしろ苦手な人が多いと思われてますし、メタですが規約的にもグ

レーですので」

「それなのに出して良かったの？」

「駄目なら駄目で批判感想は受け付けますし作者的にも

【批判感想は豆腐メンタルですが受け入れます、むしろ来てない今までが怖かった”これでもいいものなのか？”と不安で仕方ない】

という様ですので」

「おそらく、これつきりやろな」

「そうですね、もう無いとは思いますが。楽なのは楽なようですが、この様な形で出すよりはちゃんとした設定箇条書きで出されるか、この形式自体は『活動報告』の方にも行くんじゃないでしょうか？」

「本編では最終までの登場予定の人物リストの半分もまだ出てないから、こういうおちやられた場はもつとほしいの！」

「無茶言わないで下さい、なのはちゃん。ハイ、最後締めりませんが、これにてオシマイです。長らくお届けしましたこの空間、機会はもう訪れないと思いますが、いずれ本編もこのノリに近くなることもあるかもしれません、まだ未定ですが。それではばいばい」

「「またねー」」

「あつ、機会無い可能性の方が高いので”またね”はマズイです。”バイバイ”でお願いします」

「あらためまして、ばいばーい」

「「「ばいばーい」」」

「ところで、この時間軸っていつなん？」

「闇の書事件後しばらくした後の空白期です、因みにこの後、みんなは原作通りですが、私はなんやかんや在る予定らしいので、ある時期から会えなくなり、再開は”あの組織が設立する手前”らしいですよ」

「「…え!?!」」

プツツ

---



## 導入編

### #00 ぶろろーぐ

どうやら自分はいつの間にか眠っていたようだ、ふと目が覚めてその眼に飛び込んできたのは

……………知らない空間だった。

さて、一度は言ってみたいテンプレも終らせた所で現状の確認でもしてみるところでしょうか

先ず周りを見渡す、其処にはただただ真っ白な空間が広々と端など無いかのように広がりに続いている

次に何故自分はそのような場所に居るのかを思い出そうと試みる

記憶の最後にあるのは……PCを弄り、ゲームをして、そして……そして？ 霽が掛かるかのように鮮明さを得ない、つというよりは思い出せないと言った方が正しいか

その次に自分が立っていると思わしき足を触ってみる、とくに何の感触もしないが固いと表現できる程の押し返す感じはする。普通の地面のようにも思えるが一切の凹凸も無い、かといつて滑々としている様でもない

最後に自分の体を確かめる。こちらにも触れる、まごう事なき自分の体だ  
服も思い出せる記憶の最後のとおりの服装のままだ

色々触れる事から触覚が生きているので自分が死んだわけではないと思うのだが、近年の幽霊の類はアグレッシブなので物理干渉などは思いのままだろうと考えると定かではない

掌を上にかざして透かしてみる……透けてはいない、よし大丈夫のようだ

「ちよいちよい、大丈夫じゃないよ」

おや？どこからか声（？）の様なモノが聞こえてくる、幻聴か？

「幻聴ではないよ、ちゃんと」私「がキミに話しかけているんだ」

いや、しかし、聴こえてはいても俺からはどこを見回しても誰も居ないのだが一体ど

ういうことだ？

「何故、前後左右しか確認しないんだい？キミが見れる空間はまだ上下に残っているじゃないか」

人間は浮くことが出来ないし、地面に何の手立てもなく潜る事も出来ないのだからまずその選択肢は無いだろう

何を言っているんだ、この声（？）の人物は

言われたからには確認するが……何も無いし誰もいない

「ふふふ。甘いね、言われたからといってソレが真実であるとは限らないのだよ」

などとのたまう声（？）の人物

先ほどから脳内に直接響いてるので“言う”といった表現で伝えられているのか甚だ疑問なのだが、ソレはさておき、この状況の説明が出来るのであれば、判らない俺のために早急に説明をして欲しい

「少しは自分で考えようとは思わないのかい？」

考えた上で判らないのだから、説明して欲しいと思っただけでも？

つと言うよりも、先ほどから俺は一言も喋っていない、常に考えているだけなのだが

「それはそうだよ、私はキミの思考を直接読んでいるからね」

声の人物は確実にドヤ顔をしているはずの抑揚でそうのたまう

それならそうとさっさと説明を要求する！

「せっかちなだね、まあ私もそろそろ飽きてきたし、説明をすると思いますよ」

さんざん自由にして〃飽きた〃って……

俺は喋らなくて大丈夫なのか？というより俺は喋れる状態なのか？

「キミは喋らなくて大丈夫だよ、私はキミの考えが直接読めるからね。そして次の疑問だが、キミは喋れる状態では無いね」

「ッ」

試しに声を出そうとしてみたが、出たのは空気が漏れだす様な音のみだった。どうやら確かに喋れはしないようだ

ならば今の俺はどういう状態なのだろうか？

肉体はある、触覚はある、聴覚……は多分大丈夫だろう

「その疑問にもさっさと答えてあげよう、展開を進めたいからね」

メタいですよ、謎の声の人物さん

まあ、俺も確かにさっさと伝えて欲しいです

“自分が生きている状態なのかどうか”を

「簡潔に言うなら、キミは“生きている”状態ではないね。

状態は、まあアレだね”一つの生を終えた後の状態”とでも

表現しておこうかな？」

——……ああ、つまりは“亡くなった”的な状態ですか。

確かに最後の記憶があまり鮮明ではないですが、死因とかつて聞けたりしますかね？

「うーん、死因かあ……心臓発作的な？」

——いや“的”ってどういうことですかね。ふわっとし過ぎでしょう

原因不明だと捕らえておけばいいですかね？

「まあキミがそれで良いなら、大丈夫だけど、やけにあっさりしているね？普通ならもつと驚いたり、取り乱したりするものだと思うのだけれど」

——まあ普通の人だったならそうでしょうね。でもあいにく、普通じゃない自覚はあるのでそういうのは無いですよ、コレでも自称オタクですからね。

「それがなんの関係があるんだい？」

——何があっても『仕方ないか』で片付けて、楽しむように努力できます（キリッ

「いや、そんなドヤ顔で言われてもね。でもそれなら私もそろそろ本題を話そうと思っ  
ていたし、理解してくれやすそうで助かるよ」

まだ本題にも入ってなかったんですね

「そりゃあね、現状説明もままなっていない気がするけど、やっぱり」飽きてきた」から  
ね」

飽きたかどうか重要なんですね、俺もそういうのわかりますけど

「うんうん、いいね。キミはやっぱりいいね。キミを私の元に『引き寄せえられて』ホン  
トに良かった」

——ん？それは一体どういうことですか？

「うん？ それはね」自分と同じような考え方が出来るモノだと心の距離が近しくな

りやすい、扱いやすい。そして共感する。つという事ができるだろう、そういう感じさ」

——……なるほど、つまりそうなると俺の死因はそもそも偶発的なモノでは無かった感じがしますね。誰かの、それこそ声のアナタと同じ存在の様なモノの仕業だと

そう思つて声がするほうに姿勢を向ける

「……そこまで気がまわるとはね、ますます気に入ったよ。それじゃあ、キミの現状とこれからについて説明するよ」

そう声の人物が言い終わると、

目の前に妙齢とも取れる、幼いとも取れる

男性とも取れる、女性とも取れる

その瞬間瞬間で姿が換わつて見える、けれども“人”の形であることは認識できる何かが現れた

「ああ、私の姿は今のキミには正しく捉えきれていないだろうね。他人の認識によつて変化する。君達の認識で言う“神”は……と言うよりも、キミ達人間がより高次の存在



を認識しようとするそうなるようなんだよ」

つまり、アナタは自分が神だと、そういう次元の存在だということですか、まあそういうモノだと思っておきますよ。しかし”認識次第”か、それならば……

「そうなんだけど……おや？ 私の姿が固定化された？ これは……男性？ キミには私は男神とみるのかい？」

こういうテンプレな展開だと女神様な感じが多いですけど、あえて男神で！ っていうのは建前でなんかノリとかが俺自身に近いので男だろうと。あと多彩では無いけれど強大な力を持つので男神が多いと思っただ次第です

「自分がオモい対話し対面するのは、男性の方がいいと思うのかい、なるほど、なるほど。私自身はどちらでもあるのだから変わらないけどね」

ん？なんか言葉練りが意味有り気なんだが

「うん、よし、それはそれで。っと、さてそろそろ話を進めるよ。キミを今この場に呼んでいるのは、所謂“転生”させるに当たったの話なんだけれども」

転生？あの創作ものとかにある神様転生とか言う奴ですか？

「そう、それぞれ。つでだキミには“特典”と言われる、自分に付け加えられる“自由設定”を3つ程選ばせてあげよう！」

え？ちよ、話が進みすぎなんですけど、因みに行く世界とか選ん

「転生先の世界の選択権はキミには無いよ。行く先は『リリカルなのは』が基準の世界だね」

こちらの選択肢などない怒涛の展開である

……選べ無いんですね、決定済みなんですね。バリバリ戦いがある世界じゃないですか。

いや、でもまで、魔力資質を特典でなくして関わらない様にす

「あつ、それは無しで。キミには否が応でも関わって貰う予定だから」

ええ……二次創作も好きですけどどちらかと言えば原作展開遵守派なので関わる運命に在っても原作展開変える気は無いですよ俺

「え〜つとだね……その“原作展開”に関わってくる事なんだけども……」

微妙に顔を背けながら非常に言いにくそうに言いよどむ目の前の自称神的存在

……なんですか、その反応。まさか？

「いや、なんと云えばいいのか、ね。あくまで“基準世界”っていう感じで、リリカルなのはの人物は皆登場するんだけど『必ず原作をたどる訳ではない』っていうか……な？」

それつてもしかすると大前提として“IF化”する可能性のほうが過半数ということですか？

「ありたいのに言い表せばそういう事かな？　だから特典を選ぶ場合はその辺りも視野に入れて選んだほうがいいと進言しておくよ。ちよつと色んな要素が混ざりすぎて先が見えなくなっているんだよね、ハハハ」

そう、あつけからんと言いつ自称神

余り素養が無さ過ぎると、原作を辿らせる為の介入も出来ないという事か

最悪、最初の事件の時に地球そのものが終る可能性もあると考えてもおかしくはないか

「そうだね、その可能性のI Fも十分に在り得ちゃうんだよね。その為に私は一先ずは誰でもいいからと引き寄せた。そうしたら、一発で理解力の面白いキミが来てくれた。

そんな急展開に対する理解力の在るキミだからこそ出来るだけ関わって欲しい、そして出来れば流れだけでも正しい感じに持って行って欲しいのだけれど……ダメだろうか？」

いいですよ。流石に転生すれば、其処がどんな世界であれ、元がアニメや小説の世界でも、俺にとっては現実に成るわけですからね。コッチが一方的に知っているだけだと

しても、本来生きるはずの人が亡くなるのを黙って見過ごすのは目覚めが悪いですからね

……：「そういえば」色んな要素が」って言っていました。俺以外にも俺のような転生者がいるとか？ そういうのを伺っても？

「スマナイ、ソレについては答えられない、というより、わからないんだ。ただ言えるのは先述の通り」私が逢ったのはキミが最初だ」つとことだけだ。元々どんな形であれ世界というモノは」私の様の存在が管理しているわけでは無い」。ただ其処にそういう箱庭があるというだけだ、そしてキミを送ろうとしている様にソレに干渉できる存在というのは私だけでは無い。他の要素が入り込む余地は多分に存在しているんだよ。ソレが私と同じような存在によるものなのか、元からあったものなのか私にはわからないけれどね」

まあ、もしも本当に俺以外に転生者が居たとしても、そいつ等に任せるといふ選択肢も増えるという事ですからね、俺の負担が減るのならそれに越した事はないですから。そうなると、原作で亡くなっている筈の人たちが生存してくる、もしくは自分やそういう存在が偶発的に助けてしまう可能性も出るという事か

それがどの程度影響してくるかは、わからないが俺自身もできれば助けたいとは思  
う。だが、あくまで俺自身は出来る限り原作の流れを重視することに努めよう

「それで、キミはどんな力を望むんだい？一応、私がお願いしている形をとっている立場  
だからね、結構無理めな事でも可能にしてみせるよ」

チート級の能力貰って無双したい訳じゃないんでそういうのはちよつと……

それに多くの要素が入り込んでいる世界にこれ以上原作以外の不特定要素を潜り込  
ませるのは憚はばかられますよ

其処で生きて行こうとしている俺的にも勘弁願いたいですね、その要素って言います  
か因子が入り込むだけで起こる事件も増えるだろうし

じゃあ先ずは1つ目だが

・ある程度の魔力資質  
を下さい。

俺はそういつて1つ目の特典を提示する。魔力素質自体は2期以降バトルがあるの  
で無いと関われない事に成ってしまうので自動的に付与されそうだが

あえて自分から“ある程度”（そう、個人的にはクロノ君程度）を求めておけば原作のSttS編でも力不足という事で前線に立たずに関わられると打算した結果だ。

「ある程度？ そんなモノでいいのかい？ 望めば原作にある、え〜つと資質ランクSSS？ 相当とか、原作にはないがそれ以上の限界突破も軽く与えることができるよ？」

事もなさげにとんでもないことを言い放ちよる、先ほど俺が言ったことを聞いていたのだろうか

いや、さつきも言ったがチート貰って無双するつもりはないんで、それに、あまり力を持ち過ぎると事件に巻き込まれませんからね、強者故の運命など要りません。

「……よし、わかった。その辺りは“私の観点”で調整しておこう。それで？ 2つ目は何にするんだい？」

また言葉の端に影を含んだな。まあいいだろう。

そうだな、2つ目は

・その世界で出来る限りの技術の技量

を貰いたいです

「ん？言い方がちよつと妙だけど、どういうことだい？　そしてどういったモノだい？　スマナイが付与する側である私が認識を上手くしていないと出来ないんだよ」

そう聞き返してくる、これに関してはちよつと考えあつてのことだ

理由としては、前提として“展開方向性の修正は行うが表舞台に立つつもりはない”　つてのが先ずある。だれが好き好んであんな戦いの世界に身を投じるものか、それに俺というイレギュラーがどれ程の影響力を及ぼすのかも、行つてみないとわからない以上、過剰な力は要らない。

しかしそうは言つても全く関わらないのはもはや無理、だが表舞台には上がりたくは無、なら影から支えるしかないだろう。でも影から支えるとなると正規のサポートなどは無いに等しいだろうから、だからこそデバイスの修理や調整、作成などは自分である程度行わなくてはいけなくなるというものだ、そしてその作成技術もだが、魔法自体を扱う技量もないと隠れながらの支援などできない。つと考えた上で判断しての要  
求能力だ



「なるほど、技術力や制御力があれば隠れながらも出来ると。しかし、そんなのでいいのかい？ 私なら」いろんな作品で出てきた機械類やアイテムを作成できるようになる力」とかでも出来るよ？」

まあそれも便利ではあるんですけどね、俺はコレで、コレが良いんですよ、出来ますかね？

「うん、出来るよ、じゃあコレも」私の観点」で調整しておいてあげよう。さて、じゃあ最後の3つめはどうする？」

なんか適当に稀少<sup>レアスキル</sup>技能で。

「……最後だけ適当ではないかな？」

正直、前者の二個があれば割と何とかなる気はしますし、何とかしますよ。

稀少<sup>レアスキル</sup>技能は何というかその世界で自己を証明するモノ唯一無二が欲しいって感じですかね

「ふうん、まあ適当でいいならコツチで見繕っておくよ。それにしても見事に要素がリリカルなのはに沿っているモノだけだけど、本当に他の作品とかのモノを欲しいとか思わないのかい？某学園都市1位さんの能力とか、某金ピカ王の宝物庫とかでも出来るんだよ？」

要らないですよ、ホントに。何度も言いますがチートオリ主になりたい訳でもソレを使つて無双するオリ主然とするつもりとかも無いですからね

あと、付け加えるなら、自分から更に要素を付け加えて、余計な出来事を起こしたくないというのが在りますから

要素があると時期によってはその作品の出来事が丸ごと関わってくる可能性も出てしまいますからね、2期から3期の間の空白期とかに

そう俺は答える。こればかりは本心からだ。余計な要素を持ち込んだ挙句、巻き込まれるとか勘弁願いたい

某学園都市の要素を持ち込めば、クローン体いっぱい居たり、そもそも都市そのものが存在しかねないし

某金ピカ王の要素を持ち込めば、魔術師が存在し聖杯戦争など起こりかねん。リリカ

ルな原作の物語に出てくる以上の直接的な大災害必至だ。

「わかったよ。キミがそこまで考えて選んだのなら、何も言わないさ。まあ与えるのは私だから、魔力資質規模や技術の範囲とかは私の匙加減で与えておくよ」

適量でお願いしますね、適量で

「さあ、いよいよ、お別れだね。出発の刻、そして再誕の時だよ。キミの新しい人生に幸あれだ！」

そう言うと、後ろの方から光が出て来た

振り返ってみれば扉の様なものが存在していた

……存在していたのだが、他にも余計に色々

ちよつと待とう。いや、行くのはいい。つが“どれ”が本命かによつて必要な覚悟

の分量が大幅に変わってくるのだが

「ん？ さあ、気にせずドンと行くがいい」

だから待つて欲しい。目の前に在るのは扉だ、だが扉だけではない

まず真正面ぶ在るのは言った通り『扉』、本当にただの扉、上部が半円形の両開きの『扉』

おそらくここを開いて通れば次の瞬間には生まれ変わっているのだろう

そして『扉』の右側、某野球ゲームの主人公君が『バット』を構えて待ち構えているその対面、つまりは自分の後ろを見れば空中に『次の人生<sup>ホ</sup>に向か<sup>ム</sup>って飛び立<sup>テ</sup>』と妙な字列に当て字が書かれた下矢印付きの看板とその下部に『穴』

打たれたらあそこまで飛んでいくと、そして生まれ変わると

更に『扉』の左側、ウォータースライダーの様な入り口がある。滑って行けと。そして滑り降りれば（ry

ど、どれが本物なんだ、いや、自称神は俺と同じような性格といった、もしかすると全部偽者な可能性も在るな

「どれかは本物だからさっさと逝きなよ」

字が違う気がします！ あと自分はもう逝った後だから此処にいるのでは!? ええ

い、いつまでも考えていても仕方ない、ままよ！

目の前の『扉』が一番だと考え、＼裏側に回って＼開こうとする  
そして扉が開き、光があふれ出して包まれていき

扉を潜ろうと踏み出すその瞬間に立っていた足元が真円にくぼくと擬音が聞こえる  
かの勢いで開ける

へ？

「おめでどう、正解は＼扉の裏側にある落とし穴＼だ。見事にそちらに行ってくれたね、  
考え抜いて用意した甲斐が在ったよ」

襲ってくる浮遊感、なぜか急に感じる重力の力

抗うことが出来ずに落下していく俺  
ちつくしよおおおうがああああ！

「それでは、本当の別れだ。〃 色んな意味で〃 第二の人生を楽しみな」

意識が途切れる前に最後に見たのは

悪戯が大成したときに魅せるような満面の

それはもう満面の笑みを浮かべた自称神の笑顔だった。

# 無印編

## #01 確認、開始

「はい、それではみなさん、おはようございます」

「「おはようございます」」

そういった挨拶から始まる今日といった一日。

本当に何気ない平凡な一日の始まりだ。

ここ〃私立聖祥大学付属小学校〃で行われる授業のはじまり。

懐かしいものである、学校というものもそこでの授業というものも。

「それじゃあまず、出席をとるぞ〜」

……あつ、どうも皆様改めまして私です

突如開いた穴に落下、転生させられた者です

え？一人称が違う？授業を行っているから違う年代に転生したのだったか？

前者はやんごとなき事情があつての事で、後者は違います。ちゃんと主人公と同年代に生まれてます

ではなぜ一人称が違うかつて?……それが今世で私が一番悩んでいた問題故なんですけども

「次々、かみあり神在いつき〃ちゃん〃」

「はい」

……ええ、つまりはそういうことです。

どうも皆様改めまして

〃元〃俺こと

〃現〃私でもあります

私立聖祥大学付属小学校の3年生、9歳で、名前を神在いつきと申します  
 どういったわけか、〃女の子〃しています。

□~~~~~□



「ふあ……やっとお昼ですか……」

か  
おもわず欠伸が出てしまう、現在4月、春眠暁が何とやらかな季節と言うだけあります

しかしなんだかんだ人生のやり直しというのは、ある意味で楽しいですね

二度と経験出来ない事もこうして体験しなおせるのですから

まあ、気を取り直して、少しばかり現状の説明を……

なんですか？ “普通は前日譚から始まるじゃないか”ですって？

いざれ語りますよそれこそ色々遭ったんですよ……色々

そんなことよりも先ですが

TSしている原因はわかりきっています。

私を  
あの原作に関わって何とかしてほしい神様が、ある程度陰ながらしか関わる気のない

でしよう  
無理やり関わらせる為、それとなるべく関わった上で関係性を最小限にする為の処置

・オ리지が関わる

←

・オリ主がチート（転生特典）の力で頑張る

←

・なのはちゃんの気持ち（？）がフェイトちゃん以外に傾く

このテンプレートを避ける為だけの為に性別を変えられた気がしてなりません  
本筋だか二次創作だかもうどっちでも在ったような無かつたような”なのフェイ”  
とかある時点でもうどうしようもない気がします

あと考えられるのであれば、奴を男神と見たことでしようかね

別に男が好きなのわけじゃないのに……威厳ある神と言えば男神でしょう……

ただ、それだけなら納得できたんです。私”だけ”が転生者という特性持ちの唯一の  
存在的な感じであるのなら”仕方ないか”っと。

……納得できないんですよ、どう見ても転生者らしき方が他にも居るんですよ

可能性としては示唆されていましたが、でもまさか居るとは思いませんでした

あくまで、まだ”かもしれない”の範囲に留まっているのですが、なのはちゃん達と  
同じクラスであるという事。

更に、容姿がですね、どう見ても他作品の主人公君にそっくりなんですよ。

他人の空似、本当に似ているだけかもしれませんが警戒・用心しておくに越した事は  
ありません。

その容疑者（そつくりさん）？は現状二人程居ます。

先ず一人目、名前は番神悠次<sup>つがみゆうじ</sup>

薄暗い灰色の髪の毛と灰色の眼をした彼

今にもそつとしておこうとか言いそうな見た目です。

……どうみてもペルソナ4の主人公君にそっくりなんですよ

名前もなんとなく似てる感じがしてるんですよね、アニメ版やその後の作品の彼の名  
に。

まさか“ペルソナの能力”を特典で選んだりとかしたら成ってしまったのでし  
ょうか？

もしそうなら、この世界にペルソナ3やペルソナ4の舞台となった地もあるかもしれ  
ないですね。

時間があれば調べて見てもいいかもしれませんが、巻き込まれたくないので。

私自身、前世の記憶として4は知っていても3は知らないですからね。“世界が地続

き”程度の知識しかありませんし。

そして二人目、名前は崎神亮夜<sup>さきがみりよつや</sup>

明るめの灰色の髪を後ろでハネさせて紅色の眼をした彼

今にもトライエッジ云々言つてきそうな見た目です

……hackのハセヲ君に見えるんですよね。

でも名前はハセヲ君の中の方に似てる気がします、確かそんな感じの名前だったような記憶がありますね。

彼は何でしょうね？”ゲームに出てくる技全て”とかでもお願いしたんですかね

？でもそれならあの容姿には成らないでしょうね

おそらく他の特典枠で憑神<sup>アバタイ</sup>もしくはそれに關する能力でも貰ったとかでしょうか？

アレ貰つても使えない気がするんですけど、あつても闇の書の救済には使えるかも知れませんか。

これで確認項目は更に増えたんですよ、この世界のパソコンなどのコンピュータ関連が共通OSの「ALTIMIT OS」だったりであのオンラインゲームがあつたりしたら、クライシス待ったなしなんて事も在り得ますからね。

私の家にはPC関係が一切無いので今まで気にしませんでした。コレも時間があれ

ば確認しておきましょう。

ただ私／＼G・U・以降しか知らないんですよ。

まあそんな感じで現状二人ほど確認できてます、まだあくまで一可能性<転生者かも  
しれない>の域を出ませんけど。

でもそのどちらも男性なんですよ、なんで私だけ……

特典で男性主人公の作品のモノでもお願いしておけばよかったですかね？

しかし過ぎたことは仕方ありません。ホントもう仕方ないんです。そう思います。  
思う事にします。

私自身の見た目ですか？普通ですよ、普通。別作品の特典を貰ったわけでは無いです  
からね。

その二人がまだあくまで“可能性”つというのも、物語の始点に至ってないというの  
もあって確認が出来ていないのと、彼らが、その、“踏み台君”や“かませ君”の様な、  
唯我独尊な行動を一切しないのでわからないんですよ。

何かリンカーコアの反応などを感知できる機械——この世界ではデバイスですかね  
——でも作っておけば良かったですね、魔力反応自体は私でも一応感知はできるのです  
が発せられたモノしかまだ感知できないんですよ。

□~~~~~□

しかし“物語の始点に至ってない”とは言いましたが、それは私が“なのはちゃんとユーノ君が病院前で再会し変身した夜”を始点だと捉えてるからであって、ユーノ君の封印逃し自体は昨夜の内に終ってるんですよね。

放つて置いても良かった気はしますが、流石にソレは出来なかつたですね。可能性としてはその時点でユーノ君が再起不能になる可能性も在り得ますから。

……心配したことはなにも無かつたんですけどね。原作どおり、封印しようとして逃す。その手順をちゃんと踏んでいました。ただその際、ちよつとだけ差異が在るとすれば衝撃でレイジングハートさんが遠くまで飛んでいってしまったので拾ってユーノ君の首に掛けて上げたくらいですかね。

原作でも近くに落ちたはずなのに、なぜか知らないうちにユーノ君の首に掛かつてましたし、これぐらいは干渉に入らないでしょう、入らないよね？レイハさんが映像撮つててバレるとか無いと思いたいです。

その時にも件の二人は姿が在りませんでした。もしかするとホントに只の似ているだけの一般人かも知れませんか。もしくは能力を貰ってるけどまだ魔力感知出来るほど実力が伴ってないとかいうオチですかね、後者である場合はもうちよつと頑張つて欲しいんですけども、私が楽をするために。

順当に行けば今日の帰りに三人組がユーノ君を発見、夜には初変身と封印と言つた所でしょうか。

何も無ければ良いのですが、相手が少し強かつた気がしますし、用心しておきましょう。自分が住む街への被害も、出来れば無くしたいですし、あの被害はちよつと大きすぎると前世の時も思つてましたしね。

件の二人も、流石に今回は出てくるでしょう。つというより、ホントに転生者であれば今夜こそ来て下さい、確認させて私を安心させて下さい、そしてあわよくば能力を見せて対策を取れるようにしてください。未知の能力を使って勝手にされるのは勘弁してほしいので。

「はあ……眠い」

精神的はどうであれ、肉体的には子供も子供なので、夜更かしすればどうにも眠気が消えません。そして今日もなんですよ。夜更かし行為。

探知されないよう隠蔽処理を施したサーチャーで見ている限り、屋上ののはちゃん達も、将来の話で盛り上がり順当に原作展開を踏んでくれているようだ。ちなみに件の二人はその場に一緒に居ますね。普通に友人関係を築いている様子、原作には男友達はいませんでしたし、やはり黒ですかね？ あの二人。まあいいです、今考えても答えは出ませんし、その内わかるでしょう。

それはそれとして……

「おやすみなさい」

私は午後の授業が始まるまで意識を手放した。

□~~~~~□

「さて、ユーノ君が取逃すというイベントが在った以上、もう始点まで時間も無いと思い



ますし次に起こりえる過程の再確認でもしましょうか」

何事もあるわけがなく、放課後、そして夜に成り私は気合を入れなおす。

展開として、ユーノ君を拾う、動物病院に届ける、までは既に何事もなく終了。違いが在るとすれば件の二人も塾に通っているようだ。そしてこの後は、夜になりユーノ君ピンチ、なのはちやん駆けつける、暫くの逃走の後にレイジングハートでへんしーんの流れでしたね。

「とりあえず、街への被害を——特に動物病院です——最小限にする為にも封時結界、それも外部から侵入できる類のモノに調整しないといけませんね」

結界自体は街への被害もさることながら、ド派手な魔力光の目撃者を減らすためのモノ。外部からの侵入は、なのはちやんが動物病院に到達できるようにと、黒に近い彼ら二人が介入してくるかどうかを確かめるためのモノだ。

『（誰か……僕の声が聞こえる人。助けてください、力を貸してください、危険が、ホントに危険が近づいているんでs——…）』

あつ、途切れた。

……まあ始まりましたね。この段階で既に張っていても良かったのですが、万が一、

念話が届かないとユーノ君、ここでゲームオーバーしてしまいますからね。それは勘弁してほしいです。さて、封時結界展開つと。これで病院が壊れて、街が壊れたとしても現実への影響はなくなりましたね。翌日の事件に関する会話が無くなりますが些細なことでしょう。

さて、襲つてきているのは昨晩の奴ですかね……？なんか、形状が違うような？

毛むくじやらのような不定型な体軀、一緒ですね。

生える触覚の様ななにか、同じですね。

そして背中に“変な仮面”のようなもの。

……おやあ？ペルソナに出てきたシャドウとかいう奴も同じような仮面を体につけていましたね。

これは、彼がそうなのかはともかくとして、この世界の構成要素にペルソナが含まれているとみていいかもしれませんね。でもそうになると、魔法でのダメージって通るのでしょうかね？通らなければ顔を隠して手助けでもしてあげないと不味いですね、私の攻撃も通るかわからないけど。

「はあ……はあ……ここで、あつてるよね」

居場所言われなかったのによく来れましたね、漸く始まりますか、この世界の根幹の物語が。

「来て、くれたんですか?」

「え、え!? 喋った!」

……どうでもいいですけど、この現実では敵は待つてはくれませ

『G y a a a a a a a a !』

叫びよる、この獣。シャドウ要素仮面だけな気がしてきました。

そんな事を考えていると、その場に飛び込んでくる影が一つ。

「なのは! 大丈夫か!? “ジオ”!」

おや? 誰か来ましたね、つとつか来てくれましたね。そしてあれは雷? そして技名が“ジオ”。確定ですかね? でも“ペルソナ”自体は出していないようですが、それは私自身にその適性がないから視えないか出さなくても技を使えるようにして貰ったという感じだろう。

そう考え、声がした方に目を移せば、其処に居たのはメガネを付けたクラスメイト、そして容疑者その1である番神悠次君の姿、面倒なので暫くは番長で通します、似すぎますし。

「き、君も来てくれたんですか。でも良かった、少し苦戦をしそうですし、どうやら魔法

も使えるようですね、助かります」

「え!? 何!? 悠次君!? それに、ま、魔法って何のことなの!?」

いきなり乱入して、若干シャドウっぽくなつたジュエルシード思念体と戦い始める番長と理解の処理能力を超えてしまったのか混乱し始めるなのはちゃん。

そりゃあ、いきなり魔法とか言われたり、友人でもあるクラスメイトが未知の力で暴れ始めたら困りますよね。

「俺の事はいいから、なのはは其処のフェレットと話の続きをー!」

「ふえ!? なに、なに? なんなのー!」

なのはちゃんは更に混乱してますが、そういつて話の続きを促がす番長、わかつてますね、ちゃんと原作の流れに沿う様にしてきているのでしようk

「俺では封印する手段が無いんだ! それに思った以上に強い、早くしてくれ」

……ないわー、頼りねー。そんなんじや親友度は上がったても親愛度は上がらねえぞ?

……おつと口調が。キャラ付は大事です、この世界で元俺が、現私で居るためにも。

スイマセンお母さん、ちゃんとした口調にしますので、6時間正座説教は勘弁してください、大人でもキツイのに子供だと尚更キツイです。え? ハイ、一人称は俺ではなく私にしますので、え、名前呼称の方が可愛い? いや、それだけは勘弁してください、ブ

ツブツブツ…

……トラウマがフラッシュバックしかけましたが、大丈夫、私は大丈夫です。

ですが彼は異能を貰う事しか考えてなかったんですかね？ デバイスぐらいは与えられてると思うのですが、彼に何かしら施した、神っぽいや者のミスでしょうか？

しかし、現時点で予測できるのは、“特典の一つはペルソナシリーズ、もしくはペルソナ4に出てくる術技全て”て所ですかね、それ以外は追々披露してくれるであろう戦い方から推測してゆきますか。

「わ、わかりました。なのは？さん、僕の後について起動の為のパスワードを」

「我、使命を受けし者なり」

「え、えっと、我、使命を受けし者なり」

「契約のもと、その力を解き放て」

「け、契約のもと、その力を解き放て」

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

「そして不屈の魂はこの胸に。この手に魔法を」

「そして不屈の魂はこの胸に。この手に魔法を」

「レイジングハート、セットアップ！」

おお、すんなりといけましたね、言えましたね。私なら嘸みまず、絶対。

つと、一つ忘れてました。えーい。

「うわっ!? なんだ! いきなり目が見えなく、目がああああ!」

番長君に視界暗転ブラックアウトプレゼント。

中身がどうあれ男性は男性、見ちゃだめですよ、変身シーン。

私ですか? いいのです、現女性ですし、私自身もバリアジャケット展開時全裸になっちゃいますしね。変身バンクの必要性はわからなくてもいいですが、どう頑張っても成らないと展開出来ないんですよ、理不尽。

「す、凄い魔力だ」

そう驚くユーノ君。

ほんと綺麗で凄いですね、つて、あつ、ちよ、結界ヤバイ。開放された魔力だけでコレって。堪えて、私の結界!!

「早く、封印を! レイジングハートが答えてくれます」

「は、はい、教えて、レイジングハート」

ん？こんな展開でしたっけ？ 順応性が、なんか、高い？ 私が関わらなかつたものと子供の頃に何か有った？ あの二人以外にも誰か居る可能性が、いや、でも、そうすると年代が違う所にも居るって事ですよね。

流石にそこまで可能性が広がり続けてしまうと私個人では対応出来なくなる場面も出てくる可能性の方が高くなってしまいますし、その辺りも今後の課題として考え

「リリカル・マジカル、ジュエルシード封印！」

『ジュエルシードXXXI、封印』

おっと、考え事してる内に終っちゃいましたか。番号は同じみたいですね。周りの被害は……全く無いですね、番長君も何かしてくれたのかな？

それにしても、もう一人は来ませんでしたね。関係無かつたんでしようね。……まさか別陣営で来るとか無いですよ、まさかね。

さって、結界解除つと。今日はもう何も無いはずですし、帰っておやす

キイイイイ、ガシャ！ プアアアアア――

車が動物病院に突っ込みましたね……これが世界の修正力、つというよりは私が結界外の確認せずに解除した所為ですかね？ それで急に出てきた二人の子供を避けよう

と……そ、ソレより二人は、つて居ないし!? 誰も連絡してない筈なのに警察のサイレンまで!? 車の運転手の容態は……大丈夫そうですね、ですが一応回復魔法を、つと。さて、私も退散しましょう!

どたばたしましたが、コレで物語が漸く開始ですね。



## #02 日常、危険

「ふう……第一夜は……うん、問題なく終わりましたね。今日以降も何も無いと良いんですけど。次は、神社でしたっけ？」

次は確か明日のお昼、学校が終ってからでしたね。そんな事を考えつつ“子供の身にはハードワーク過ぎるよ”とも思いながら自宅の玄関を開ける。

「ただいまあ、ってあれ？電気点けはなしで出て来ちゃってたのかな」

玄関を開けると電気が点いていた。出たのが夕方、特に点けて出てきた記憶も無いのだが。

「おかえりなさい、イツキ。どうやら何事も無く終ったようですね」

そういつて出迎えてくれたのは……

「ただいま”リニス”。起きてたの？」

リニス。本来、この時期には契約を解かれて魔力不足によって体の維持ができなくなって消えていた存在……そして改変する気が無い私がリニスと共に居る理由はとて

も深い理由が!!

ある訳も無かった。えっと、特にそんなものは存在して無くて、単純に“知らずに拾ってました”。

あれは確か1年ぐらい前でしたかね、弱ってる猫が居たので、拾って帰り、ヒーリングかけて、治ったらまた野良に返そうかなとか考えてたが、それでも数日間弱りっぱなしだったので継続してヒーリングしてたらそこから魔力を取り入れたのか、気がついたら人型になってました。

「ええ、まあ。一応助けて貰った身分ですし現在の仮契約主ですからね。私が今こうしていられるのもイツキのお陰です。それでもイツキはまだ小学生ですから心配しますよ」

「えっと、心配してくれるのはありがたいですけど、私の素性と中身について説明しましたよね、リニス？」

「はい、私が人型に戻れたときに。ですが、貴女の持つ力や前世といったものがどうであ

れ……見た目ただのちいさな女の子ですし？ それとこれとは話が別です（……それにフエイトも今頃はイツキと同じくらいでしょうし」

左様ですか。最後よく聞き取れませんでした。悪い気はしませんし別にいいです。厚意は受け取っておくものです。

因みにこの世界が“物語”で在ったという事は一応伝えてません、正式な使い魔契約を行つてる訳ではないので精神リンクで伝わっても居ないはずですよ。

「それで？ 今回は一体どういった問題を起こして来たんですか？」

「え？ 私が起こした事前提なの？ 失敬な、巻き込まれはするけど自分から巻き起こした事はないよ！」

リニスから私への信頼度が低い気がします。コレでも結構色々してるのに。誠に遺憾である。

「そうですね。何かしらに巻き込まれますね。この前なんかは『何か買って来る！』つと颯爽と出て行つたきり何時までも戻らないので念話で話しかけたら『何か強面のオジサン連中に女の子二人と一緒に攫われました』と返してきたりとか」

うぐつ。そ、それは仕方なかったんですよ。色々事情があつたんですよ。あえて言うなら今夜とは違い、それは純粹に巻き込まれたんですよ。

「それでも、イツキのすることは結局は誰かの為に成つてますので許しますし、容認もし

ますよ。ですが、同時に心配もしますので、言える範囲で構わないので教えてくださいね。それにいつでも力に成りますので」

「大丈夫、伝える事は言葉で伝えてますよ。それにちよつと今後やってほしいこともあるので、その時に頼らせてもらいますよ」

そう、表舞台にあくまで立ちたくない私。どうしても他の協力者を用意しておく場面が存在するのだ。

「つで、今日は何をしてきたんですか？」

ブレずに尋ねてくるリニス。それ程心配するぐらい私つてば頼りない？

「なんか変な獣が発生したので、眺めてきました。今日は眠いので詳細はまた明日ね」  
ソレに対し私は簡潔に答え寢室へと向かうのであった。後ろでリニスが何か言ってるけど明日ね、明日。

□~~~~~□

「ふう……」なら落ち着いて話せるだろう」

あの騒動があつた動物病院から少し離れた公園で少年はそう切り出した。近くにはベンチに腰かけている少女と、その膝上にはフェレットが居る。

「色々な事が起こりすぎて、つかれたよお……」

肩を少し落として少女は呟く。フェレットが喋ったり、得体の知れないモノが襲い掛かってきたり、見知ったクラスメイトまでもが未知なる力を行使し、挙句自らもそれに似た様な力を使ったのだ。あまりにも衝撃的なことが続いたのだから当然だろう。

「しかし、街への被害も少なく、誰も怪我が無くてよかった」

「そうですね。一歩違えば、あの辺り一帯が破壊されて誰かが大怪我していたかもしれない程、あの思念体は強かった」

少年とフェレットはそう話し合う。街への被害など動物病院だけに止まり、それさえも扉の一部が車の衝突により壊れた程度ですんだのだ。

「さて、少しは落ち着いてきただろうし。喋れるのであれば、名前を教えて貰ってもいいか？ フェレット君」

少年は「自分は貴方の名前を知らないから教えてくれ」という風にそう切り出し振舞う。

「あつ、ハイ。僕の名前はユーノ・スクライア。スクライアは部族名ですので、ユーノです」

「よろしく、ユーノ。俺の名前は番神悠次。ユウジって呼んでくれ。それで君を抱えているのが」

「わ、私は高町なのは。なのはって呼んでね」

少年——悠次と少女——なのはと一匹——ユーノは挨拶を交わす。本来、子供がこのような夜中にも等しい時間に公園で話し合うのはありえないが事情が事情だった故に仕方のない事だろう。起こった事、これからの事などを少し話し合い、時間も時間なので話を切り上げ各々が帰路につこうとする。そんな時、ユーノが最後にと口を開く「あつ、最後に一つだけ聞きたいことがあります。今日あの場所で、結界のようなものが張られている感じがしました。アレはユウジが？」

「結界？ 何のことだ？ 俺があそこに着いたのは、なのはとユーノが襲われそうになつていたあの瞬間だぞ。それに結界なんてあつたか？ 全く感じなかつたが」

「そうですか……だとしたら僕の勘違いかもしれないです。忘れてください」

「ああ、そうする。だが一応、気にはしておいた方がいいかもな」

そう悠次とユーノは受け答える。事実、あの場にはここにいる3名以外も居たのだが、まだ彼等はそれに気が付くには至らない様である。

「それじゃあなのは、また明日な。ユーノも機会があればまた細かい説明もしてくれ」

「うん、また明日ね、悠次君」

「僕からも回収の手伝いをお願いしているので聞かれたことは答えますよ」

挨拶を交わし今度こそ、それぞれが帰ってゆく。

「(それにしても……)」

なのはは考える。他の二人は気にもしていなかったし話題にも上がらなかったの  
黙ってはいたが

「(あの、誰かに見られているような、見守られているような感じはなんだったんだろう  
……)」

確実に気が付いていた。感受性の高さゆえか、それとも持ち得た素質の高さゆえか。  
欠片でも気が付かれていた事を、その現場を見ていた者はまだ知らない。

□~~~~~□

……朝からリニスに問い詰められて大変でした。

しかし、話したところで本当に信じて貰えてるのか怪しいですからねー、子供の妄言  
と捉えられてる気がしないでもないです。子供扱いが全く抜けてくれないのが証拠  
ですかね。ロストログアのくんだり辺りぐらいは信じていてくれれば、この先やって欲し  
い事があるので楽なんですけど。

「……つと……」数ヶ月、海鳴市の周りでちよつとした事件や事故が続いているようなの  
で、皆登下校時には十分注意してくれー。昨日の夜には動物病院の辺りで事故も在った

「そうだからな、気をつけろよ」

「案外、私というイレギュラー等が在っても、基本は変わらないということですかね。やりすぎない程度なら、介入も行って平気そうですね……そういえば昨日既に介入された後ですね。」

「なのはちゃん達（十男子2名）の集まりは……なのはちゃん（十男子1名）が誤魔化しと説明してますね、ここも流れ通りで良い事です。そして次に事が起きるのはズレなどが無ければ今日ですよ。体感する身に成るとハードですね。一応リニスに連絡しておかないと。」

『（リニス、ちょっといいですか？）』

『（大丈夫ですよ、イツキ。どうしたんです？）』

『（今日の帰りにちよつと寄り道していきますというのと、何か欲しい物が有れば買って帰りますよという連絡です）』

『（わかりました。特に欲しいものもないですよ。強いて言うならば“寄り道せずに帰ってきてください”ですかね）』

『（ははは……それはちよつと……そ、そうだ、リニス、猫形態に戻れたりする？）』

『（ハイ？ 出来ませけど、それが何か？）』

『（いえ、今朝伝えたことの証明じゃ無いですけど、今この街で起こってることを実際に



見てもらおうかと。そんな訳で放課前に連絡飛ばしますので学校まで来てください』  
 『(ハイハイ。それでは連絡まっけますね)』

うん、なんでしょう。軽くあしらわれた感じが否めない。お願い、信じて、私の言っていること。まあ隠し事は在るけど、それでも伝えたことは真実が多いから！

介入、自分の力で頑張るしかないのかな。

「……きちゃん、いつきちゃん？ 聞いてる？」

「んう？ あれ？ 誰もいない？」

「移動教室だからみんな行っちゃったよ。私たちが最後だから行こう」

「あつ、ちよつと、待って」

周りから見ても不自然の無いように、出来るだけ自然に、モブAとして過ごすんだ、少なくともSttSまでは。それまで表舞台に出て注目されるのは避けて行きたい、そう決めたんだ。

□~~~~~□

〜時は移って放課後〜

学校の周りで既に猫形態で待っていたリニスを拾って頭の上に乗せつつ、とりあえず

商店街まで移動する。

『……つで？ 来ましたか、何処に行くんですか？』

『ん〜神社、かな？ 感じない？ 魔力が暴走しているようなモノを』

私はまだ感知系得意じゃないんですよね。デバイスに任せれば何とかなる気がしますが頼りすぎは良くないですし、あまり頼りたくないです、コイツに。

『自分で無理なら、俺に頼つても……いいんですぜ？』

『うっさいわ！ なんですかそのキャラ付け！ そんなだから頼りたくないですよ！』

ただでさえまだ私の中で折り合い着いてないんですから！』

面倒くさいのだ、この私専用のインテリジェントデバイス、アマルサムト：愛称アルサナ。今世の両親から貰ったものだが何故か人格AIが前世の私なのだ。何をした、あの自称神。こんなサプライズ欲しくなかった。そりゃ戦闘面では的確すぎる相棒になると思いますけども……

『まあ俺もちよい複雑だがなあ。直前までの記憶は一緒なのに、気がついたら俺はデバイスになってたしな。でも気にすんなよ？ 俺は自身がコピーで偽者ってわかってるからな。出来るなら自分で動ける融合型ユニゾンデバイスが良かったってのはあるがな』

『……すいませんでした、ちよつと無神経でしたね。でもソレも多分何とか成ると思いますよ？ 自分で言うのもなんですが、やっぱり私達は“特殊”ですからね。“あれい

降”まで待つてください、私が責任もって頑張ってみますので』

『期待せずに待つよ。ソレまでは俺も只のデバイスとして全力を尽くすからな』

元が同じなのだ。なんだかんだ言いつつも、気が合うのは当たり前だ。そんなやりとりをしていると、頭の上のリニスがてしてしと叩いてくる。

『コントやってないで、何処か行く所があるんじゃないやなかつたんですか？ イツキに言われたとおり、ちよつと探してみたらアッチの小山の方から何か感じますね』

『だな。ちよつと急いだらうがいいかも知れねえぞ？ まだ暴走はしてないが危ない状態だ。先に行っておく必要があるだろ』

『え……コントって……酷い。っじゃなくて、それホントですか、アルサナ!? 先に行つて隠れないといけないのに!』

急がなくては。ただでさえ追加が一人、そしてまだ判明していないのが一人居て動きづらい状況なのに。今回や次で介入してこないとなると、あちら側の陣営か、そもそも関係なかったと見ていいでしょうね。

そんな風に考えつつも私は神社まで急ぐのであった。

「ふう……間に合いましたね。さて、あとは階段を登って隠れる場所は……屋根の上で  
 いつか。近いけど大丈夫でしょう。アルサナ、今のうちに私とリニスに迷オプティックハイド彩 起動し  
 ておいて」

『あいよー。つてかデバイスの俺に頼らなくても自分で発動できるだろうに。昨日なん  
 て遠いからつて慢心して掛けなかつただろ』

神社への長い階段を上りつつ、他愛もないやりとりをする。

「あの距離で勘付かれる訳ないじゃないですか。それに今は結界の練習も兼ねてるので  
 そっち優先ですよ」

『ああ……言いにくいんだがな？ あの組みあがり具合だと、多分バレる奴にはバレ  
 てるぞ？ おそらくユーノにはな。それに実はリニスも気が付いてたんだろ？』

そう告げてくるアルサナ。え？ あれ駄目だった？ 自分なりに結構自信あつたの  
 に。

「そうですね。全体として感じれば、まあわかりにくかったです、綻びがちらほら在り  
 ましたし、途中からハッキリとわかるようになりましたしね」

おそらくなのはちゃんとのセットアップ時の魔力奔流の所為だろう。あれにあてられ  
 て全体的に綻び、組み込んだハイドの術式が剥がれたのだ。

「うーん、更に要研鑽ですかね。つとと、あちゃーもう暴走しちゃってましたか。リニ

ス、アレが今この街で起こってる事の一部です。アルサナ、あのわんころろにあの子が来るまでバインドを。私はこのお姉さんをそっちの木に寄り掛けて防<sup>オーバルプロテクション</sup>御結界掛けておきますので」

「あんなモノが発生したりしているのですか」

少々驚いた様子のリニス。今朝アルサナの映像で昨日の毛むくじやらも見せましたよね？ あれでも信用なかつたんですか？

『了解つと。しかし、全部俺がやってもいいんだぜ？ どういう風にしようとも、リニスの維持も含めて、全部お嬢の魔力だからな。いざって時に切れない様に少しでも節約をだな』

「わかつてますけど、それを踏まえても貴方ならわかるでしょう？ “まだこの時点では大丈夫” だと」

『……まあ、そうだな。逆にこの時点である程度経験積んでおかねえとこの先あぶねえな』

この時点まではまだ平気だ。次は街へ、その次以降は人的被害まで出てしまう。防衛／回復に重点を置いて練習してきたのでそこらは大丈夫だが、次の事件までに自衛の為に攻撃にも意識を向けなくてははいけない。少なくとも、私自信が蒐集される気は微塵もないのだ。

それに個人的な理由でジュエルシードも最低3個ほどは確保したい。

「なんでもいいですが、誰か来ましたよ？ それと、もう一人近づいてくる反応があります」

もう来ましたか。

「アルサナ、バインド解除。後、昨日の例があるので、危なくなったらいつでも展開できるようプロテクション待機で」

『まかせな』

「イツキは何もしないのですか？ 貴女ならなんの危険もなく瞬間的に終わるでしょう？」

さも当然のように言い放つリニス。貴女は信用してくれているのかしてないのかわからないですね。

「私では駄目なんですよ、この一連を解決するのは。〃在り得てはいけない〃とまでは言いませんし、自己否定に繋がるので言いたくないです。でも、私はまだ〃傍観者〃で居るべきなんです」

「……どういう理由があつてそう考えるのかは解りませんが、少なくとも今の私にとってイツキは〃在り得てはいけない〃存在なんかじゃないですし、大切な人だと思いませんよ」

「ありがとう、リニス」

「いえ、ですが、一応、なぜ傍観者であろうとしているか聞いても？」

「え？ だって事件に関わるのって面倒じゃないですか」

「……聞いた私が愚かでした。ちよつとでも配慮した私に謝罪してください」

「ええ!? なんて!？」

そんなやり取りも、大切な時間なのだ。場合が場合じゃなければ。

『……一人とも、アッチ、そろそろ終わりそうだぞ』

「え？」

アルサナに言われて見てみれば、もう封印を行うところだった。どうやら、来たのは番長君だったようだ。前衛後衛がしっかりと別れているからなのか、特に怪我もなく、問題なく終えようとしていた。

「あれが、この一連を解決する人たちですよ、リニス。本来ならばあの白い子だけなんですけどね」

「へえ、そうなんです。わかりました。それはそうと、傍観者であろうとも、あくまで主体をあの子たちに任せる様にすればあの中に混じって近くで助けてあげられるのでは？」

「あれに混ぜるつもりはありません。それに、必要があれば助けますよ。ですが、大丈夫ですよ。今暫くは、ね」

そう、まだ暫くは大丈夫なのだ。それに彼女に必要な“経験”を無くすわけにはいかない。

「さて、あの子たちも行つたようですし、私たちも帰りますか。何か晩御飯にリクエストがありますか？」

「イツキが作るものであれば、なんでも」

「ハイハイ、わかりました。昨日はお肉でしたし、魚にしますか」

まだ、何も起こす必要はない。暫くは自己修練と掠めてもいいジュエルシードの確保の事を考えよう。

……それにしても、もう一人の様子見はどうしよう？



## #03 idle talk:01

神社での回収も終わり、暫くは何も無い筈ですよねえ。つというわけで自己研鑽でもしますか。本来存在しない問題イレギュラーさえ起きなければ私がすることは何も無いのだ！

つとその前に図書館などで地理を調べたり歴史（事件）を調べて私が持つ限りに前世知識と照らし合わせて混ざりこんでいる要素を調べないと対策の取りようがないですしね。いざ行かん！……学校が終わってから。

教室では各々が他愛もない会話に華を咲かせている。私も例にもれずしががないモブAとして何処かのグループで会話しつつも、主要人物たちの会話を聞き漏らさないようアルサナに頼みつつ、まず何を調べようか考えてもいた。そんな折。

「それにしても最近色々起こるわね。昨日は神社で倒木騒ぎでしょ？」  
「そ、そうだね。私たちもちよつと気を付けた方がいいかもしれないね」

そう会話を始めていた主要人物グループ。切り出したのはアリサちゃんです。ちやんだ。

「今回は事件とかじゃなくて、自然に腐っていた木が倒れただけらしいけど、あんた達昨日あの辺りに居たんだった？良かったわね、神社に寄つてなくて」

「にやははは……た、たまたま近くに居ただけだよ。」

「そ、そうだな。俺もちよつとアツチの方に用事があつてな」

“腐つて倒れた”のは私の事後処理の見せ掛けである。結界を張る前に少し暴れていたわんころが倒してしまつていたので断面を腐らせておいた、そうじゃないと流石に色々ますと拙いと思つたので。描写されない背景にはそういった努力者が居たのかもしれないと考えさせられた作業でした。

「ふくん？もしかして、なんか二人して隠し事でもあんのか？」

そう問うのは今まで姿を出さなかつたもう一人の方崎さきがみりょうや神亮夜君だ。こっちは……今後の様子次第ではハセヲつて呼ぼうかな。今は亮夜でいいか。

しかし、その問い方……貴方もしや黒ですか？

「にや!?な、なにもないつてば!!」

「確かに怪しいけど、隠し事の一つや二つあるでしょう。それに女の子にそういうこと聞くのは頂けないわよ?」

亮夜君の問いに、凄く動揺を見せるのはちゃんと、たしなめるアリサちゃん。

「へーへー、わかりましたよつと」

「い…」

「ま、まあまあアリサちゃん、落ち着いて、誰でも、その、言い辛い事ぐらいあるし、気になるけどしようがないよ……ね？」

「そ、そうね」

「なにかあったの？あの二人。そう私が思っていると」

「アリサちゃんとすずかちゃんも何かあったの？」

「いきなり突っ込んでいきますね、なのはちゃん。本当に言いづらい事だったらどうするんですか。」

「別に。少し前にちよつとした事に一緒に巻き込まれただけよ」

「そ、そうだね……あの時は何が起こったのかわからなかったけど大変だったね」

「……もしかして、あの誘拐事件の話ですか？ちよつと教室から退散して、っと。」

「今まで挨拶程度しか会話したこと無かったですし、バレては居ないと思うのですが、これで特徴を話されて、他の人から辿り着く可能性もなきにしもあらず。服装的にもあの時は性別がバレる様な服装では無かったですし……」

「ただその時、もう一人居ただけけど、あの子は誰だったのかしら？私の家の方で探してもらってるけど見つからないし」

「あの事」もあるし、見つけなきゃだね、私の家の方でも探してもらってるけどコッ

チも進展なしだよ」

「今なんとー!? 確かに一緒に攫われたけどバレない様に細心の注意を払って、不屈きものを気絶させて穩便に終わらせた筈なのにどうしてそうなったんだ」

「私たちは気が付いた時には家の人たちに助けてもらったけど、あの子だけいつの間にか居なくなつてたみたいで、まるで最初から居なかつたかのように、ね」

「でも、私たちはちゃんと居るのを見てたもんね」

「……なるほどー! つまり」一緒に助けて貰った」事実を作る前に逃げたのが駄目だったわけですか。いや、でも巻き込まれなくなかつたですし」

「わかつてる事といえ、私達より小さかつたから多分年下つていうのと、不思議に捻じ曲がつた腕輪のアクセサリーを付けていたって事、あとは口調と声からして男の子かもつて事ぐらいかしら?」

「なんなんだろうね? あれ。どこかで見たことある気がするんだけど…」

「すずかちゃんにバレソウデス。思わぬところで身バレのピンチです。その時はちよつと油断してたみたいですね、まさかバッチリと展開前のアルサナ見られてたなんて。」

「あの時はちよつと面倒でしたね。」

くく以下回想くく

……どーも、神在いつきです。

現在、3年生始まる手前、本編開始まであと少しのところ、なぜか微ピンチ中です。デバイスのアルサナも居るのですが、コイツ、デバイスの癖に寝てやがります。そしてデバイスなので叩き起こせません。

何の為に居るんでしょうね？

私の記憶が正しければ、小学生になって、すっかりしているし一応ひと安心だと

仕事に復帰したお父さんとお母さんが居ないときの半護衛の役目も担って私に渡されてる筈なんですけども

『……うくん、お嬢。そんなデザインのバリアジャケットはまだ早えよww』

AIがアレとはいえ、デバイスも夢も見るのでしょうか？それはそうと大分失礼な夢を見られて勝手に笑われた気がしますね。へし折ってやりたい所ですが腕輪型ですし、私自身小学生の女の子の身では無駄に高性能なデバイスを折るといふ芸当は出来ません。つで今どういう状況なのかと言うと……

「あんた達！なんなの!?!こんな事してただで済むと思わないでよ!!」

「ア、アリサちゃん、刺激しちや駄目だよ」

咆えるアリサちゃんと静めようとするすずかちゃん……と、共にどこも知れない廃墟に攫われ静観決め込んでる私。なんでしようねこの状況。出来ればおそらくは比較的無関係な私だけでも放逐して欲しいのですが。

「おーおー、勇ましいねえ、嬢ちゃん。今、どういう状況か、理解してるう?」

イラつと来ますね、コイツの喋り方。人を小馬鹿にしたような。直接言われた訳じゃない私ですらそうなのですから、言われた本人はきつと

「うるっさい!!だからなんだっていうのよ!!私やすずかに手を出したら、あんた達も無事じゃすまないわよ!!」

「ア、アリサちゃん……」

燃え上がってますね。でもホントにイラつとくる喋り方の強面さんの言うとおり、状況は理解した方が良いでしょう。現状、アリサちゃんとすずかちゃんが取れる希望（手段）、ありませんし。

「ハッ、吠えるだけで何になるっつーんだよ。嬢ちゃん達は連絡を取る手段もなければ、今は昼過ぎ。外出が少し長引いてもおかしくねえ。つまりはどうすることもできねえんだよ。そっちの坊ちゃんを見てみる、状況がわかって何もしねえのか——いや、怯え

きつて声もでねえのか動こうともしねえだろ」

残念テンションヒヤツハーさん、前者です。何もしたくないっていうか目立ちたくないです、こつちに話題振らないで。哀れなモブAで居させてお願いだから。でもふられたからにはなにかしらのアクションを起こさないと不自然なわけで——

「ひッ、じ、自分ですか？あ、あの、なんでこんな事になってるかわからないですし、か、帰らせてもらえる可能性が在るなら大人しくしてますので、な、何もしないで下さい」「うんうん、お兄さん、素直な子は大好きだ。大丈夫、用が済めば、帰してあげるよ」信用できねえ……明らかに帰す気がない。用って絶対ダメな奴ですよ。ここで言えないような事ですよ。

当然、演技で受け答えするのだが自分でやってて思う、果てしなく茶番である。どうやらテンションヒヤツハーさんは性別も勘違いしてくれたようで（まあ今の服装が某ガ○ダムBFの心形流のあの子と同じ格好ですし）一応一人称と声も変えています。この二人は関わる事があれば絶対に気が付くから。さつて、ここにいる人数でも把握しやすかねえ。え〜つとこのフロアに——

『（イツキ、晩御飯はどうしますか？つといますかそろそろいい時間なので帰って来てくださいよ、何してるんですか？）』

今このタイミニングでその連絡ですか！

『(えっと……なんか強面の人たちが居ましてですね、女の子他二名と共に攫われました、現在、絶賛拘束され中な訳なんですけど……)』

『(言い訳とかどうでもいいので、さっさと帰ってきてくださいね。あと一時間がリミットです)』

『(え? ちよつ?! リニス? リニース!?)』

……カットされましたね。念話が繋がらないです。仕方ないですね、ちやつちやと片付けて帰りますか。恐らくさつき話しかけてきた奴が主犯格でしょうね。つで他に二人と入り口に一人、通路側にも一人ですか。面倒な。

「しっかし、勇ましい嬢ちゃんとそつちのおとなしい坊ちゃんも災難だったな。化け物の近くに居たがために巻き込まれてよ」

ん? 何の話? 呼ばれてないすかちやんが。化け物。つて事? ……すずかちやん、顔面蒼白で絶望した感じに成ってるんですが、一体。

「そ、それってどういうことよ……」

アリサさん!?! それ多分聞いちやダメな部類です! 最も触れられたくない秘密だと思えますよ!!

「なんだ嬢ちゃん、そんなことも知らねえで一緒に居たのか。つくづく危機感の薄い奴だな。まあいい教えてやるよ」



「!?だ、だめえ!」

急に息を吹き返したかのように叫ぶすずかちゃん。そんなに重要な設定、原作の彼女にあつたかな?

「お前に止める権利はねえんだよ。いいか?今嬢ちゃんの隣にいる月村の嬢ちゃんは、夜の一族”っていう人間とはまた別の生き物なんだよ”

何と!?そんな設定があつたのか!　　そういえばリリカルなのはって別のゲーム?か何かの派生作品ってどっかで見たことありましたね。

「そ、それがなんだっていうのよ……」

流石に少し驚いた上に、当の本人であるすずかちゃんが横で今にも泣き出しそうにしていたので動揺するアリサちゃん。

「嬢ちゃんにもわかりやすく説明するとだな、簡単にいや”吸血鬼”ってやつだ。麗しい容姿に明晰な頭脳、高い身体能力に人間ではありえねえ再生能力。果てには催眠能力や靈感なんてものあるらしいな、そして何より”人の血を必要としている”。まさに”人ならざる者”だな!」

「そ、そんなの嘘に決まってるでしょ!ね、ねえ、すずか!」

「――」

吠えるアリサちゃんと何も言えなくなったすずかちゃん。

ですが、あの人すつごい丁寧に語ってくれましたね!?しかし、「靈感」ですか、便利そうですね。でも「らしい」とか使うのが多いという事は――

「……ま、っていうのも全部クライアントからの情報でだけで信じちゃいなかったが、月村の嬢ちゃんの反応を見る限り、本当らしいな?」

定かではなかったが、当人があの状況なら、全て事実なんでしょうね。困りましたね、そんな重要な事知った所で、私ではどうにも出来ないですし、知り合いでは無い私では彼女を慰めてあげること出来ませんしね。まあ時間（リニスに告げられたリミット）も近づいてますし、さくつと終わらせて……一応月村家やバニングス家への連絡もそれとなく入れて帰りますか。

『アルサナ、ちよつと、起きてください、アルサナ』

『ん?どうした?まるで俺が寝てたみたいな呼びかけ方だな?』

『……いつからですか?』

『起きてた事か?寝たふりしてた事か?つかそもそも機械で在る俺が寝る訳ねーし?』

『じゃあなんで攫われる前に忠告もせず、私攫われる形でここに居るんですか?』

『何故ってそりゃあ……回避不能イベント?』

『もういいです……』

諦めよう、こういうやつなんだ。多分、あの自称神が何か手心を加えたに違いない。『それはそうと、あの二人を何とか気絶させるなりで私だけ逃げ出す妙案ありませんかね?』

『うゝむ、魔力の閃光弾フラッシュユバンを発生させりや炸裂中に全員沈められる事は可能だろうが……おつ、ちよいまち、まだイベント中だ』

はい? 一体なにを言ってるんだこのフリーダムデバイスは

「——だからなんだっていうのよ!」

「ああ?」

まだ何かするんですかアリサちゃん!?! いい加減大人しくしておきましょうよ。

「アンタがなんて言おうと、さすががどんなに人と違うところがあっても、さすがはすずかなの! アタシの友達で、親友よ!! 夜の一族とか、吸血鬼とか、そんなの一切関係ないわ!! アンタみたいな人を攫ったり、汚い事をしている連中よりよっぽどまともな人間だわ!!」

「ア、アリサちゃん……」

おお、いい啖呵ですね。実に美しきは友情と言った所でしようか。ですが、それも状況が状況ならば……

「……ほお、よく言った。美しいね。だが状況を考える小娘。お前は今、何の力も、手立

ても、そして救いも無い。そんな状況で強気でいる事……どうなるかわかるよな？ 黙らせられる為に何をされるかを」

口調変わり過ぎですよ。今まで通してきたキャラ付け止めたって事は頭にきてるとみて良さそうですね。これはちよつと危ない予感。

「俺達が依頼されていたのは、そつちの月村の小娘だけだ。他が居たり、ソレがどうなるうが」問わずが上からのお達しでな……おめえら、この状況を読めねえ勇ましい小娘をやつちまえ。自らの無謀がどういふ結末を迎えるのかを刻んでやれ」

「え……」

おおつとー！これはマズイ。そんな事に成つたらこの先物語続かなくなつちやうじゃないですか。

『これですか？アルサナの言った、曰く“必須イベント”というのは』

『まあなあ、他に俺らみたいな奴が居て乱入して助けてくれるつてのがテンプレではあると思うんだが、今に到るまでそんな気配が一切ない。万が一の為にと……な？』

『はあ……確かに、そんな気配一切しなかつたですね。ここで私が助けるのはある意味イレギュラーである私の責任であり、やるべき事ということですか』

『現状そうなるな。次のタイミニングで動くぞ。形態は？』

『拳闘師、拳袋展開のみで、月村とバニングスの家には』

『色んな所経由して、此処の情報とアリサとすずかの“二人だけが”捕らわれていると送って置いた』

『流石。なんだかんだアレでも仕事は早いですね』

『つが、一つ誤算がある。すつごい速さでここに向かっているからやるなら急げ』

『それを先に言って!!』

くう、なぜ私がこんなに働かなくてはいけないんだ。他に転生者居るならポイント稼ぐチャンスですよ！モブAである私のポイントは稼げないですけどね！

「よいしょ、つと」

「あ？おい坊主、何立ちあがって……お前、ロープは？」

そんなものどつくに展開した拳袋グローブでねじ切りました。自前の強化だけでも抜け出せますが、面倒ですし。

「ハイ、ちゅもーくー！」

私はそう高らかに声を上げて喋る。一時的に目立つのは物事を早く終わらせ得るための致し方ない犠牲だ。

私の声に反応して、アリサちゃんに襲い掛かろうとしていた連中や部屋の外通路にいた連中も動きを止めてこちらを見る。

そして両手を大きく振りかぶって……

「煌めけ！閃光弾炸裂」  
フラッシュボム

どんなちっちゃなことでも、技名、大事！因みにアリサちゃんとすずかちゃんには視界暗転プレゼント済みでダメーゼロです。

「「「がああああ！くっそ！眼が!!」」」

さつて先ずは襲いかかてつた二人をつと、ていつ！

「ぐっ！」

「がっ！」

手刀で沈める。次に部屋の真ん中に居た主犯さんを、そおい！

「がっは!!え?なんのこと、ぐっは!!」

ボディーブローで念入りに沈める。キャラを最後まで保てとダメ出しつきで、更にボディー。よし、完全沈黙。

最後に入口の二人に、てりやあ！

「でこー!」

「ぴん!」

デコピンでふつとばす。二人そろって壁にダウン。……肉体強化してたのに指痛い、頭固いよあの二人。

つで後は全員を念入りに意識を刈り取って、つと。

「ふう、いい仕事しました」

『明らかにやり過ぎだがな。だがまあ此処が2階とかじゃなくてよかつたな？もしそうなら今の音でわらわら出てきたぞ』

「げっ、その可能性を考えていなかった」

『その姿になってから抜けてる具合に拍車がかかったな』

「うるさいですよ」

どうでもよろしい、そんなことは！ここは片付きましたしさっさと逃げるとしますか。つとつとその前に。

「二人とも、もう少ししたら二人を心配する人たちが駆けつけるからな。それと、俺の事は忘れろ。本来ここに居るはずの無い奴なんだ、気にするだけ無駄というやつだ。じゃあな」

気絶させておくのも忘れない。これで『いつの間にか気絶して気が付いた時には家の人たちに助けられた』という事になるだろう。うむ、完璧。

『ぜってー、バレるぞ。そういう運命なんだから』

ば、バレないし！これ以上なくらい完璧だし！それに運命とは抗うものです！

『まあいいが、もうすぐそこまで来てつぞ、助けの奴ら』

だからなぜ直ぐに言わない!

「アルサナ! ハイド、ハイド起動して!!」

『諦めろって……しやーねーな』

これで私は見つからな

「「アリサちゃん! すぐかちゃん! 無事か!!?」

ふおおお! あつぶなー! ギリギリだった!!

飛び込んできた中には、なのはのお兄さん（恭也さんだっけ?）の姿もある。

『惜しかったなww』

『（黙りなさい!）』

鍛錬を積んでる人は気配や僅かな音でもわかるというし、少し飛んで逃げますか。流石に空気の動きでバレたりしたら詰みですけど。

とりあえずは“平和解決”という事で。

〃〃以上回想〃〃

屋上まで逃げてきました。



あの時はホント、大変でした、無駄に長い髪も帽子の中に仕舞い込んでおいてよかったです。そもそも、なんであの二人来なかったし！ポイント稼ぎ云々はまあいいとして、事件には首突っ込みなさいよ！巻き込まれなさいよ！

『どうする？お嬢、俺の待機形態変えるか？』

え？変えられるの？いやいや、個性なくすのは駄目です、個性は大事です、とても大事です。

「必要ないですよ、かつこいいじやないですかメビウスの輪。それにまだ”男の子”を探している様ですから私には辿り着きません」

『慢心だろ、それ……』

何とでも言いなさい。大丈夫なものは大丈夫。それに、どうせ——

「A, s 終盤では彼女たちにはどうしてもバレる可能性があるのでそれまではいいじゃないですか」

『アレか……まあ確かに、それに動く予定の関係上、勘のいいはやてには絶対バレるしな』

「できれば避けたいんですけどねえ……まあそうなったらそうなたで何とでもなるでしょう。”けーすばいけーす”ですよ」

そう、バレたらバレたで、流れを壊さない程度に楽しめばいいのだ。楽しんでこそその人生なのだから。

## #04 idle talk:02

case:01「近接適正と浪漫」

まだ早いとは思っていたけれども、よくよく思い出してみればPT事件、闇の書事件までの間がとても短い事を思い出したので修練できるうちにある程度満遍なく手を出そうと思いい立ち、対ヴォルケンス用の近接対応術を習得できないかな？ と試みる事にした。だがその前に

「そういえばリニスって何か得意な得物とかあるんですか？　と言うより戦えたりしますか？」

まあ外伝ではあったがGOD等でも出ていたので戦えるには戦えるでしょうね。でも万が一もありますからね、そうなったら……自己流で我流に決めて行きますか。他の作品の技とか再現してみたいってのもありますし。

「ええ、まあある程度なら。それと特にコレといったものはないですね。満遍なく一通りは出来ますよ急にどうしたんですか？」

「特に意味は無いです。ただ、今後の事も考えて攻撃系の魔導、それに近接格闘辺りを修

練しようかと思ひまして」

ヴォルケンス——特にバトルジャンキー気質のピンクにやられた所を蒐集されるのか、最悪の展開ですからね。あれ達から自衛できる程度には技術を身に着け、近接で“捌き”に重点を置いておけば逃げるくらいは出来るでしょう。地力だとしてこの体では限界があると思ひますし。

「出来れば、近接戦闘に於ける“回避”や“捌き”を中心に、戦闘の心得をある程度教えて欲しいんですけど、その辺り出来ますか？」

「そうですね……出来ない事は無いですが、それも“最低限”つと言った所でしようか」  
最低限ですか。まあ触りさえ修めれば、あとはアルサナの補助も含めて何とか成るでしょう。

「得意なスタイルとかつてある？」

「魔導師は基本的に“杖”ですからね。杖術とあとは軽斧、私個人としては拳闘といったところでしようか」

それだけあれば上々ですね。やはりリニスには拳闘も出来ますか今度リニス用に作っているデバイスの調整もしなくては。

「じゃあちよつとはじめますか。とりあえず一通りお願いしますね、リニス」

「わかりました、私で良ければお教え出来る事はお教えしますよ」

く暫くしてく

「……」

「何と言いますか……中途半端ですね、イツキ」

一通り終えて頂いた言葉は、ダメ出しだった。

「その年齢と体格の割には、出来過ぎてている」と言ってもいいですが、アルサナの補助の無い素の状態ですとある程度の「捌き」以外は駄目ですね。それに出来る事と出来ない事がちぐはぐ過ぎて、矯正のしようがないです」

「やっぱり、近接はダメかあ……」

試した結果、ダメダメでした。アルサナに補助全般を任せれば、全てをこなせはするのだが、アルサナが使えない状態を想定して、己の力と自己補助だけで戦おうとすると、捌くので精一杯であった。何も出来ない状態よりはマシである。つと言った所だろう。

「いえ、素の状態であそこまで出来れば見事なものです。それに「捌き」は出来ているので、カウンターヒット反撃を重視するスタイルをとれば大丈夫ですよ」

「カウンターヒット反撃ねえ……」

反撃重視。前世からある記憶に頼る限りそれは、とある少女が後にとつていくス

タイトル。

この時点で私がそのスタイルを完成させるのは少し憚はばかられる。最悪、その道のプロとか言われてあの子の立場を奪いかねない、それは避けたい。

「イツキはまだ体も幼いですしこれからですよ。どうして力が必要かは知りませんが、自衛として役立ちますので在っても困らないでしょうし」

「うん、もう少しだけ待つてね。そうすれば色々伝えることができるから」

まだこの時点でフェイトをはじめとしたテスタロッサ一家については伝えていないしまだ伝えるわけにはいかない。初遭遇のあの時を過ぎれば話そうとそう考えていた。

「さて、そろそろいい時間ですが、どうしますか?」

そう切り出すリニス。だが私の目論見はここからだ!

「あつ、じゃあ少し試したいモノがあります、魔力で糸を作つての拳袋グローブで操糸術操糸術”つていうのと、ちよつとした腕ガントレット甲に仕込みをして圧縮空気の擬似的な”一点突破衝撃ポイントパンチ”つていうのを考えたので……リニス、試してみてください」

「え! 私がですか!?!」

「ハイ、お願いしますね」

これ以上ない、いい笑顔を浮かべて私はお願いする。

“操糸術”は是非ともやってみたかったモノだ。某魔法先生の人形遣い然り、某黒猫掃除屋のナンバーズ然り、浪漫武器つていいですよ。更にこの世界なら魔力で組み上げればある程度の思考での操作も出来ると踏んでいる。それに”特定の作品にしか存在しない技術”でもないため、非常にグレーではあるが要素の追加足り得ないと判断してだ。後者に至っては完全にロマンです。いいですよ、全く実用性の感じられない武器。理論的には、どこかの交渉人ネゴシエーター（物理）の人が乗ってたアレと同じ感じにしますが、効果範囲を射線上だったアレとは異なり、繰り出した拳の眼前に調整して破壊力を上げる予定です。

「まあ前者は私もやろうと思いますが、後者は機構を考え試作しただけなので威力の調整がまだできていないので私がやろうとすると、最悪腕が飛びかねません。なのでお願いします」

「なんて危険なモノ作ってるんですか!」

浪漫を求め再現したくなるのは、色々出来るこの世界に来てしまった故なのです。許してください。

その後、操糸術はある程度は様になり、魔力糸によって拘束してバインドに変換したり、好きな形にプロテクションを張ったりと応用が利くことが判明しました。いい感じですよ、やってみるものですね。

そして模擬パイルバンカーに至っては……威力が高すぎました。食らった相手は爆発四散。な展開になりかねないので最重要調整案件になりました。

case:02 「物は試し」

また別の時、今度は、出来てしまったら要素を増やすことに成りかねないが、どうしても試してみたい事をやろうと思いい立つ。

「ねえ、アルサナ」

『ん?どうした、お嬢』

「お嬢いうな!せめて名前にして。そうすれば、貴方の扱いも良くするし、自立融合機化ユニゾンデバイスもさっさと取り組みますから」

『ふっ……だが断る』

こいつ、いつまで経っても態度を改めようとしなない。まあ元が元だから仕方ないといえれば仕方ないのだが。

「はあ……まあいいです。それで、相談なんですけども」

『なんだ?またなんか再現でもしようってのか?』

「流石、理解が早いですね。そうですね、ちよつと考えたんですよ、某魔法先生の



マギア・エレベア

闇の魔法つてカートリッジシステムに似てなくもないかなあって。だからアレをやってみようつ

『いや、流石にアレは止めようぜ、なんつーか既に嫌な予感、失敗に終わる予感しかしねえよ』

言い終わる前に遮られる。そんなに不安な要素あるかな？

「え？確かにこの世界の変換は資質に頼るところが多いですし、“炎熱”・“凍結”・“電雷”の3つですけど、あの作品でも“雷”と“氷”ぐらいしか出なかつたですし、それに術式の圧縮や固定は収束砲みたいな所がありますから不可能ではないかと」

『吸収と自身の魔力転身はどうすんだよ』

「えっと、カートリッジ利用以外考えてなかつたですね。まあ魔力転身というより、アレにあつた雷化とかは無理としても、纏うぐらいは出来そうじゃないですか」

そうでした、アレもたしか発動した後の魔法を圧縮・固定・掌握（吸収）して発動でしたね。

「細かい所は一回試してから考えましょう。とりあえず、“纏えるか”ぐらいは試します。それができれば近接徒手空拳に対する自動防御機構になりますし。ではアルサナ、変換とその変換魔力をブーストの要領で私に流してください」

『……………どうなつてもしらねえぞ。いいか、俺はちゃんと注意して、止める様に最初に言つ

「たからな？」

「実験なんですから失敗してもいいんですよ、さあ、早く！」

ふふふ、これが出来れば足りない近接防衛もバッチリです。吸収についてはあの子を助ける事が出来た時に考えればいい事。

くくく 電雷”の場合く

「あばばばばばば、痛い！地味にすっごい痛い！ピリピリする!!」

静電気のあのバチツつとした奴がずっと続いているような感じになった。纏う事自体は成功している。あわよくば某狩人x2の暗殺一家の彼みたいになるかと思っただがそれどころではなかった。

くくく 炎熱”の場合く

「あつっーい！すごく熱いのに、熱いのに火傷も何も無い。けどとにかく熱い。つて服燃えた!?アルサナ！バリアジャケット展開して！早く!!」

纏った炎は自身を燃やすことは無かったが、周りが燃える、主に服が。そしてとにかく熱く、自分で纏っているのに熱が遮断できなかった。燃やしてしまった服の事で後でリニスに怒られないか不安だ。

「凍結」の場合

「(ガチガチガチガチ)……さ、寒い。炎熱の時もそうでしたが自身の変換魔力なのに温度変化には全く耐性出来ないんですね……バリアジャケット展開してもこれですか……」

氷を纏ってアイスアーマー!とかやりたかったのですが、これでは完全に無理ですね。専用デバイスの補助があつたとはいえ、こんな変換を扱ったクロノ君ってホントすごいですね。

「全変換を試し終えて」

「……」

既に試すだけで満身創痍である。

『あーあ……だから言ったのに。原作でもあまり語られてなくて描写もなかった筈だが、おそらく変換自体は誰でもできるが、資質を先天的に持つ奴以外は纏ったりするとそういう弊害が出るんだろうよ』

「……?……!」

『ああ？「A's以降どうしよう？」だ？　しらねえよ、それに「このままだと裏方に徹する事ができず表舞台に上がらなくちやいけなくなる！」だと？　いや、その心配は要らねえよ、大丈夫だ』

「……」

『いや、喋れねえからって全部目で訴えてくるのやめろや。念話つかえ、念話を。「どういうこと？」って聞かれりや……まあもうちよい経てばわかるだろうよ。最後に求めた“何かしらの稀少技能”も関わってくるからよ』

そう最後に締めくくったアルサナの言葉を聞いて、私の意識は一時的に落ちた。

その後、目を覚ませば夕方、急いで帰ればリニスに何をしたのかと怒られ、燃えた服の件でも怒られた。

case:03 「フラグは建てたまま放置したい」

やつてきました、図書館！……すっごく広いよ。

「なにか探しましょうかねえ……やつぱり地理確認からですかねえ」

『PCがあるなら俺を繋いでくれれば、近年の事件やOS史とかも調べられるぜ？』

「広すぎてちよつと、迷う気がするんですよねー」

『いや、俺が居るじゃん』

ああそういうアナタ無駄に高性能なデバイスでしたね。

「じゃあちよつと探検気味に一通り回って見ますか」

『時間はあるんだ、ゆつくりいこうや』

そうやりとりし、とりあえず全体を見て回って行く事にした。

「……ここ何が置いてあるエリアなの？」

『……なんだろうな？ 少なくとも日本語や英語の背表紙じゃねえな？ なんでそんなモンまで蔵書してんだ、ここ』

ありたいいに言えば、目的のモノはまだ見つかっていない。広すぎる上に2階まで在ったりする、大図書館過ぎる。

「入り口まで一旦戻って地理関連の所でも探しますかね」

『そうしよう、流石にマップピング凄いなってきたからな。もしかするとこれも俺らというイレギュラーの影響か、それとも元々からここまでデカイのか……』

後者の可能性は考えたくないですね。でも有り得なくはないですね。

〈地理コーナー〉

さつて、先ずは日本地図からですかね。

「ん、よつと、くつ」

背の低さが恨めしい、上のほうに在るモノに手が届かない。むう、何処かに台は……  
「あの……コレ、使います?」

後ろから誰かに声をかけられた。親切な人も居るものだ。

「あつ、すみません。ありがとうございます、す……」

そりや、優しいはずですよね……其処にいたのは、車椅子に乗った主人公の一人、  
八神はやて“ちゃんその人でした。何故私が遭遇するし。ここは主人公属性を付与された男のオリ主君が出会う所で

『(人はそれを“運命力”と呼ぶ)』

「呼びません、黙っててください」

まずい、出会ってしまった以上逃げ出すのはありえない。それにまだろくに調べ物も終つてないのだ。かといって必要以上に仲良くすると良からぬ影響を及ぼしかねない、  
どうする! 私!

「なにか探してるん? わたしも手伝おか?」

あれ? もしや年下に思われてる? て今はどうでも……ま、いつか出逢つてしまったものは仕方が無い、ここは厚意に甘えるとしましよう。

「えっと、ある程度まで詳しく描かれた日本地図と地域別に村町まで書かれた地図とか置いてある場所を探してるんですけど」

『(え!? 関わんの!?)』

「(こうなったらもう仕方ないでしょう? いっその事接点を作っておいてダメーイメージを与えるんですよ)」

そして戦いの場で別人になりきれればバレない——筈だ! ここでのイメージを||私として与えて置くのだ。

『(またどうせ失敗するだろうな)』

何も聞こえない。

「それやったら、ここやのーて、アツチの方やな。付いてきて、こつちや」

「あつ、車椅子押しますよ」

「ありがとうな」

その後、はやてちゃんに案内してもらった場所で地図書物を複数取り、調べてみたが目ぼしい地名は無かった。でも、“八十稲羽”の地名は見つけてしまった……嫌な予感しかない。他にもちらほらと現実では存在しなくて作品の中身の地名として見知ったものが在った。そんな地名が在るだけだと信じたい。事が起こらないと信じたい。

はやてちゃんとは一応連絡先は交換しました。まだ調べたい事も多いので図書館は利用するだろうし、その度に見つかからないようにするとか面倒なのでガッツリ交流する方向をとりました。



## #05 責任、決意

ふう……まさか探索系魔導の練習してて自分でもある程度探せるようになったところで、近くのプールでジュエルシードを見つけてしまうとは。原作で回収された描写があった数より回収してる数が1個多いと思ったのはコレですかね。

「どうやって集めようか考えてましたが、思った以上に簡単に手に入るものですね。この程度なら改変にもならないでしょうし」

手元に出したジュエルシードを掲げながら眺める。本当に綺麗な石ころですね。いや、寶石か。願いを叶えるけれども少し歪な形で成す、どこかの汚染聖杯みたいな奴ですね。

『そんな堂々と出していると対岸のなのはちゃん達にバレっぞ』

アルサナからそんな注意を受ける。というのも今私は川を挟んだ対岸の土手に居る。そして私がいる所の対岸では原作通り、少年サッカーの試合が行われている。例の男子二人も一緒だがアレは応援というよりは補助要員みたいな感じに見込まれて誘われてもいるのだろう、ユニフォームを手に持ち何やら考え込んでいる。

「平気ですよ、どうせバレませんしバレても疲労が溜まっているであろう彼女は暫くは見逃してくれる筈です。原作でそうでしたからね」

『いや、他にも怪しいのが二人いるわけだが……』

「彼らも大丈夫でしょう。探知能力が優れている様には見えませんが、この前私が偶然見つけたコレの回収時に気配さえ感じられなかったですから」

『だといいいんだがなあ』

心配性ですね。まだ物語は序盤も序盤ですが、目に見えた失敗は無いじゃないですか、不安になる要素がありません。まあ慢心するほど順調というわけでもないですが。

『で？ どうすんだ、この後のアレは。結構規模がデカいが俺らだけでやるつもりか？』

正直に言うと現状の自分の力では――

「そのつもりですけど、規模が規模だけに厳しいですよねー」

あの規模のモノを全くの被害を出さないというのは難しいだろう。勿論、前提として結界を展開して次層隔離をするつもりではあるのだが、それも完璧に行えるとも限らない。

「どうしよう……一回くらいは、もう放っておいても……いいんじゃないですかね……」

？ 既に協力者イレギュラー1人居ますし」

『やる気無くすのはえーよ、今回だからこそ見守る意味があるだろうが』

「今までも大丈夫だったじゃないですか、きつと今回も大丈夫ですよ。まあ……やる事はやりますけど」

どんな二次被害が出るかわからないから街への被害は最小限にしなければいけない。でも、そうすると自分がやつてる事の重さをなのはちゃんか自覚するタイミングがなくなるのかな？

「一番手つ取り早いのは、今手元にあるコレにリミッター処理を施して、あの少年の持つてるモノと揃り代える事ですかねえ。そうすればある程度の規模に抑えて暴走するでしょうし」

この案が自分で災害の規模の“上限”を抑えられる範囲に設定しつつ、原作の流れを変えずに事を成せる。ただ一つある問題を除けば

『バレっぞ、確実に。回収されたら不自然に施されてる封印処理の形跡でな』

「そうですよねーそれが引つ掛かるからこの案は却下なんですよ」

案を実行に移してしまうと暗躍するのはとても難しい状態となる。その理由が“目立ちたく／表舞台に立ちたくくない、それに歴史の流れを変える気がないから”というのは傍から見れば些かアレかもしれないが。

「まあ、今まで通りに結界の展開、それに加えて様子見と這い回る木の根を拘束なり伐採

なりするだけでいいですかね」

『伐採はやめとけ、封印すりゃアレは諸共消えるがその前に目撃されると駄目だからな』  
 ……結界内の出来事は、異層次元での出来事。解除すればある程度は元通りに成るし確かに認識させる為には壊す必要があるが、それでも壊れていくのをただ見ているだけなのは少し心苦しいものを感じる。

「う〜ん……なんか、考えるだけ無駄な気がしてきました。行当りばったり、けーすばいけーすこそ私のモットー。なので、先に街に向いて買物でもしますか」

面倒臭くなったので、考えるのを辞めた。もう既にイレギュラーが居るとわかってい  
 る以上、原作知識なぞ流れの把握以外には微塵も役に立たないのだ、そう決め付けるこ  
 とにした。

□~~~~~□

街に出向き、色々と見て回り、さてそろそろ物事は起こるのだろうかと思ひ、最後に  
 入った店を出たら――

「シヨップでレトロゲー買い漁っていたらもう既に事が起こり始めていた件」

『夢中になりすぎだったな。まさか前世でレアモノ過ぎた物たちが普通に新作であると

はな』

知っていたといえれば知っていたのだが、どうやらやはりこの世界は前世より幾らか昔の時代のものであった。携帯が二つ折りの時点で薄々気がついてはいたけれど。

「それにしても番長君が居ながら、事前に防がれたりはしなかつたんですかね？ 私みたいに原作を辿らせる様にわざと動かないような事をしない限り、自ら動いて止めべき一大事ですよね」

自分とて“原作に限りなく近い形で辿らせる”という思いがなければ、この騒動は事前に止めに入る。彼がそうしないのは何故だろうという疑問は当然残る。まあそれもその内わかることであろう。

「アルサナには私とは別方向にバインドなどを掛けて欲しいので、今回はハイドに割く思考数が惜しいです。故にアレ出してください、アレ」

『あの“なにか再現できないかな？”とか言い出して作り始めたらいつの間にか出来てたアレな』

「いや、まあそうだけど何その棘のある言い方。いいから早く収納空間ストレージからだして  
【偽・顔のない王】  
ダミー・ノーフェイス・メイキング」

某運命の外伝作品であるE xで出てくる彼の隠密宝具——その再現品。アルサナの言う通り何故か再現できてしまった物。絶対に二個目の特典“その世界で出来る限り

の技術の技量”を拡大解釈された所為だと考える。まさか他作品の要素まで再現できるとは思わなかった。

ただ皮と名前を似せているだけで使われている技術そのもの自体は、この世界のモノを応用してだ。決して概念武装化しているわけではない——筈。

単に“この世界の魔法がプログラムでもある”という点をおおらかに解釈し、オペティクハイドを解析して、書換えて、付加えて、添削して、特化させたもの——を更に重ね掛けして、激しく動いたりしても大丈夫な様に効率をフル強化しただけである。

再現したいという思いと実験という意味を含め原典に近づける為、熱探知・気配探知・光学探知用の隠密効果にそれぞれ一点特化させたオペティクハイドを重ね掛けしたプログラムをマントに張り付けた代物。オペティクハイドのみの起動を設定したストレージデバイスみたいな感じですよ。魔力消費自体はオペティクハイド単体を発動させ続ける程度の消費なのでSttSが始まったら彼女にあげても良いと思ってる。むしろSttSの物語を考えればあげるべきだろう。

「よし、纏って発動確認。既に街に被害が出ちゃってる上に、規模が規模だからアルサナ、境界よろしく」

『任されたつと……よし張ったぜ、バレにくいちゃんとしたやつをな』

なんですか？　今までちゃんとしたモノ張れて無い私への当てつけですか？　とど

今はそういうのはどうでもよくて

「四方に広がっているので、高高度まで上がりましょうか。なのはちやんと番長君が居ない2方向を補えばいいでしょう」

完全に止めるのが理想だけでもソレはソレで私の考え的にはダメなので、あくまで動きを遅くする程度に。太陽の位置から影が出来ない様にも考えておく、そんなのでバレルとか悲しすぎるしダサすぎる。

「この日の為に考えておいた（これ以降多分使う機会がない）モードを。アルサナ、モード状況センチネル監視者でセットアップしてください」

『あいよー！』

これも、恐らくもたらされた技術力が実はチート級なのかも？ と考える要因の一つ。デバイスを何故か結構弄れます。まあ原作でもS t Sでテイアナのデバイスであるクロスミラージュが結構形態変えていたんでいけるのでは？ と魔改造グロウしました。もつとも何かが足りないためか、現時点では基本形である拳袋グローブに拡張展開させているに止まっているが。

セットアップと共に服装が変わる。パンツルックにメガネ（簡易モニターと計測器の役目）ヘッドフォン（目で見ていないところの情報を音声として伝える）そして白衣！

まあよくある研究者然とした恰好、もちろんバリアジャケットであるが。

「やっぱりこの格好、かつこいいですよ。マッドっぽくて」

『お嬢が楽しんでるならいいが、どつからどうみても髪の色以外はプリンダンスの人だぞ』

いいじゃん、可愛いじゃん、あの子。

「そんな事より、サーチャー飛ばしてモニター展開と操作パネル出して」

目の前に2×2のモニターを展開させる、手元にも4枚のパネル群。モニターはなのはちちゃんと番長君、そしてその二人が居ない方を写し、パネルはそれぞれに対応しつつワンプッシュでバインドなどを発動できるように組み込んだものだ。属性変換術式組み上げを出来るだけ横着したいがために頑張った。

「さって、なのはちちゃんは……おおう、なんだか現状をみて少し落ちこんでますね、そしてそれを慰める番長君とユーノ君」

そのくんだり、終わった後じやだめですかね？ ジュエルシード絶賛暴走中ですよ？

「つとと、やる気になりましたか。近づくのが危ない今回、番長君はどのように戦うのでしょうか」

出来れば——貰っていればなのだが、他の技使えるのか見せて欲しい。ガル系統以外ならこの世界の変換で再現できそうだから、発動したらどの様になるか見せて！

相手が植物であり、封印自体はなのはちちゃんのバスターで封印されるのが本筋である



から、時間が稼げればそれでいい筈。なのでココはプフ系統が使われればいいのだが  
『相手が植物なら……アギ！』

非常に残念だ。それが延焼していつて中心の二人にたどり着いたらどうするつもり  
なのだ。

私はそれとなく延焼して行きそうな枝葉の部分をバインドで圧壊させておく。もち  
ろん、自分の見ている部分は全て“氷結”の属性を加えたバインドで拘束なりしておい  
てある。

『ふいー、お嬢こつちも終わったぜ。節約記録更新だ……つつても、まだまだお嬢の魔力  
有り余ってんな』

結構使っていると思いますが、デバイスの計測でも余裕ある様でよかった、元々そ  
こまで多くないみたいですからね私の魔力量。節約できるように改良しまくりですよ、  
魔法を。

「お疲れアルサナ。早速で悪いけど、あの番長君の“アギ”、発生したヤツの数値化は終  
わっているから映像と照らしわせて発生プロセスとかの解析と変換で再現できるか実験  
よろしくー」

『なんだ？ もういいのか？ なのはちゃんにこそつとブーストかけてやったりしねえ  
のか？』

何と恐ろしい事を。そもそもあの二人以外の場所はもう現状維持でいいんですからすることもないんですよ、それに

「え？ あの大火力魔砲少女にですか？ 嫌ですよ、ただでさえ何か原作より出力強そうなんですから。これで私がブーストした状態を経験してそこまで出力上がられても大変なだけですもん」

最悪、今張っている限界さえもぶち抜きかねない。というより、確実に抜いてくる。「ついでですし、なのはちゃんの詳細出力も計測しておきますかねえ」

計測しデータ化して、まあ“技”として形式化すれば見様見真似で中途半端なものとしては伝わらないですし、対処も明確に出来ますからね。私の立ち位置は一步でも見間違えられれば敵ですからね。いずれの未来に接点を得る彼女たちにも見様見真似などではなく、確りしたものを渡したいですからね。

「……あの物語が始まって、とりあえず制御技術のデータだけでもちゃんとしたモノにして渡せればいいと思うんですけど……おそらく渡した上でも、それによって強化された状態で、原作を辿るんでしょうね」

あの子は原作上語られる範囲だけでもそういう子だったはずだ。お兄さんが亡くなる展開だけでも防げればいいでしょうが、今私がミッドチルダではなく地球に居る以上根回しも出来ないですからね。

「ま、先の事は先の事。 さて、どうやらなのはちちゃんは決意を固めたようですね。番長君は元からそうでしょうけども」

酷かも知れないが、これは必要な通過儀礼——イベントの一つなのだ。“危険がある”事を意識してもらわないと、この先が危ない。そして番長君は出来る事ならもう少し頭を働かせて頑張つてほしい、今だ下位スキルしか使っていないのも気になる所。

「いつそどこかで回復系スキル使つてくれないですかね。この世界の既存のヒールとは違うプロセスを取り込みみたいですし」

最終決戦時にアリシアちゃんに向けて“リカム”は出すでしょうね。私の予測ですと“それでは助けられない”と思つている。

そう、恐らくだがアレ系統だけでは無理なのだ。

——とかなんとか色々と考えているうちになのはちちゃんと番長君の姿はなくなつていた

「アルサナ、結界解除。そして帰りますか」

『あいよ。アギの解析も終わったぜ、なんとか出来そうだ』

「それは重畳」

最初出遅れた所為で街は少し壊れているけど、原作程の崩壊は無かった。現実だとは考えていても、やはりまだ心の何処かで“物語”であることを、少なからず思っているのかもしれない。それが油断に繋がらなければいいのだが。

次はいよいよフェイトちゃんとの邂逅ですかあ。リニス連れて行きましょう。反応が見たいです。

□~~~~~□

軽い気持ちじゃ無かったかと言えば嘘になるかもしれない。自分にも出来る事がある、同じような力を使う人が居たけれど、自分にしか出来ない事、自分にも率先して出来る事があるのだと。

「私……気が付いてたのになあ……」

その気持ちが無かったのは、今までの騒動が大きくなかった為、共に行動する人が居た為、何より“目に見えた失敗がなく”終わっていた為。そんな幸運であり、ある意味では不運の積み重なりによって出来てしまった気持ち。それは必要の無かった事であり、しかし必要であったこと。世界の流れによるものか、それとも流れに沿わせようとする者の仕業か。

「そんなに落ち込まないで、なのは。お願いするしか出来なかった僕にも責任はあるから」

「そうだ、なのは。一人で背負い込もうとするな。全く気が付いていなかった俺にも責任を負わせてくれ」

悠次とユーノはそうなのはを慰める。方向は違うが、二人とも自分にも責任があると感じているのは本当だからだ。一方は何も知らない一般人を巻き込んでしまったという思いから、もう一方は流れを知っていたから防げた筈なのに、間に合わなかった事から。

「決めたよ。私、もうこんな事が起こらないように真剣にユーノ君を手伝う。だから悠次くん、これからも一緒に手伝って欲しい」

決して力が、才能が無かったわけではない。ただ“気持ち”が足りなかった、それだけであった。なのははそれを意識し、新たに決意する。

「……ああ、俺も少し軽く考え過ぎていたのかもしれない。俺なんかで良ければ協力させてくれ」

悠次もまた決意をする。今までも本気ではあったのかもしれないが、やはり先行した知識と得た力の所為もあつたのだろう。しかし、まだ彼が“現実”であると認識しているかは定かではない。

「それじゃあコレから、少し具体的にどうするかだが……」

少年少女は帰路に着きながらも話し合う。今回の事が起きた原因を、起こさないようにどうすればいいかを、もし起きてしまったらどの様にしていくかを。各々がそれぞれの意見、様々な考えを述べていく。

感知はその中で比較的秀でているなのが少しでも気が付けばユーノに伝え其処から悠次に伝える事や、もし初日や神社の時のように思念体や暴走体が暴れる場合は悠次が前に出て抑えている間になのはが封印する事、なのはが感じた発動前のジュールシードの魔力の感じ等、いろいろな事を。

そんな折、彼らはそれぞれが少し妙に思っていた事を口々に話し合っていく。

「そういえばユーノ、今回も何か妙な感じはしたのか？」

初日からユーノは何かしらの気配のようなものを感じてはいた。初日、神社と続いて少しか感じ居たがその後は感じては居なかったのだが、今回はどうなのか、あまり感知が得意ではない悠次がそうユーノに尋ねた。

「いや、今回は全く感じなかったよ。この間の夜の学校の時も感じなかったし、やっぱり僕の気のせいだったのかもしれない」

今回は結界の発動者が違うため、魔導術式としての完成度が違うので感知される穴が無かっただけではあるのだが、それを彼らが知る術はなかった。因みに、夜の学校で感

じ無かったのはなんてことはない、当の本人達が全く気にしておらず、自宅で寝ていた為である。

「そうか……ならジュエルシードに関わっているのは“今の所”、俺やなのは以外には居ないと思ってても良さそうだな」

「そうですね。元々、この世界には魔法なんて伝わっていないなかった様ですし、なのはやユウジが特殊な例だったんでしよう」

ユーノはそう考える。彼や彼女が特殊なのだ。だがしかしそれのお陰で自分は助かっている、その感謝は忘れてはいけなさと。しかし悠次は知っている。そう遠くないうちに、ジュエルシードを集める者が一人増える事を。

「それにしても……」

ふと、今まで声を発しなかったなのはが思いついたかの様に声をだす。

「だとしたら、私や悠次君が抑えていた所以外の街の壊れ方が控えめだったのはなんでだろう?」

そう、なのはや悠次が抑えていた所以外の被害が比較的少なかったのだ。むしろ場所によっては彼らが行っていた所よりも少ないとさえ言える。

「さあなあ、偶々だったんじゃないか? もしくはジュエルシードがより強く願いを叶えようとする為に、魔力を持っていた俺やなのは、ユーノに枝とかを伸ばして取り込もう

としたんじゃないか？」

悠次がそう答える。彼としてもそれは単なる憶測に過ぎない、それも仕方の無い事ではある。彼の記憶している限りではあの木が発現後“動いていた”事など無かつた筈なのだから。だが今までも多少の差異が在った。それは自分というイレギュラーが入った為だと考えていたため今回もその一端なのだろうと。

自分以外にも居る事を、そんな存在のお陰で被害などが最小限に止められている事を彼女達を知るのももう少し先の話。

「そういうものなのかな？」

「そういうもんだって、それにもし今後同じような暴走が起きたときに、被害の方向を最小限に止めれるからいいだろう」

「そうだよ、なのは。発動して暴走してしまつたら、もうどうなるかわからないんだ。その時によつて起こる事は色々あるみたいだからね」

「そう……だよね」

なのは悠次やユーノの言葉で納得をする。同じような事は起こらない、けれども似たような事は起こるかもしれない。ならば起こってしまった時にもう一度、調べてみるのだと。

「よし、次からは、本気で頑張るよ！」



「だな」「ですね」

彼女達は次に備える。次は傷を負う戦いになるかもしれないと知っているのは、その中でもただ一人。

「(悠次君たちは偶然だと言っているけど)」

やはり、一人だけ、それこそ主人公補正とでも言うべき勘の鋭さを持つ者が

「(やつぱり、私達を、ううん、”私”を助けてくれている人が居る気がする。姿を見せたくないけれど、どこか暖かい視線を感じるの)」

自分を“見守る様な”視線が有る事に気が付いていた。しかし、そんな不確定な事を告げて他の二人に余計な心配をかけまいと、まだなのははその事を相談できずに居た。

## #06 idle talk:03

case:04 『今の在り方』

「なにもない日、さいつこー……」

どこかの童話の帽子屋のような台詞だが、紛れも無い心からの本音である。本筋に正す為の努力をしなくていいし、むしろこの間の事で番長君も気持ちを高めてくれたつばいから、もう彼だけでいいじゃないかな。

「だらけ過ぎですよ、イツキ。普段からしつかりとしていないと、ここぞという時にうつかりミスを犯しますよ?」

そんなどこかの赤がイメージカラーの優雅(○)な一族じゃないんですから大丈夫ですつて。万が一に成らない為にも、多分アルサナという特異な存在が居るんですから。

「やる事は終わらせてあるからいいじゃないですかー……」

「全く……とところで、前々から疑問に思っていたのですが、その、イツキのご両親は?」  
うん? 今世の両親ですか? それはですね

「お父さんとお母さんは、ちよつと会えないところに居ますねえ」

そう言つて、柵の上に飾つてある写真立てを指さす。そこには、満面の笑みを浮かべる男女の姿——高身長で割とガタイの良い黒髪短髪の男性と、その男性に抱きかかえられるようにして低身長でおっとりしている感じの肩ほどまでの長さをした薄緑色の髪の女性——が写つていた。

「そう……ですか」

それを見てリニスは何を勘違いしたのか、少し落ち込み気味にそう呟く。おや、もしかして

「何を勘違いしてるのか知らないですけど、二人とも生きてますよ？」

「……私の心配した気持ちを返してください」

勝手に勘違いしたのにそれは無いんじゃないですか？ そう考えながらリニスの方に向くと、なにやらとても不機嫌そうな顔で見られて、ため息をつかれた。

「はあ……いいです。それで？ なんで会えないんですか？」

「私もよくわからないんですけど、なんでも管理局？ て所で世界をまたにかけて働いてるらしいです。ここからすごく遠いうえに忙しいらしく頻繁に会えないんだとか」

嘘は言っていない。どうも今世の両親はなんやかんや出来る人“らしい”。つといるのも、どれだけねだつても教えてくれなかった。両親も魔法を使えるのだから魔導師

“だろう”、デバイスを持っていくのだから魔導師“だろう”。というのが幼いころの憶測だったのだが、ある時たまたま見つけたデータにそれらしい事が書いてあった、見つけた後勝手にデバイスを弄ったのを怒られはしたが。

両親曰く「いつときには自由に育ってほしいから、魔法に、魔導師に憧れて私達のようにならうと思わなくてもいい」との事。

……すみません、それ自称神に決められてるんで避けられないんですけどね。

「管理局……ですか」

やっぱり、プレシアさんの事で少し思うところがあるんですかね？ 確かアリシアちゃんが亡くなる事件のそもそもの原因が管理局の体制と一部の上層部の人間にあるのでしたっけ。もし、彼女達も救うのであれば、何かしらの証拠集めも必要ですかねえ……まあそれはその時になってからでいいか。

なんてそんな“事情”は知っていたとしても、それはあくまで知識上でしかなければ、前世での“物語”の考察上での設定でしかない。この世界でも同じ事が起こったかどうかを今確かめる術は無いし、リニスの“心情”はそう簡単に割り切れるものでも無いのだろう。気の利いたオリ主君だったり、主人公補正を持った者なら、ここでリニスを上手い具合に慰められるのかも知れないが、あいにく私はその星の元に生まれたわけじゃない。それでも――

「リニスの過去に何があったかは、詮索しないですし、何を抱えているのかもわかりません。そもそも、私には其処まで人の心に踏み込む権利が無いですからね」

まだ関わりきる事を踏みとどまって、裏方での行動をしているのがいい証拠。関わるのなら堂々とすれば一番簡単で一番楽なのだけね——

「それでも、話せる時が——私に話しても大丈夫だと思つたら、遠慮なく言つて下さい」

もし関わるとしても、未だにプレシアさんを治す方法、アリシアちゃんを蘇生させる為のこの世にはないであろう正攻法、共に具体性や確実性の無い方法しか考え付いてないけれど

「まだそれほど長く一緒に過ごした訳じゃないですけど、私はリニスのこと“家族”だと思つてますよ」

「……」

「私に会う前の、昔のリニスがどうだったとしても、今は私が拾つ……助けた神在家にいるリニスでいいんじゃないですか？」

この、所謂“無印”の物語が終る頃にはどうなるかはわからないけれど、今はソレでいいはずだ。

色々思うところは在るかも知れない、けれど、少しでも解消されれば、リニスを助け

て改変してしまった事もいい方向に働くはずだ。足りない補正を溢れる中二病で補って、かける言葉を搾り出した結果のリニスの反応は・・・

「イツキ……………なに恥ずかしい言葉並べてるんですか？　そろそろお昼ですから、ご飯の準備でもしますよ」

思っていた以上にキツイ言葉が私を襲う。恥ずかしい、勢いに任せてかっこつけたのに、真面目に返されると物凄く恥ずかしい……

「ふおおおあああああ……そんな真顔で返さなくてもいいじゃないですかああああ!!」

『情けなくなつたなあ、マジで。』精神は肉体に引つ張られる“か……漫画とか二次創作で言われてたのはホントなのかもなあ』

逃げるように、私は台所に走っていつて恥ずかしさを押し込めて料理にぶつけた。ア

ルサナが何か言つてた気がしますが、そんな事を気にする余裕は無かった。

□~~~~~□

割り切つていたつもりではあった。あの事が起こつたのは回避できた事かもしれない、それでも彼女の立場ではそれが出来たとは言いがたかった。

その後、私はあの子の教育者として甦つた。それが長くない命だと知つていながら。役目が終つた時、あの子に殆どを教え終わつた時に私はもうこの世から居なくなつていた筈だった。

何の因果か、気が付くと、地球という星の日本という場所で私はその命を繋いでいた。『神在いつき』という少女に助けられる形で。魔法が浸透していないこの世界で何故か魔法が使えた少女。その上使えるだけではなく、既存の方法とは違う手段も考えて行使しようとしている幼い女の子。

荒唐無稽な“前世”とやらを話したり、何もしたくないという主義だと言いつつも厄介事に巻き込まれ、結局は自分から突っ込んでいく彼女。最初はちよつと電波な子なのかと思つたりもしたけれど、そんな子と一緒に居るのが楽しくて、なんの説明もしていないのに私をここに居させてくれて、それが思いのほか居心地が良かった。

そしてある日、ふと気になったことを聞いてみた。普段姿を見ない彼女の家族についてである。まだ二桁にもいっていない子供が一人暮らしをしているなど、普通に考えればありえない事なのだから。

私が聞くと、彼女は何気なく答えてくれた「会えない所にいる」と。聞いてはいけな  
い事を聞いてしまったと思つた……直後の彼女の言葉を聞くまでは。つくづく空気を  
良く壊す子だと思ふ。

会えないという理由の詳細を聞いて、また私は少し途惑う。『管理局』その単語はあま  
り聞きたくは無かつた。場合によつては彼女は親を失うかもしれない。今の管理局が  
どうなっているか、私にはもうわからないけれども、それでも可能性は0ではない。数  
年程度の経過では組織というのは変わらない。

そう考えていたらイツキが話し始めた、昔の私がどうであつたかを聞くつもりはな  
い、でも今ここにいる間は、そんなことを考えなくてもいいじゃないか、と。そう言い  
たかつたのだらう、言い回しが少しアレでしたけど、それでも私はその言葉で気持ちが  
幾分か楽になつた、そんな感じがしていた。

でも、だらけた体勢でマトモ過ぎる事をいう彼女はひどくアンバランスで、そんな彼  
女に素直に感想を、感謝を述べるのは癪に障つたので真顔で諭すように話題をそらし誤  
魔化した。



そうしたら泣かれた、顔全体を真っ赤にして。彼女のメンタル面は其処まで強くは無いのかもしれない。なんだかんだ言いながらも私の相手をしてくれて、料理も作ってくれる貴女を私は信頼していますよ、イツキ。

でも料理の途中に「やはり最低限の主人公補正を求めべきだったのか……」やらいっそのこと完全モブとしての立ち位置を要求しておけば……」など呟く精神面は、私が治してあげるべきでしょう。

「今は“此処”に居る私でいい……か。それでも、もし機会があるのなら……」

□~~~~~□

「……で？なんで急に家族の事気にし始めたんですか？」

リニスを思い掛けず助けてしまつてから既に2年とちよつと。家族の姿が普段見かけない、というもつともな疑問持つには普通に考えれば長すぎる期間。

「いえ、特に理由は無いですね。ふと気になつただけです。イツキは年齢に似合わないくらい、しつかり……しつかり？ してますから気にしなかつただけですよ」

「なんで？ ねえなんで言い淀んでしかも疑問形なの!？ ちよつとこつち向いて話して

よりニス！」

途中から目をそむけ、言い淀み、疑問形で言われた。原作でも家政婦的なポジションにいたりニスだが、今この場では私は彼女に頼り切らずに私だけでもしっかりやれている筈だ、すっかりしていない等そんなはずはない。

「まあそれはいいとしてですね。切っ掛けと言いますか、何か見知った空気のようなものを感じ取ったので」

「……へえ」

元が山猫素体の動物であり、更には優秀だったという原作知識からしても、第六感や探知能力は並外れているのだろう。という事はつまり、フェイトちゃんかアルフか。明確に描写はされていなかった気がするが、この次のジュエルシード発動時には登場してくるはずだ。もう地球に来て活動してもおかしくはない。魔法文化が無いとみてサーチャー系でも発動させたのか、はたまた誰かが接触したのか。なににせよ、色々と用心する項目は増えそうですね。

「それは多分正しい感覚ですよ、リニス。あと少しでわかります」

うん、絶対連れて行こう、すつごく反応が見たい。思わず出て行かれたら色んな意味で困るけれど、それはそれでちよつと対策をしておこう。猫形態で連れて行って、その間だけ戻れなくしておけばいいだけのはずだ。そんな私の反応を見て、リニスはという

と

「途端に自分の感覚が信用出来なくなりました」

そんな風にとんでもないことを言い放つ。ちよつと待つて正しいから、多分だけどそれホントに正しい感覚だから。

「でもイツキがそう言うってことは、おそらく本当にわかるのでしょね」

「い、一応納得してくれるなら、もうそれでいいです。でも次でそれが証明されますからね！ それが済めばもうちよつと信用の幅を寄せてくださいね！」

「はいはい、わかりました」

リニスから向けられる眼差しが非常にアレなのだが、ま、まあいいでしょう。

それにしても、フェイトちゃん、おそらくもう活動中ですかあ……ジュエルシードをもう少しこちら側で集めたかったのだが、バツタリ遭遇するなんていうテンプレはかましたくない、暫くは大人しくしますか。

## #07 勢揃、介入

『でだ、どうすんだ今回は』

開口一番そう言うてくるアルサナ。というのも現在、もう既にフェイトちゃんが登場する子猫がデツカくなる事柄、その事件その日を向かえていた。

「今まで通り見てるだけ、といきたいんですけど主人公側に番長君が居て、原作のこの時点でアルフは出て来てなかった。そうなると、2対1の構図が出来てしまつてフェイトちゃんが危ないんですよえ」

リニスを介入はさせない様にして連れて行くつもりではあるのだが、場合によつては介入させるのも有りか？と考へている。流石に目の前で家族がやられているのに「黙つてみていろ」なんて言えるほど薄情ではないつもりだ。もつとも番長君が其処を考慮し、なのはちちゃんとフェイトちゃんがなんやかんややつているうちに、デツカくなった猫を大人しくして封印……は出来ないんでしたね、まあ大人しくさせていればよし。つといった所でしょう。むしろどさくさに紛れて私が封印しちやいますか？

「まあ、その辺りは主人公方の出方次第で。まずは帰ってリニス回収してから行きますか」

『回収って、物みたいに扱ってやるなよ』

「いいんですよ、最終的にはフェイトちゃんの方に帰してあげる予定ですから」

私みたいな人と一緒に居るよりはよっぽど幸せに成れるだろう。本当の家族と一緒にの方が良いに決まっている。むしろ一緒に居て、不用意に私が主役陣に巻き込まれるとか勘弁願いたい。

『しかし、連れて行ってリニスが大人しくしてるか?』

「人型に戻れない様に、供給量絞ってあげればいいだけです」

『サラつとえげつない事いうなや』

維持にも形態変化にも魔力が必要なら、供給量を絞ってあげれば私に引っ付いて見る事しか出来なくなるはずだ。その辺りの仕組みはまだ調べていないので曖昧ではあるが、この先使い魔を用意する予定もさらさら無いので、別段調べる必要もない事だろう。

そんなことも考えつつ、私はリニスを回収して現場である月村邸に向かった。

□  
~~~~~  
□

「なんで私は供給魔力縛られた上でこのような場所に連れてこられたんですか？」

若干以上に不機嫌にぼやくリニス。そうなるのも至極当然の反応で、私が帰宅したときリニスは都合よく猫形態で縁側で寝ていた——のでそのまま供給量を絞って、了承や説明も無いまま連れて来た。そうしたらこの様子になったというだけである。

「この前リニスが感じたものの正体の説明、それに加えてこの場所がジュエルシード発動の場所となる」筈」だからです」

曖昧な言い方をしたが私達は既に林の中に居て、発動するであろうジュエルシードも捕捉済みで待機中の状態。サーチャーを飛ばして確認したところ、どうもお呼ばれしているのは、なのはちゃん（＋ユーノ君）だけのようである。このままなのはちゃんだけであれば原作通りに進む事だろう、むしろそれが私的には一番望ましい。

「それで」筈」とか言っておきながら、あのロストロギアも捕捉してるのにまた傍観です。イツキの目的が未だにわかりません」

まあ不確かなのは前者のフェイトちゃん登場だけですからね、ここまですれば。目的については詳しく語れないのがもどかしいですね。前世についてはまあいいだろう程度の認識でしたが、アウトプットする物語”であり、ある意味”未来”を必要以上に語るわけにはいきません。それを誰かに”伝える”事によって、どんな影響が出てくるかわかったもん

じゃないですからね。

「目的ですか……なんででしょうね。私自身も大まかにしか考えてませんよ。あえて言うのなら」起こり得る流れを、在るべき流れに沿わず」事でしょうかね」

リニスの生存というズレ、色々な要素が混ざっていると言われた世界観、そして私という存在や既に関わりを見せ動いている番神悠次という原作に居なかつたもの。もう本流など初めから無かつたようにも思えるが、まだ少ないけれど起こってきた事件は原作そのもの、沿わずことは出来るはずなのだ。

「貴女は一体……それが前に教えてもらった前世とやらにも関わってくるのですか？いえ、それだけでは説明が付かない事も幾つか在る、この先起こる事など何でも知っているとでも？」

疑問に思うのはもつともですが、語れない——語りたくない以上説明する気はないです。それはそうと」その」問いかけをされたら前世オタクとしてはこう答えなければ！

「なんでも知りませんよ、知ってr」おつ、子猫がジュエルシードに近づいて反応したな、んで、なのはちゃんが出てきたぞ。それとは別に近づいてくる反応が……3つ？なんでだ」

言わせてよおおお！ アルサナアアア！！

「…………て、え？3つ？ 多分一つは番長君、でもう一つはあの子だとすると、3つ目は一体？」

『ああ、詳細に分けると1つと2つで合計3つの反応だ。1つの方は魔力パターンからして番長君だな。残りの2つの方はわからん』

アルフでも来ちゃうの？ だとすればユーノ君が前線に立てない以上、原作通りなのはちやん陣営が若干不利で流れはそのままになるでしょうね。しかしそうなると被害が大きくなりそう……ああそういえば今回はきつちりユーノ君が結界形成してくれるんでしたっけね。

— そういう考えている内に子猫が反応を終えジュエルシードを取り込み大きくなる。

に“や”あ“あ”あ“あ”あ“あ”

「…………おうふ、鳴き声、思った以上に野太くなりましたね子猫なのに」  
実際に体感してみると、キツイ。見た目が可愛いから余計にキツイ。

そんなことを考えていたら、結界が展開された。ユーノ君の立場、漸く発揮ですね。それと同時に

「よつと…………なのは、今回はアレ…………なのか？」



「あつ、悠次君。う、うん。凄く大きくなってるけど、ちっちゃい子猫だったんだよ。早く戻してあげよう」

どうやら番長君到着の様子。今回は対象が生物ですから攻撃系じゃなくて解呪系デイスベルの魔法でも見せてくれれば嬉しいんですけどねえ、まあペルソナには巨大化とか縮小化とか無かった筈なので、どうしようも無いと思いますが、在るとすればこの世界が“状態異常回復”を広義認識してくれば出来るかな？ 程度ですかね。

どうにかして番長君に魔法を使わせられないかと考えていると、巨大化した猫に対して一つの閃光が走った。その方向を見ると

「なっ！ アレはバルディッシュユ!? という事は、あの子は……フエイト!」

其処に居る人物を見て驚くりニス。ふっふーん、その反応が見たかった！ その為に連れてきたのだ！ ちよつと嬉しい。

「知り合いの様ですね？ 貴女が感じていたモノは多分あの子やあのデバイスから出た魔力反応だったんじゃないですかね」

さも今推測しました体で言う。しかし安心しました、多少の展開の差異はあろうとも登場タイミングなどはそれほど差異が出ないみたいですね。まあそれも恐らくは“荒らす者が居ないから”でしょうけど。それはそうと……

「あのフェイトちゃん？　の横に居る同じく黒い衣装を身に纏った子、誰でしょうね？」  
「それは私にもわかりません。イツキでも知らないものであれば私が知っているはずもないのだ」

『おい……あの衣装って、もしかしてアレじゃねえのか』

リニスにはそう言ったが、正確には知らないわけではない。アルサナも言った通り多分知っている。あの衣装は”と付くが。

顔はフードが被っているので見えないが、どうせあの中身は銀髪だ、この際どうでもいい。羽織ってるコートの様な——あるいはボンチョと言ってもいい様な——もの、アレ知ってる、プロトタイプのアセヲ君が着てたやつでしょう？　基本黒で所々赤いラインが走っている。昆虫の様な刺々しい甲冑だとバレると思ったのかな？（アレ兜とか無かったしね）もしくは、物語が進んでいくことにVerUPしていくとか？　まあ無いですね。ただ見えてる足元の軽装具合から察するにIstフォームでしょうね、あの外套は正体を隠す為のモノでしょう。

「フェイト……あれがお前が探しているものか？」

「うん、そうだよリョウ。今は発動して猫？が取り込んであんな風に成っちゃってるけど間違いないよ、ジュエルシードだ」

正体を探るには喋ってくれるかどうかでしたが、案外あっさりと声を発してくれまし

たね。でもおそらくはなのはちゃん達には聞こえてないでしょう、こっちはわざわざ音声を拾っているから聞こえているけれど。

「アルサナ、声紋照合って出来たりします?」

『あたりまえだろ? ……認識障害や声質変換などは使われてねえな。まさしくお嬢が気にしてた崎神亮夜（さきがみりょうや）そのものだ』

「ありがとアルサナ。これで彼も確定ですね」

リニス（リニス）が居るので転生者云々はほかす。しかし、両陣営に一人ずつとはなんとも……パワーバランスはこの回収戦においては一緒、というよりフェイトちゃん側に有利ですかね。亮夜君の戦闘力次第といったところでしよう。

「誰なんだお前たちは」

番長君がフェイトちゃん達に問う。いや、もう一人も出てきたことだし彼も名前で呼んであげますか、悠次君。彼も“流れ”をわきまえてくれているのか、フェイトちゃんを名前で呼んだりはいしませんですね、わかっているでしょうに。

「誰だと聞かれて、我こそは、つと簡単に答える奴が居るかよ。俺達は此処で初めて会って、敵なのか味方なのかもわからねえ状況だ。そんな状態で名乗るといふ事は自分の手の内を早々に晒す様なもんだろ、そんなことするかよ」

ごもつともですな亮夜君。なのはちゃんは見知らぬ人物の急な乱入に、悠次君は本来

居ない筈のフェイトちゃんの同行者に驚いて、彼の声質から判断するような冷静さは無いようですね。私は傍観してただけなのでそれを把握出来ませすけど。

「俺達の目的はアレが持つているモン、ジュエルシードだけだ。おめえらに興味はねえ、邪魔しねえ様にそこで見てろ」

「ジュエルシードを集めるのが目的なら、私達と協力は出来ないの!？」

「いやー平和主義ですねえ、でも嫌いじゃないですよ、私とてそっちに居ればそう聞いたでしょう、もつとも」問答無用で拘束した後「っていう枕詞が付いてきますが。」

「ハッ、それは無理だな。俺達はただ集めてるだけじゃねえんだ、だが説明は出来ねえし、したところで証明できる証拠もねえ。話し合うだけ今は無駄なんだよ」

それだけを告げると、彼は大きくなつた猫に向かつて動き出した。初めから話し合う気は無く早々に事を済ませて帰りたいんでしょうね、普通だつたらなのはちゃんが長い間気絶する事態になりますし。

だが、それだけでは終わらないのがイレギュラー満載のこの世界、猫に向かつて彼に立ちふさがる人が一人居た。

「悪いが、事情も話せないような奴の言葉は聞けない。アレは俺たちが真つ当な理由があつて、危ない物だから集めているんだ。お前たちには渡せない」

両腕を胸の前で組み仁王立ちしている悠次君、所謂「ガイナ立ち」と呼ばれるアレで

ある。つが、いかんせんまだ小学生、タツパが足りてないのでいまいちかつこよさに欠ける。

「ツチ、邪魔くせえ。こつちは俺に任せてくれ、アツチの回収行ってこい」

「うん、わかつた」

促すフードを目深に被った亮夜君と、軽く答えて猫に向かうフェイトちゃん。それと同時に悠次君が止めようとするが、亮夜君が腰の辺りから出した両手に逆手で持った短剣によつて邪魔をされる。おお、やっぱり双剣ですか、まあ武器（デバイス）つてだけで他の技も使える可能性はまだあるでしょうけどね。

対する悠次君は背負っていた木刀を抜く。前々から思ってたけど、もしかして彼はデバイスを持ってないんじゃないか？ 持ってたなら封印出来ますもんね。

そうこうしている内に、打合う少年二人。あの二人はあのままやって貰いましょう、そして友情でも築きなさい。猫に向かったフェイトちゃんはと言えば……

「待って、どうしても協力は出来ないの？ せめて、お話だけでも」

「必要ないよ、私にはもう協力者がいる。これ以上他の人には……でも、アナタが私の行動を邪魔するなら……」

バルディッシュを構えるフェイトちゃん。そして放たれるフォトンランサー。問答無用過ぎるでしょう、彼（亮夜君）は一体どんな手練手管を用いてアツチの陣営に付い

たんでしょか？

放たれたフォトンランサーを上手く避けるのはちゃん。貴女の才能は原作以上に成ってる気がしてなりません。まあそれであるならば今後の危険も減るのでいいでしょう。

二人は結構高いところまで上がっていききました……コレ、後でなのはちゃんが流れ通りならアソコから落ちるんですか？ ソレは危なすぎる、ちよつと気にしておきますか。

さて、各々が1vs1で相対し始め騒動の元凶である猫は放置。そのままは怖いので私は私で動くとしましょうか。とりあえず誰もこちに気を割けて無さそうなので、猫を拘束してジュエルシード摘出すとして封印つと。これは私の懐にしまつて、以前手に入れたモノに細工をしてつと、よし。さてユーノ君は……居た居た、見る事しか出来ないのもどかしいでしょうね。

「……どうも、こんにちわ」

「誰!？」

真つ当に驚くユーノ君。そりやこれだけ色々な事が起こってから更に頭の上に猫乗せた得体の知れない人物が来たらそうなりますよね。因みに顔は隠してます、某うたわれしお方の仮面を被って。口元が見えてる? だってそこまである仮面とかだと喋りにくいじゃないですか。

「私が何処の誰かは、今気にすることじゃないと思いますよ。それよりもアレ、止めなくていいんですか? ああの白い子と黒……どつちも黒いですね、灰色の髪の子。怪我をしてしまうと、元の姿に戻れる魔力量も集まってない貴方では回復させきることも出来ないでしょう?」

「どうして僕の事をそこまで……でも、僕にアレを止めることは出来ません、その力が今の僕にはないので」

「では、これを交渉材料として使ってください」

そういつて私はジュエルシードを一つ取り出す。勿論細工してある方だ。本音を言うなら、もう放っておいて確保ジュエルシードも増やして帰りたいのだが、無駄に怪我をされても目覚めが悪い。

「それは、ジュエルシード!?! どうして貴女が」

「あそこの猫を抑えて取り出したんですよ。さつ、早くこれをあの金髪少女とフードの

黒い二人組に提示して争いを止めて来てください。貴方がコレを集めていて、誰かに渡すのが躊躇われるのもわかりませんが、今は協力者の安全を優先するのが依頼者としてすべき事でしょう？」

最後にそう告げて、かつこよく謎の人物として去ろうとした直後に爆発音が二つ上がった。ちよ、私たちが話してる間にもう終わったの!? まだ数分も経っていないのに!

「くつ、事を穩便に済ますためのフラグを建築していたのに! 建てる前に折られたら裏から手回しして頑張る意味無くなるじゃないですか!」

まずいマズイ拙い、あの高さからのフリーフォールは非常にマズイ。少年二人は飛ばずに地上戦を繰り広げていたから最悪でもどっちかがヤムチャポーズで沈黙しているだけだろうけど、なのはちゃん達は上空だった。どちらが負けたにせよ助けなければいけない。

空中で爆発音をした方に視線を向けると、落ちてくる影が一つ……白いという事は原作通りなのはちゃんが負けたか。

「間に合つてよ……フェレット君、衝撃吸収の魔法陣、何枚展開できる!」

「え!! えつと……今は魔力が無いので4枚ぐらいかと」

「それである子の落下衝撃を吸収は?」



「多分、今の僕では完全には無理です」

「私が魔力を渡したとして、君の全力では？」

「それでも7枚程が限度だと思えます、だけどそれだとしても」

「1枚がどれだけの衝撃を和らげるか細かい事はわかりませんが、今の君の反応だと、あの高さは無理ってことですよね」

チイ、思ってた以上に改変されて影響が来てますね。今回ばかりはもう仕方ないか。その前にリニスが何とかできないか聞いてみよう。

「(リニスは何かいけます?)」

「(この供給制限を解除してくれば余裕で受け止められる程度は。落ちてくる速さや飛んでいたであろう高さ的にも合計10枚程で大丈夫でしょう)」

「(じゃあ解除しますので展開よろしく、あつ猫のまま)」

「(わかりました)」

よし、コレでなのはちゃんの下ダメージは0だ。

「じゃあ残りは私のほうで何とかしますのでとりあえず今の限界を展開してください」  
「わ、わかりました」

展開されるのはユーノ君の進言どおり4枚。そして残り6枚をリニスが間に重ねるように展開する。展開し終わると同時に一番上層に展開したモノなのはちゃんが落

ちてきた。ギリギリだった。怪我は……良かった、其処まではないようですね、原作よりはやはり酷くはなってますが。

「あの子は私が診ておくから、君はソレ渡してあの黒い二人組に帰ってもらってきて」「え？ あ、ああ、ハイ、わかりました」

あつちはもうユーノ君に任せよう、私まだ出て行きたくないし。つと、悠次君&亮夜君の方は……ははは、すつごい、リアルヤムチャポーズだあ。クレーター作って悠次君が倒れてる、どっちの技にもクレーター作るようなモノはない気がするんですけどねえ。彼のゲームの双剣スキル『疾風双刃』辺りが確か打ち下ろしだった気がしますからそれでですかね。

さて、フィジカルヒール 復つと。なのはちちゃんは軽症だからいいですけど、悠次君結構ポロポロですわねえ、どんな争いをしたのやら。今この程度のいざこざでそうまで成ってしまうのでしたらA's編になった時、頑張らないと最悪の方向性に行きかねませんね、後で対策を考えておきましょう。

「う……んう……」

ヒールのお陰かなのはちちゃんが意識を取り戻し始めた。やば、今私を認識されると困るんですけど、悠次君の治療中で動けません。

「うん、あれ？ わたし……確か、あの子にやられて……そうだ！ ジュエルシードは!？」

「ごめん、なのは。今回ののはあの子達に渡しちゃったよ。なのは達にこれ以上、怪我をして欲しくなかったから」

手早く向こうの交渉は終わったのか、現れたユーノ君がそう告げる。フェイトちゃん達が後ろから付いて来てないようですし、帰ったようですね。

「終わったようですね、どうでした？」

「ジユエルシードを渡したら、何も言わずに帰っていききました。それと、ありがとうございます。どうやらなのは達の治療もしてくれたみたいで」

「お気になさらずに。私が好きでやっただけですのよ」

いやー今回は危なかった。やはり思ったよりもなのはちゃんの資質が原作以上になっっているようですね。私や悠次・亮夜の様なイレギュラーに因る多少のインフレの皺寄せ、世界の修正力でしょうかね。しかし相手側にも一人、ユーノ君が元に戻るのが確かクロノ君登場後だった筈、という事は現状の最高戦力が2対3ですか……不安ですね。

「えつと……誰？　ですか？」

困惑気味に聞いてくるなのはちゃん。何処が不審ですかね？　仮面ですか？　頭の上に猫乗せするところですか？　それとも全部ですか？　まあ全部ですよ。……よし悠次君の治療も一通り終わりましたし

「今はまだ、私は『ただの通りすがり』という事で一つ、おねがいします」

「え？ それってどういう意味でs」

「それではまたいずれ、機会があれば会えるでしょう」

ちよ、ちよっと待って！」

返事は聞きません、それではサラバデスヨー。

「……行っちゃった。ユーノ君、あの子と話してたけど、知ってる人？」

「いや、僕にもわからない。なのは達が争い始めてから急に現れたんだ。今回の原因のジユエルシードを持ってね」

「そっか……また、会えるかな？」

「わからないね、でも彼女も『機会があれば』って言っていたし会えるかもね」

「そうだよね、今度会えたらお話したいな」

OHANASHIフラグが建ってしまった事を、問答無用で立ち去った私が知るすべは無かった。



そんなOHANASHIフラグという意図しない関係性フラグを建築してしまった事を知らない愚か者この作品の主人公はという。そんな事が起こっているとも露知らず、リニスにこれからどうするのか問おうとしている。

「……どうしますか？ 今ならまだフェイトちゃんに追いつけますよ？」

私はリニスに問いかける。現在はフェイトちゃんに渡した方のジュエルシードに付けておいた魔力反応を投映させている。

「……行ってもいいのですか？ 貴女の事を私が話すかも知れないですよ？」

それは少し困る。けれども私の事が伝わるのはフェイトちゃん陣営に限っては伝わってもいいとさえ思っている。いや、亮夜君経由でバレるのはちよつと遅らせたいけれど。まあなのはちゃん達が彼に気が付いていなかったもので其処から伝わることは無いので平気でしょう。

「正直に言うとそのりは少し困りますね。でも、いいですよ。それが、リニスがフェイトちゃんの元に戻るための対価ののだしたら、私の情報を買ってでも手に入れるべきですよ。本来の家族の所に居るのに必要ならば安いんじゃないですかね」

それを行うと、本来の流れとは確実に乖離してしまう。それはわかっているのだが、

その分、仕方ないけれど頑張ればいい。それだけだ。それで原作ではまず救われていなかったリニスが救われる、それならいいじゃないかな。

「私は、まだ会っても何を話せばいいのかわかりませんし、今暫くは居させて貰ってもいいですか？」

決心とはそう簡単につくものではないですものね、此方としてもリニスが居ることは好都合。

「構いませんよ、その代り、動くときには動いてもらいますからね」

「それぐらいは当然ですよ」

とりあえずは現状維持でいこう、なのは・フェイト各陣営に1人居たという事は、アースラ——管理局側に居る可能性もありますけど、年齢で考えれば役職とかどのポジションにいますんでしょうねー、それを確認するためにも、その時に成つたらリニスに潜り込んでもらおう。

「まあフェイトちゃんの方は、渡したジュエルシードの反応で拠点も割り出せますしね」  
こつちから会おうとすればその反応を辿ればいいだけだ。まだフェイト陣営にはバテて居ない筈だからこつそり探ってきてもいいだろう。でも今回は比較的軽めに終わった。それでいい。

## # 0 8 違歴、別行

「未発動のジュエルシードを探そうと思うんですよ」

大きくなる猫の件から数日後のある日、私はそう話し始める。

というのもいくら原作に沿わそうとしても、被害が出るモノを野放しにしたまま回収されるまで見守るのはやはり気にならないわけがない。むしろそれがもはや今を生きる現実で起こっているのなら尚更である——と今更ながら思い至ったのだ。

『急にどうした？ 基本傍観決め込んで反れそうなただけ介入するんじゃないやなかったのか？ つかこの間“何も無い日さいこー”とか言つてなかったか？』

その疑問を持たれるのも最もだ、そして元が同じ思考であったのだから余計に疑問に思うのだろう、自分から介入していき流れを壊し始めるなど本末転倒で先の予測さえも困難にしてしまいかねない行動だからだ。

「まあそれはそうなんだけど、よくよく考えればある事の為に数が必要じゃないですか？ 予備含め最低3個、出来るなら6個はこちらで隠し持つておきたいですし」

『ああ、アレな。流石に1個じゃなんも出来ねえからな』

「本来であればこの前の猫のヤツもこっちで持って置きたかったですけど、あんな状況に成ってしまっていたら渡して帰ってもらった方がフェイトちゃんの陣営の位置も特定できるしと思つて渡しちゃいましたので数が足りないんです。かといつてクロノ君達管理局陣営が出てきたら探しにくい。つまり、動くには今なんですよ」

アルサナは『それもそうだが……』と考え込む。確かに、もうアースラ管理局陣営が来るまで既に半月も無い。アースラに探知の為の設備などが整っている以上、それを掻い潜るには更に労力が必要となってくるだろう。それを踏まえると、今のうちに多少動いておく方がある意味で安全なのだ。しかし都合のいい自己弁論を繰り広げるが、彼女が思う本当の所はというと

「正直、展開遅すぎるのでじつと構えているのに飽きました。前世で見てたらアニメなので何かあった日しか出てませんが、こう現実になると、結構間空いてるんですもん」  
もはや身も蓋もない言い分だった。

『だったらまた図書館行つて調べものとか、デバイス作成して戦力整えたりとかの方が良いだろ。なにも自分から遭遇のリスク増やしに行かなくても……』

「さつきも言いましたが、アレを行うにはジュエルシードが足りません。なので、後最低2つは何処かで拾う必要があるんですよ」

もちろん、選択肢としては“救わない”、流れのままにすると云うのもある。そちら



を選べばジュエルシードを集める必要など全くと云つていいほど存在しない。でもリニスをもう経緯はどうあれ”助けて”しまっているのだ、他の救われなかった人たちも救いたいと、救えるのではと思つてしまふ。

『……まつ、そうだな。表に出る気がねえ癖に救いたいとか考えるぐらい強欲な所は無いと其処に生きてるつて感じはしねえわな』

「在つて困るマジックアイテムでもないでしょう、魔力結晶とかは。某運命な物語では魔力をため込んだ宝石が心臓を再生させてるんですから」

やろうとしている事自体は”他の誰かが蘇生等の救いが出来なかつた時の保険を用意しておく”程度の気持ちでしかない。誰かが救えるのであれば、別に自分でなくてもいい。それがいつきの考え方だ。むしろ自分以外が積極的に頑張つてくれとさえ思つている、あくまで自分の役割は流れの補整なのだからと。

「あの二人は何考えてるんですかねえ……悠次君はともかく、亮夜君はわざわざフェイトちゃん陣営に組み入つてる以上は何かしら考えての事だと思ふんだけどなあ」

『期待するだけ無駄じゃねえか？ “ペルソナ”に“hack”どちらも戦闘系な上に片方は物語自体がゲームの中の話だ。それにどっちの作品にもエリクシルや賢者の石みたいな代表的な“超越した万能薬”がないからな』

便利アイテムを自分の手で作ればジュエルシードを集める必要も無くなる。いつ

きはそう考えていた。だが彼女達は考えもしないが、そもそも“要素”が存在しないとそれに準拠するようなモノも作れないという事情。以前使った【偽・顔のない王】<sup>ダミー・ノーフフェイス・メイキング</sup>、あれもなのは世界の技術だけで再現したのだが、再現“出来た時点でどこかにその要素がある、もしかしたら取り込ませた者が居るといふ事に他ならないのだが、その事をこの時点で彼女たちは気が付いていない。

『まあ現状発動しそうというか感じられるのが3つだな。まずは海の近く』

「それクロノ君が乱入して来る時の木の化け物のヤツですよ、それはその時に回収しますし、何より危険度低いので放置で」

『次が町中の何処かだな』

「デバイス同士がぶつかって干渉した結果、小規模次元震が出来るヤツですよ、それ起きないとアースラ来ないので危険度は高いですが、流れ上消すわけにはいきません、よつてそれも仕方なく放置です」

『最後に山の中だ』

「温泉の話のヤツですか……」お名前教えて“イベントは無くなりますが、さして影響はないでしょう。なのはちゃんにはゆつくり休んでもらいますか。でもあれが無ければアルフと出会うイベントもへし折る気もしますが」

『いずれ会うし構わんだろうぜ』

「そう……ですかね？ まあ、なるようにしかありませんし案外それが無くても会うかも知れませんか。じゃあ行きますか」

この時、いつきはまだ気が付いていなかった、前の時から数日経過し、まとまって動ける“連休”であるという事はすなわち温泉で主要人物達が集結しているという事を。もう既に事前に動き回収するなど出来ない日に成っていた事、盛大に自分から巻き込まれていつているという事も。

「そうだ、ついでの温泉入って行こう。リニス！ 温泉行くよ、温泉！」

「え？ なんでするか急に、ちよ、まつ、説明をー！」

□~~~~~□

半ば拉致する形でリニスも引き連れてやってきた温泉地、宿泊の為一室を借りさせて温泉にでも浸かってから動こうかと考え、そこで待ち受けていたのは、楽にジュエルシードを回収出来る場では当然無く

「人物集合してるじゃないですかーやだー」

やるせなく脱力させて「巻き込まれ」は主人公属性持ちの特許でしょーなんで私に

あるんですかー」と項垂うなだれたいつきと

『なんつーか……もう諦めようぜ、そこらへん。転生者イレギュラーの宿命なんだろうぜ』

よもやあの自称神が特典外で余計なモノ付与してくれたんじゃないかなろうかと考える二人（一人と一機）。そのものその通りとしか考えようがないのだが、あくまでその可能性は最後まで否定したいと思っっているので思考は堂々巡りだ。そこに声を挿したのが

「ところでココどこですか？　なんで私まで連れてこられたんですか」

人型を取って連れ立っている被害者リニスであった。一応表向き言の理由訳も用意してある。

「ここは温泉旅館です。連れてきた理由は、泊まるための保護者やk……じゃなくて、近くでジュエルシードの反応があるので、回収の手伝いをして貰おうかと」

本音と建前がごっちゃである。回収とは別の目的もあるのは本当なのであるが。

「口を滑らせていなければ信じていました」

「いや、まあ、ここまで来たならついだと思っただの否認めんですが、リニス、まだ悩んでるでしょう？　少しでも気にしない様に気が休めればと思っただけですけど」

あれから日が経つがリニスは未だに悩んでいた。いつきからしてみれば居てくれた方が動きやすいけれど元々居ない人物ではあったのだから、一人でもこなせるそれなりの方は考えてはいたのでフェイトの元に戻りたければ何時でも戻ってもいいとは

言っている。のだが元々が教育者として居た為か、いつきをどうしても子供と見てしま  
い放っておけないと考えているのだろう。

「私は……」

「まあ、急いても考えは纏まらないでしょうし、とりあえず温泉行きましょう、温泉」

「……そうですね」

そんな他愛もない会話のやりとりをしつつ、浴場に向かっていると、話し声が聞こえ  
てきた。

「アツハハハハ、ごめんね、人違いだったみたいだよ」

豪快に笑うお姉さんと狼狽うろたえている少女三人十一匹。いつきの考えや事前行動など  
間に合う筈もなく、絶賛イベント進行中であった。

「あれってアルフですよねえ。つてことはどこかの木の上でフェイトちゃんは待機  
中つてところですかね」

『（ここまで進んでたら、そうなんだろうな。しかもコレが起きたって事はもう今夜には  
イベント発生だぞ、どうすんだよ）』

「（イベント前までには回収すればいいんじゃないかな？）」

調整しようにも原作通り事が巡り、先に行動しようにも後手後手に回ってきた今となつては、何か既に若干以上、面倒臭くなつてしまつていつきである。

「ところでリニス、あの人から何か感じませんか？」

立ち止まつて居ては不自然なので歩きながらそう言つていつきは一応の確認の為、リニスに確かめる。

「そうですね、フェイトの魔力を少し感じます」

「……だとすると、あの人は使い魔か何かでしょうね、会つて話でもしてみます？」

「今は辞めておきますよ」

その言葉に対して少し考えたが否定したりニス、それに対し「冗談ですよ、貴女にもいろいろあるでしょうしねー」といつきが笑いながら返す。両親がそばに居ない為か話し相手が欲しい為か、自由奔放な性格になつているのだと勝手に勘違いするリニスであつた。

なんやかんや時間が経つて  
閑話休題

温泉が気持ちよ過ぎてリニスが猫に戻りそうになつたり、アルフに見つかりそうになつたりと色々あつた気がするが時刻は既に夜。イベント発生のお時間付近だ。

「なんか色々とすつ飛ばして、事態は既に発生間近なんですけど」

『運命だな、アハハハハ』

「笑うなあ!!」

コントのような応対を繰り返り広げるいつきとアルサナ、もはやどつちが主なのかわからない。そしてリニスはというとフェイトの魔力を探ろうとしているのか、一言も介さない。

「リニス？ リニース、ちょっと無視しないで下さいよ」

「……え、あ、なんです？ イツキ」

ようやく我に返ったリニス、そんなには頑張らなくても会えるのに、とは思っていても口にはしない。

「何に集中してたのかわかりませんが、探すならジュエルシードの反応探した方が良かったですよ」

そう一言告げ森に向かって歩き始める。彼女達は浴衣姿で散歩しに来た客然としながら探している。もつとも、既にアルサナが昼間の内から場所は特定しており、後は事が起こるだけなのだが、起こる前に回収をと、この期に及んで運命イベントフラグにちよつと対応できるか試そうとしているのである。

「そろそろですかねえ……アルサナ、池？まであとどれくらいですか？」

『もうちよいで着くぞ。つと見えてきたなあそこだ』

目の間に広がるの割と大きめの池、そして架かっている広めの橋。まだ周りには誰の気配もない。

「ではさつさと釣り上げますか。アルサナ、拳袋<sup>グ</sup>形態セットアップ。周りにまだ誰も居なくて魔力探知もし易く、またそれらを展開しても大丈夫だとは思いますが、何となく怖いので釣り上げは任せます」

『え!? いや、意味わかんねえよ。自分で修練も兼ねてだ n』

「まかせませぬね?」

『……アイマム』

楽しようと足掻く私を笑った罰です、きりきり働きなさい。

「このあと問題なければ直ぐにでもフェイトちゃんがここに来ると思えますけど、リニスどうしたいか考えが纏まりました?」

「なのでその事がわかるんですか……?」って聞いてもどうせまだ教えてくれないんですね。そうですね……少し、話をしてみたいと決めました」

「え? 昼間は」まだその時ではない……」みたいな事言つてませんでした?」

「私はそんな言い方してないですよ。少し、自分からも行動しようと思つたまでです」

リニスなりに何か思うところがあるのだろう。まあタイミングで言えば今回か次回



ぐらしいしかないのだから、話はさせようとは思っていたが。

「そう……わかりました。ではジュエルシードが釣れ次第、私は隠れますので後よろしくお願いしますね。あつそうそう、昼間の使い魔さんと白い子とフェレットも多分来ますので、いなしてください」

「え、フェイトと二人きりとかじゃないんですか!？」

「そこまでお膳立て出来るほど私は万能ではないのですよ『フィーツシユ!』つとどうやら釣れたので、セイー!」

魔力を込めて少し発動状態にさせて反応を飛ばす。これでフェイト／アルフ・なのは／ユーノがそれぞれセットで来てくれるはずだ。そう考えてから即座にアルサナが緑茶マント（フエイスメイキング）を出現させ、それを羽織つて消えていくいつき。

「ではあとよろしく……」

笑顔で手を振り、消えていくいつき。手に持ったジュエルシードの反応も完璧に消え去った。するとそこに暫くしてから先ず現れたのがフェイトだ。

「確かこの辺りで反応が有ったんだけど……あれ? もう誰かいる?」

現れたフェイトは、ジュエルシードの反応を感じしてから直ぐ来たのに既に人が影がある事に少し不思議に思ったが、その人物が話しかけて来て疑問は無くなった。

「久しぶり……に成るんでしょうか。私が変わりますか、フェイト」

「え？ その声、まさかりニス!! どうしてココに、それに理由が在って居なくなつたつて！」

「……その理由は誰から聞いたのですか？ まさかプレシアが？」

「うん、母さんから教えて貰つたんだ『リニスは、貴女に教えられる事を教え、与えるモノを与えたから、私の頼み事であるものを探しに行つたわ』って」

「そう……なのですか。そう聞いたのですね（私が居なくなつたのは、契約が“フェイトを鍛える”という契約で成されソレが完遂されたとみなされたのと、プレシアではもう私を維持できなくなったからの筈なのに、どうして？）」

リニスは不思議に思う。まだ自分が居た頃の彼女は“あの子の蘇生の為になら何だつてする”という執念に囚われていた筈だった。それは何度説得しようとしても、治りはしなかつたのに。そんな彼女が“本當の事を暈<sup>ぼか</sup>して”まるで悲しまない様に伝えたりなどするものだろうか、目的以外はいつでもいいという様な狂気に近い執心をしていた彼女を知るリニスにはそうは思えない。

「それで、その、リニスの探し物は見つかつたの？」

少し不安げに、久しぶりに会えた家族だった人と話し方がわからないかのようにリニスに話しかけてたフェイト。

「え？ いえ、残念なのですがまだ見つかつてません。ここに居たのもある意味偶然で

すよ。そういうフェイトはなぜここに？」

「えつと……その、リニスだから話すけど、私も母さんに頼まれてここに居るんだ。なんでもこの地球っていう星のこの辺りに”ジュエルシード”っていう魔力結晶のロストロギアがバラ撒かれたらしいから余り動けない私の代わりに探してきて欲しいって。”アリシア姉さんが目を覚ますためにも”必要なんだって”」

——フェイトは今、なんと言った？ “アリシア”の為？ 何故フェイトがアリシアの事を知っているのか。私もその事を知ったのは彼女達の元を去る時だったのに。

「フェイト……貴女はアリシアの事まで聞いているのですか？」

「うん、聞いたよ。その……私の事も、色々」と

彼女は——ソレを受け入れたとでも言うのだろうか。あんな事実を、生まれた理由を。

「それで……大丈夫、なの、ですか？」

「……最初聞いたときは、確かに傷ついたよ。それでもその後母さんが『生まれは正しくなかったかもしれない、でもフェイトは——フェイトもちゃんとした私の娘でアリシアの妹なんだ』ってそう言ってくれたんだ」

フェイトはソレがとて嬉しかったのだと、生まれなどがどうで在ってもプレシアの娘である事には変わりないのだと言われて自分も娘としてちゃんと在ろうと思ったと

笑顔を浮かべて語った。リニスは自分が居なくなつてから彼女は変わったのだと、ならば次は

「私も、そろそろ考えを決めるべき……ですかね」

プレシアに何があつたのかは、居なくなつていた自分ではわからない。ソレを知ることが出来れば、私も少しは変わるだろうか。

「フェイト、一度、私もプレシアの元に戻ろうと思うのですが、連れて行つてもらつてもいいですか？」

「え？ いいけど、リニスも知つて……そういえば前の所じやなくて今は別の所に居るから、母さんの魔力反応も次元が違うから感じられるわけないし座標もわからないよね。うん、わかつた。あつ、それと紹介しておくね、アルフ、アルフ」

そうフェイトが呼ぶと、近くの草むらから一人の女性が出てくる。

「なんだいフェイト、見つかつたのかい？……つてそつちの人は、どつかで見たことあるね、フェイトの知つてる人かい？」

「母さんの使い魔のリニスだよ。数年前まで一緒に居たんだけど、母さんからの頼まれ事で探し物があつたとかで出てたんだつて。それでリニス、私の使い魔のアルフ、リニスが居なくなつてから私が契約したんだ」

そんな紹介を交わして挨拶する三人。リニスは一旦フェイトに連れられてプレシア

の元に行く事をいつきに連絡しようと思話を飛ばした

く所変わって少しだけ時間が戻って草葉の陰主人公視点く

……なんですかあの微妙な雰囲気。シリアスはごめんですよー。あつ会話は聞いてないですよ、流石にそこまで無神経じゃないので。

「久しぶりに会ったからって、あんなに連続で驚くモノですかね？ なにか自分の知らなかった事でも言われてるんですかねえ」

『そう……だな、そうなんだろうな（一体どういうことだ、原作とまるで違う？ いや、概ねは原作通りだろう、少なくとも）リニスが去るまでは」そのままだったんだろう、だとすると、何時だ、何時からズレている』

いつきは彼女達の事情をわざわざ知る必要はない全てを知るのには相手にも悪いと、今を“現実”として生きる以上の最低限の礼儀と考えフェイト達の会話を知らうとはしなかった。だがそれでも懸念事項はあるだろうと”既にズレが多少以上にある”ので全てを自分ぐらいは把握しておこうとするアルサナは別であった。事実、その考えは正しかった”何かがおかしい”のだが、まだ何かがおかしいのか特定できる材料が足りなさ

過ぎる。転生者と思われるものは自分達含めて3人、全て主人公なのはと同年代ではあるが、まだ3人。しか対象が居ないのだ判断するには少なすぎる事例数なのだ。

「つとと言うか、なのはちゃんとユーノ君、遅くないですか？　もしかして、あの程度の発動じゃ気がつかなかった？」

『……ん？　ああ、なのはやユーノだったら、アツチ見てみ？　橋の右側の入り口の奥の方、其処にいるぞ』

アルサナにそう言われて見てみると、確かに白い服が見える。あの雰囲気には入り辛いですよね。

そう考えていたらリニスから念話が届く

『——ツキ、イツキ、聞こえますか？』

『んう？　なんですか？　リニス。話終わってたんですか？』

『え？　聞いてたんじゃないんですか？』

『なんで私が久しぶりに再会した家族の会話を盗み聞かなきゃいけないんですか、そんな趣味はないですよ！』

『ええ!?!』

『……今度話し合いましたよか、リニス。まあ今はいいです、それで？』

『ああ、ハイ。一度、フェイトに連れられて一緒に行くことに成りましたので』

簡潔にそう告げてくるリニス。ふむ、＼どこに＼とか＼だれに会いに＼は言わないみたいですね、なら私も察してあげるのが優しさ！

『わかりました。いつてらっしやい。供給量自体は強めにしてあげますので＼＼＼＼＼＼離れても＼大丈夫ですし、その辺の説明とかをフェイトちゃんにしまくてもいいですよ』

『ホントに聞いてなかったんですか？』

なんて疑り深いのだ。確かに思い当たる節が無い事も無いのが痛い所ではあるのだが決して聞いてないぞ。

『聞いてないですって。それよりも一つだけ、ちよつとこつち来て貰ってもいいですか？』

『え？ わかりました』

そう言つて念話が途切れる。そしてこちらの方に現れるリニス。

『なんですか？』

『こいつ持つてって』

私はアルサナを差し出す。一応の護衛の為だ。プレシアさんの気性が原作のままだったらリニスがどうなるかわからないから。

『……ハア!? ちよつと待てよ、なんで俺が』

「護衛と供給ラインの繋ぎとして一緒に行ってきて」

それが表の理由。そして本当の理由は

『(なんとかしてプレシアさんを説得出来そうな材料を集めてきて、リニス達の会話から。あと出来ればいいから病状や進行度の確認も)』

『(……まあ、ソレは……確かに必要だな。しゃあねえな)』

リニスという本来は無かった要素から何とかする為の、今からでも改心させられるような材料を得られないかと画策しての考えだ。それで何とかなるほど簡単では無いのはわかっている。でも、少しでも足掛かりがあればフェイトちゃんは原作以上に救ってあげられるはずだ。

「つと言わいで、ハイ。持ってって」

「わ、わかりました」

ふう、コレで自由だ。別にソレが本当の目的だったとかじゃないですよ、ホントですよ。自分をからかってくる存在がアレとか思っていないですよ。あつ、そうだ、最後に「別にソレを返しに来ようとか考えなくて良いですから、フェイトちゃんの所に居たかったらそのままでも大丈夫ですのぞ」

「え、え？ い、いいんですか？」

リニスの不安は“両親から貰った大切なデバイスをそんな扱いでいいのか”という



のもあるのだが

「いいんですよ。アルサナには何処にあっても”私の元に”勝手に自分で転送してくる機能が付いてるので、アルサナが大丈夫だと判断した段階でコッチに戻ってきますから」

何故か何処に置き忘れても勝手に腕にハマってる。なんのために在るのかまったくわからない機能が搭載されていたりする。

「ほら、さつさと戻らないと、フェイトちゃん心配しますよ。私の事は……まあ心配しなくて良いって言っても聞かないでしょうし”これ以上発動したジュエルシードには”多分関わらないから大丈夫ですよ」

「わかりましたよ、ホントに危険な事だけはダメですからね」

最後にそう言い、リニスはフェイトの元へ戻っていった。

まあ発動前には関わるしホントに危なければその限りでは無いけどね。それにしてもこの間もなのはちゃん、動かなかったけど……まあ大丈夫だよ、起こらなかつたという事は”お名前教えて”イベントは世界的にも重要じゃ無かつたという事だよ。

世界的には今は大丈夫かもしれないけれど、今後に影響する？とか若干自問自答して、その後にはちゃんと起こった原作よりもかなり平和な”お名前教えて”イベントを観測し逃した。

## #09 表側、其々

「所変わっていつきが自問自答トリップ中になった時のフェイト達」

「戻りました、フェイト。さあ行きましょうか」

「えっと、もういいの?」

「ええ、こちらに居る間に少し一緒にいた人に挨拶をしに行っただけです」

そう言ったリニスの腕には受け取ったアルサナが嵌め<sup>は</sup>られている。フェイトが「それは?」と聞くとリニスは「餞別として頂いたものです」と答える。まあ嘘ではない。

いざその場から去ろうとすると橋の入り口の茂みから人影が出てくる。

「あ、あの、待つて! この辺りで、ジュエルシードが発動したと思うんだけど……その、貴女達が回収したんですか!」

出てきたのはなのはとユーノ。

彼女達もジュエルシードの反応を捉えていたが、いざその場に行ってみるとなんとも出て行きづらい雰囲気の間になっていたりニス達が居たので様子を伺って出て

行くタイミングを失い、そうこうしている内に用事は済んだとばかりにフェイト達が立ち去ろうとしたため、ジュエルシードは彼女達が回収したのかと確認する為に飛び出てきたのだ。

「?、私じゃないよ。私が来た時には既に反応は無くなっていた。貴女達でもないとするなら……そうだ、リニスは何かわからないかな? 私より先にここに居たんだし」

「ああ、それですか、それならイツク……」

首をかしげて「自分ではない」というフェイトと、話し始めて言葉を詰まらせるリニス。彼女の事は伝えるべきではない——もし言ってしまった所を助けてもらった恩義は感じていなくてもいい。それを反故にするつもりはない。とりあえず預かった彼女の相棒に話を打ちかける。

『(どうすればいいですかね?)』

『(あ? ああ「口元隠れてない変な仮面付けた奴が持ってた」とでも言っておけばいいだろ)』

『(それは言っても大丈夫なんですか? あの子は余り目立ちたくない)』

『(構わねえよ、駄目だったとしても)俺がそう言えと言った"って言やあ納得する)』

ぶつきらばうに言い放つアルサナ。数年共に過ごしたが、未だにこのデバイスと彼女

の関係性がわからない。ただのインテリジェントデバイスとその使い手マスターという枠では取まらない何かがあるように感じる。

「リニス？ どうしたの？」

「え？ ええと、どう言えば良いものかと考えてまして」

“ どういう奴をみたか ” という事ではなく “ どういう事にするか ” の言い回しを考えていただけなのだ ——

「その話、詳しく教えてほしいの！」

橋の入口付近に居た筈のなのが肩に乗ったユーノを飛ばさんとばかりの勢いで間近まで近づいてくる。もしかしたらこの間の人の手掛かりになるかもという考えでも在るのだろう。まあそのものズバリその人であるし、今話してる相手はその時居た猫なのだけだ。

『(リニス。俺達と彼女は “ 初対面 ” だ)』

この展開なら “ 流れ ” だけでも原作通りに持つて行けると考えたアルサナが念話でそう告げる。それに対し 「 わかりました 」 と返しされる。

「 えつと…… どなたですか？ フェイトの知り合いですか？ 」

そう問うと 「 少し前にジュエルードが発動した時にその場に居ただけ 」 と言って知り合いではないと返される。もっともその事自体は、リニスは知っているし彼女が危険

で無い事もハッキリとわかって居るのだが。

「この際、敵対者かどうかは置いておきまして此方も名乗りますので名乗っていただいても? 私はリニスといます」

「あつ、私、高町なのはつていいいます、こつちがユーノ君」

「では、なのはにユーノ。何故私の見た者の話を聞きたいのですか?」

「私達、訳あつてジュエルシードを集めているんだけど、それはとつても危険なモノなの。えと、そつちの子も、この前はお話出来なかつたけど、集めている理由が話すことが出来るなら話してほしいし、もしかしたら私達と協力できるかもしれないから」

そう訴えかけるなのは。フェイトはやや困惑気味だ。前の時ならいざしらず、今はリニスが居るといふのも大きい様だ。自分を理解していて過去には教えを説いてくれていた存在だ。多少なりとも依存してしまうのだろう。

「リニス、どうしよう……?」

「私は、彼女になら話しても大丈夫だと思えますよ。彼女は本当にお話したいだけの様ですし、ですが決めるのはフェイト、貴女です。とりあえず、名前だけでも名乗つてあげてはどうですか」

おそらくは自分たちが呼び合つてるのでわかつては居るのだろうが、こういうのは名乗るといふ形が大事なのだという。

「うん、わかった。私はフェイト、フェイト・テストロッサ。貴女がナノハでそつちがユーノだよね」

「うん！ それで、なんだけど、理由、教えてくれないかな？」

フェイトが行動していた理由はプレシアに頼まれたという事だけ。話せる事も姉であるアリシアとプレシア自身をなんとかする為に必要であるというぐらいだ。だがここで其処まで伝えて大丈夫なのかはまだフェイトの中で判断を付けかねるのだろう。フェイト自身に決めさせるつもりでいたリニスだが、このままでは進展が無さそうとアルサナがリニスに口を挟むように助け船を出す。

『(リニス、フェイトはまだ子供だろ、ウチのアレとは違うんだ、まだそこまで考えられるほど出来ちゃいねえ筈だ。お前が助けてやれ)』

『(え？ いや、しかしですね)』

『(だからな) フェイトはまだ子供) なんだよ。アレ程自分で考える力を持つてるわけじゃねえんだ、いくらしつかりした子でもな)』

確かにアルサナの言うとおりだと改めて考え直す。暫く一緒にいたアレ呼ばわりされていくつかが“出来過ぎて”いた為忘れそうになっていた。それにフェイトは生まれが生まれだ。実際の経験年齢は見た目の年齢より更に低い。

「(仕方ないですか……) フェイト、纏まらないようでしたら一度相談して決めましょう

か」

「え、う、うん。……ゴメン、ちょっと考えさせてほしい」

「そういうわけです。なのは、ユーノ。申し訳ありませんが今は時間を下さい、コチラで決まりましたら知らせますので、よろしければそちらのデバイスの通信コードを教えてくださいませんか？ もしくはどちらかの魔力反応を記録させて頂ければ」

アルサナの記録にはもちろん全員分の魔力反応のパターンが登録済みなので、その気に成れば現状ではまだ会っていないアースラ組やプレシア以外との連絡や探知は容易なのだが、リニスはそれを知らないし、アルサナもそれで便利アイテム扱いされるのも癪なので教えるつもりはない。

「わかりました。ですが、魔力反応を記録となるとコチラの位置が常に把握される結果に成ってしまいますので、それはまだお互いに関係性を築けていない以上……レイジングハートの通信コードをお教えします」

そう答えるユーノに、確かなのはと同年代だったはずなのにしっかりとっかかり過ぎてんなあつとアルサナは思う。リニスに悪気は無いだろうが、魔力反応を押さえられたら特殊な機器を使ったりして隠蔽しない限り自分がどこにいるかなど丸分かりになってしまう。自分から好き好んで探知され易くするなど在るわけがない。

そうこうしているうちにレイジンググハートの通信コードの教えも終わり最初の話題

に戻る。

「貴方達がコチラに危害を加える意思がない事はわかりましたので、まああの者に危険は無いと思いますが伝えておきますね」

勿論、今回ジュエルシードを回収した者の話題ではあるがそれはいつきであり、危険など皆無過ぎるが得体の知れない人物がいる危機感というのは持っていることで、多少なりとも不測の事態への対応力が上がるから。つとアルサナに告げ口された為である。

「フェイトやなのは達が感じたというジュエルシードの反応、実は私も偶々この近くに居たのでその反応を捉え向かったのですが、既にそこには妙な仮面をつけた人が居て、それらしいモノを手に持ち立ち去る所でした。恐らくはその人が回収していったのでしょうか」

「仮面……あの、背丈とか髪型とかってわかりましたか？」

質問するのはなのはだ。どうやら“以前助けてくれた人と同じ人かも？”と勘繰ったのだろう。そのものズバリなので主人公補正による勘というのは素晴らしい。尤も、前回出ていくときに仮面付けただけで髪型そのまま髪色そのまままで出ていったいつきもいつきではあるのだが。

「髪型ですか……そうですね、フード付のコートで全身を覆っていたので判りませんでしたね。私に気が付いたのかこちらを振り返った時に丁度月明かりで仮面をつけて居



たのが確認できただけで、直ぐに何処かに行つてしまいました。そのすぐ後にフェイトが来たので追えず仕舞いでしたけど」

打ち合わせもしていないのにスラスラとでつち上げの状況説明が出てきたので「役者だな、リニス」つと感心するアルサナ。

それに対するなのはの反応はと言えは

「そう……ですか、情報ありがとうございます」

少し落胆気味である。思った情報が得られなくてガツカリしている様子だ。

「ではそろそろ、私たちは行きますね。こちらの理由を話すにせよ、話さないにせよ。必ず連絡は致しますので。それでは」

最後にそう言つてリニス・フェイト・アルフは森の中へと去つて行つた。その場に残つたのはなのは・ユーノである。

「行つちやつた……結局、理由は教えて貰えなかつたけど、名前は教えて貰つたし、それにこの前と雰囲気違ったね」

「そうだね、多分あのリニスつて人が居た事が影響しているんだと思うよ。フェイトつて子はその人に頼っているような雰囲気があつたからね」

なのはが本当に知りたい事はまだ教えてもらわなかつたけれど、名前を教えあつたから一歩前進して、以前の時の話し合う余地も無いような雰囲気から幾分か和らいでいる

感じがしてなのはとユーノはコレならば話し合える、つと思つた。

「それにしてもユーノ君、私あの人にどこかで会つた気がするんだけど気のせいかな？」  
「なのはもそう思つたの？　僕も最近会つた様な気がしたんだ。でも会つた事が無いはずなんだよね」

何故かはわかつてはいないが、なのはは何処かで会つた様な既視感を感じていた。まあ、その既視感というの特別なものではなく、

「あつ、そうだ！　雰囲気もそうだったけど、あの人、リニスつて人が腕に付けてたデバイス？　なのはわかからないけど、あの不思議に捻じ曲がついていた腕輪、アレつてこの間子猫が大つきくなつちやつた時に来た、不思議な仮面を被つた子が付けてた奴と一緒だったよね」

「……確かに、あの子はアレに似たモノを付けていた気がするけど、関係あるのかな？」  
「わからない、けど手掛かりが何も無いよりはいいと思うの！」

人の雰囲気から察する辺り、感覚の鋭さは才能などという域をもう超えているかもしれない。この世界の主人公の一人の彼女は、身に着けた小物から人物を探そうと決める。

余談ではあるがアルサナを常に身に着けているいつき、当然“学校にも”そのまま腕に付けて行つてるのでバレる可能性が出て来てしまつているのだが、なのははまだ“魔法関係の人”にのみ意識が行つているので、自分がそうであるにも関わらず、それを隠

し一般人として行動している人が居るといふ考えに至っていないのが不幸中の幸いであった。

□~~~~~□

一方トリップから我に返り、旅館で一人のんびりしてたいつき。

「……そういえば亮夜君つてもしあのゲームの主人公のままなら双剣／大剣／鎌つて普通にフェイトちゃんと丸被りの武器構成ですねー、取得順序は真逆だけど。……A<sup>V</sup>、S<sup>O</sup>、S<sup>I</sup>、S<sup>2</sup>で既に彼をXthフォームまで上げられないかなあ、もしくは終わつた後にでも。彼に双銃短双剣の使い方マスターさせれば、どうせ主人公組に絡むだろうしという事で、オレンジの娘のいい師匠になると思うんだけどなあ。ああ、でも体が出来上がってないとトリガーまで指が届かないし速<sup>クイックドロウ</sup>射も出来ないですよ。他の武器適性とか貰つてくれたら嬉しいなあ」

自分が如何に楽をするかの“他の人の強化プラン”を考えていたりした。勿論ソレは一人だけでなく

「ていうか悠次君の方はなんでペルソナそのものじゃなくて技だけなの？ その所為で“ペルソナの種類から今使える技を見極める”つて出来ないから行動予測が付かない

んですけど。A，sに入るまでは其処まで危ない事件や出来事は無いとは言え後手に回らざるを得ないのは怖いんですけどよねえ。使ってる剣術？も流派とか無さそうで只我武者羅に振ってるだけの様にも見えまししたし」

ペルソナ自体を貰わないなら別作品要素入れちゃっても良いからなんで剣術才能を貰わなかったのか！　と言えらなら叱咤したい、表に出る気が無いからそんな真似出来ないけど。そして本来の主人公の事も

「なのはちゃんなんか原作より才能溢れてましたねえ、やっぱり主人公足る者、周りの影響に及ぼされて尚世界の補正も受けるんですけどねえ。その点で考えればフェイトちゃんも同じように強くなってるって事ですょね。A，s編でヴォルケンズが負けるみたいなIF過ぎるルートに入らないように注意しないとイケないとかちよつと私には荷が重いですけど」

なにが悲しくて本編で強キャラ陣営だったほうに注意して力を貸さねば成らないのだ。私は弱キャラの方が好きなのだ。愛を持って使い続けて強くなればいいのだ。などと関係ないことも考えつつ

「まあ無印・A，s共に犠牲者らしい犠牲者は特に居ませんし……いや、リンカーコア蒐集された局員とか……は別次元世界だと助けられないじゃないですか、そっちは良いかなあ。それよりも後の六課陣の人たちを如何に強化してゆりかごの起動自体を無かつ

た事にできるかが問題ですかね、でもそうしちゃうと Vivid に影響してくるんですよねえ」

今のストーリー所か、次のストーリーよりも更に先を無駄に考えていた。

「ああ……メンドクサイ。他の皆が頑張ってくれればいいのに……」

□~~~~~□

更に、終つひぞその場に現れなかつた二名はといえば……

く 番神悠次の場合く

「何故初期技以外の上位技や範囲技が使えないんだ……魔力量は問題ないはずなんだ……まさか、元となった作品同様にコミュを行わないといけないのか!？」

などと考えたりしていた、結論から言えばソレが正解なのだが、所謂無印の物語の間は其処まで長くは無い。故に別作品の能力で無双しようにも出来ない状況ではあるし、彼が今行うべきは「近接戦闘」をどうするかなのだが、其処まで頭は回らなかつた。そしてそんな余計な事をずつと考えていた為「連休での温泉」という事もすっかり忘れ、イベントをスルーしていた。

く 崎神亮夜の場合く

「奴が使っていた剣術は漫画とかにあつたそれっぽいのじゃなくてわからなかつたが、技はペルソナに出てきたモノだつた。つてこたあアイツは俺と同じ転生者かそれに近い者だろうな。だがまだ近接戦闘なら俺の方が圧倒的に優位だ。技を使わせなきや十分だが……なぜか双剣以外出せねえんだよなあ……」

などと、もう一人よりは現状を考えていた。あえて、なのは陣営ではなくフェイト陣営に居るのも“一応”考えがあつたのかもしれない。彼が双剣しか出せないのは、ある意味原作どおりではあるのだ。あの作品は“三部作”であつた。彼の要望では“全種類”は使えるのだが、彼の実力がソレに沿わないので、まだ出せないだけである。因みに彼が温泉地に居なかつたのは“少し一人で修行する”というフェイトとは別行動を取っていたからである。彼にとつては“物語は物語で何もしなくてもそのとおりになる”と思つている節があるのだった。

両者共に別ごとでイベントを忘れて居たり、行かなかつたりしているだけだつた、因みに彼等が自身の能力についてなどを知る術はない。おそらく、このままでは知る機会もない。それを彼らはまだ危惧していない。

## #10 idle talk:04

case:05 「フラグは建てたまま放置したい—2 『はやてコミュ』」

温泉イベントでリニスがフェイトちゃんの元に行き、ついでにアルサナに向こう陣営の状況偵察をお願いして、A'sに備えての対人技能の練習相手も居なくなつたいき。その結果としてする事が便利特化デバイスアイテム作成しか無くなつてしまつている。後々の事を考えると主人公、sの周りにはデバイス特化が少ないうえに、居たとしてもA's中盤からStSにかけてだ、いつき自身が表に出なくともその役割を担う為に技術を高めるに越した事ではないのだが、彼女がとつたのは——

「そうだ、はやてちゃんに会いに行つて、“一般人のいつき”という私をインプリンティング刷り込みしてこよう」

自ら身バレフラグを建設しそんな行動に移るのであった。

お昼過ぎ

ピンポン……と呼び鈴が鳴る。

「はいはい」

来客に応じる為に玄関まで車椅子で移動する少女。玄関扉を開けた先に居たのは、その少女よりも更に小柄な少女。

「いらつしやい、いつきちゃん」

「こんにちは、はやてちゃん。急な連絡でしたけど、迷惑じゃ無かったですか?」

「そんなことあらへんよ、わたしも丁度なんの用事もなかったし」

そう言つて快く出迎えてくれた少女はやて。無印編では出番はないがA、s編の影の主役、StS編でのみんなの上司さん、私は管理局に行く気は無いけど。

「とりあえずお邪魔しますね」

はやてちゃん会いに来たのは刷り込みをしたいというのは確かに在るが、早期に関わりを持った以上やる事は一つ“夜天の書(闇の書)”に触っておきたかったからだ。

既に何回かは家に訪問したりまではいかずとも図書館で出会つたりなどで交流を深めて行つてるのだが、御宅訪問からのいきなり「古い本あったら見せて!」つと言うわけにもいかず(あくまで一般人という印象を付ける為にも)とりあえずはリビングで談笑交流をしていた。

「話には聞いてましたけど、結構広いおうちなのにホントにははやてちゃん一人暮らしな



「んですか？」

「そうなんよ、お父さんもお母さんもわたしが小さい頃に亡くなってしもてな……」

「あ……その、ごめんなさい」

「ええんよ、気にせんでも。それに面倒見てくれてる人は居てるしな」

グレアムさんの事ですかね？ もしそうならA'sからいきなり銀幕時空に突入とかは無さそうですね。まあ最近思い出したのですが銀幕版の設定はI F時空か劇中劇だった筈ですし無いですね……いや、在る意味ここもI F時空か。

「まあ面倒見てくれてるって言っても、最初は手紙のやり取りだけやったんやけどな。どっちのかは聞いてへんのやけど両親の親戚らしくて生活してける分の支援を出してくれてる親切な人なんよ。直接会ったことも何回かあるんやけどその度にわたしの事に掛けてくれてる優しい人や」

……その裏の事情を知っていると、ちよつとやるせないですね。……ん、え？ “直接会った”って言いましたか？ そんな事は物語に無かった筈ですが、もしかしてグレアムさんとは別人？ もしくは彼に影響を与えるために別年代に転生した転生者イレギュラーでも居たりしてしまうのだろうか。少し探りを入れてみようかな。

「へえー、そんな親切な人が居るのに、一緒には暮らしていないんですか？」

「うん、この足やし、わたしもそうしてくれただ方がうれしいって言ったんやけどな、どう

も忙しい人らしくてコツチに留まることが出来ひんらしいんよ」

「日本の人ではないという事ですか？」

「そうみたいやよ……ちよつとまつてな」

そういうとはやては柵の方に行き何かを取ってきて私に見せてくれた。写真だ、今よりも更に幼いはやてを抱きかかえた人の好きそうな髭を蓄えたおじさんがこのはやての家を背にして写つていた。

「これ見てな、それでこの人。グレアムさん、見た目も日本人と違うやろ？」

(記憶通りのギル・グレアムその人だ。でもだとしたらこのズレは一体？)

本来の歴史通りであるならば、彼は手紙のやり取りだけで姿を見せなかつたはずだ。なのに、なぜ？もしかしたらと考える。

クライドさんの事は起こらなかつた。

——ならば闇の書は転移せず、グレアムさんとはやてちゃんが接触すること自体が起きない、この可能性は無い。

闇の書がすでにここに無いのではないか、もしくは既に対処済みであるか。

——それもないだろう、現にはやてちゃんの足は現在進行形で不自由になっていつているらしい、侵食が進んでいるという証拠。

ならばグレアムさんから、はやては全て聞いていて実はもう魔法に関わっている？

——更に無い可能性だ。この家から“魔力使用の残滓”などは感じられない。

この世界では可能性が多すぎる、そして現状では情報が少なすぎる。どうしようもな  
いかなコレは。考え事に集中した所為かはやてちゃんに声をかけられる。

「いつきちゃん、どうしたん？」

「え？ あ、ちよつと考え事を」

「……!? ははーん、わかったで」

はやてちゃんがドヤ顔を浮かべてニマニマしながら此方を見てくる。何がわかった  
というのだ？ もしやリンカーコアの魔力にでも勘付いたのか!? 素質だけを考えれ  
ばまだ覚醒してないにしても十分に可能性は

「ズバリ！ グレアムおじさんに見惚れてたな！ いつきちゃんは老け専やったんや  
!!」

……微塵も存在しなかった。在り得なさ過ぎる間違った可能性因子は早々に断ち切  
るべきなのだ。その因子が今ここで誕生させられてしまったのならする事は一つ

「……チェストオー！」

横でドヤ顔浮かべたままのはやてちゃんに、脳天直下のチョップを全力で振り下ろ

す。

「ツ！ 痛ったー！ 物凄く痛い！ なにすんの!?」

「間違った考えを抱いた罰ですよ。そんなわけ無いじゃないですか」

「からかっただけやん！ もうちよい愛のあるツツコミが欲しかったわ！」

「知つてます、だからあえて私に出せる全力で答えてみました」

「全力の方向性が違うその愛が痛い！」

そう他愛も無いやり取りを重ねて、はやてちゃんに“一般人で気の会う友人”である私を思い込ませればそれでいい。……正体バレた時に何されるか、わからないけど。はやてちゃん、将来交友関係もすつごいお偉いさんに成るし。

大分端折って  
色々あつて、

一緒に夕飯を食べたり、足が不自由という理由を押し付けられ一緒にお風呂に入った。描写？ 無いよ、そんなの。

料理の際には今後の事も考えて料理が出来るのかの確認（まあA<sup>数</sup>、s<sup>か</sup>時点<sup>月後</sup>にしつかりと出来ていたのもそれは無いが）、出来なければ教えておこう等と考えていたが杞憂に終わった。原作どおりはやてちゃんの料理の腕には目を見張るものが既に在った。普通の一桁の子供が持つ腕前ではないでしょうに。

「はやてちゃん、料理の腕前凄かったですね」

「いや、それを言うならいつきちゃんの方が凄かったやん？ わたしは一人暮らししてるけどいつきちゃんは両親共にいてるんやろ？」

「あれ、言つてなかったっけ？ 私も今は一人暮らしだよ？」

足が不自由以外は大体ははやてちゃんと同じ境遇にいますよ。

「ほーそうなんか、大変やね」

……興味無しですか。まあ、いいか。

現在私たちははやてちゃんの部屋でベットと一緒に座ってお話している。なし崩しにお泊り会になったのだ。……下心とかある訳ない、と言いますかその気持ち湧いてこない。今、私、女の子だし。そんなことよりここまで来たら闇の書の確認ですよ。

(さて、確か机の本置きに紛れてるんでしたっけ？ 古い感じの背表紙は……とあつたあつた)

私は何気ない動作で其処まで歩いていき手を伸ばす。主ではない為防御機構が働くかと用心しましたが問題なく手に取ることが出来た。まだ起動状態に無いからだろうか？ 試しに開こうとしたが——開かない。それもそうか、なぜか半透明だがまだ鎖が巻かれている、開くわけもないのだろう。

「はやてちゃん、本好きなのはいいですけど、流石にこれは古書過ぎるのでは」

「うん？ ああ、それな、わたしが生まれる前から家にあつたらしいんよ。開かへんから読めないんやけど」持つてなくちやいけない” って気がしてな”

なんだろう、呪縛的なモノでもあるのだろうか？ いや、あるのだろう、蒐集を強いる為に主から魔力を搾取する機能があるくらいだし。完全に呪いだよね。

「ふうん……不思議な本もあるんですね」

「せやな、グレアムおじさんにも見してみただけ」

『世の中には人には理解できない不思議なモノもある、コレもその類だろう。とても珍しい物だからその時が来るまで大事にしなさい』

って言うてたから捨てたりする気も無いしな”

グレアムさん、もうちよつと頑張つてくれませんか？　せめてはやてちゃんから闇の書を引き離すくらいはして下さい、せつかく原作と違つて接触までしてるんですから。

原作に無いアグレッシブさの動きをしていたが、動いただけな人に心の中で文句をたれつつ、まだ時期ではないのか探りを入れようにも完全な沈黙状態の闇の書は反応がなく、またアクセスも出来ない為” しょうがない” と諦めて本棚に――

「痛ッ！」

戻そうとした際に闇の書を持つていた手に痛みが走る。血が出ていて闇の書にか

かかってしまった。ベースが書物であるからどうやらページで切ってしまったようだ。

「いつきちゃん、大丈夫？」

「大丈夫ですよ、ちよつと指先が切れてしまっただけなので」

「本や紙を触つてるとよくあるな、そっちの引き出しに絆創膏入ってるから使つてな」

「ありがたく使わせてもらいます」

指先に絆創膏を貼付る。ヒールを掛ければ痕も残らず治るので翌日以降にでも掛けよう。

夜も子供には辛い時間となつてきているのでそそくさとはやてちゃんの寝ている布団に潜り込む。

すると自分より小さい私に、きゅつと抱きついてくるはやてちゃん。

「どうしたんですか？」

「ごめんな……ちよつとだけでええから……」

向かい合いの状態になると顔を俯かせて少し肩が震えているはやてちゃん。……まあそりや寂しいでしょうね。純粋な年齢で子供の一人暮らしというのは。

「——私なんかで良ければ、いつでも頼ってくれてもいいんですよ」

こんな歪な存在であるような私でいいのなら

「私は」はやてちゃんがどうなつても「味方で居ますからね」

あやす様にそつと背中と頭を撫でながら呟く。安心したのか早々に寝入ってしまうはやてちゃん。

「思った以上に、この入り混じった世界の主人公， s のメンタル面は脆いのか、はたまた崩れたパワーバランスの所為でそう思えるのか……」

答えは出ない、出るはずもない。でも支えないと危ないかもしれない。グレアムさんが“直接会いに来て”関わっているのが影響しているのか、原作以上に人との関わりを欲しているのかも知れないこの少女<sup>は</sup>。このメンタル強度では最後のあのシーンで本当に壊れてしまうかもしれない。其処を対処する方向で頑張ってみますか。

そう考えながら、私も眠りに落ちた。



— SafeBoot  
仮起動

— DNA情報登録

— 対象魔力推定値測定：平均値 Rank “ B ” 相当

：振幅 “ 測定不能 ”

：最大値 Rank “ 不明 ”

— 対象魔力波紋登録  
パターン

— 対象素質判定 “ 可 ”

— 対象とのパスリンク接続 “ Complete ”

— 対象を “ セカンドマスター補助主 ” として確保 / 認定

— 今代の主の呼称より対象名登録 “ イツキ ”

— The transition to the standby state  
待機状態に戻ります . . .

## #11 肩入、思案

「あんた、いいかげんにしなさいよー」

突如響いたのはアリサちゃんの叫び声（というか罵声？）。受けていたのはなのはちちゃん。……あれ？おかしいな、この世界での貴女のグループでは全員が何かしら隠してると思うんですけど。

そう、自分の席で遠目に観察しながら思う。

二人（なのはと悠次）は一緒にジュエルシード探し、一人（亮夜）はフェイトちゃん側でジュエルシード探し、そしてきも一般人ポジ然で詰め寄ってるアリサちゃんとすずかちゃんもあんな事件に巻き込まれてたり体質の事だったり隠してるでしょうに。それと同じで幾ら親しくても言えない事ってあると思うんですけどね。

そんな事を考えていると、アリサちゃんとすずかちゃんが教室から出て行き、関わっている男衆がなのはちゃんに話しかけている。どうやらフォローに回っているようだ。

ちなみに今はアルサナが手元に無いので身体強化で聴力を増幅させて聞き耳を立てる。

「なにを隠してるのかはしらねーし、俺は別にそれでもいいと思うけど、あんま思いつめんよ」

まず口火を切ったのは亮夜君。色んな意味でアナタ方メンバーで一番隠してるであろうキミがそれを言いますか？

「俺達はアリサ達とは違うから彼女がなんであれ程怒ったのかはよくわからないが、俺で良ければ、いや、俺達で良ければ、いつでも相談にのるからな」

言いますねえ、フラグ建てるつもりですか？　しかし彼が言った“俺達”というのはこの場を客観的にみると悠次君と亮夜君ですが、事情を知っている”という意味では彼とユーノ君の事でしようね。

「うん……ありがとう、亮夜君、悠次君……」

うむ、彼ら二人は結構良い方に持つていこうと頑張ってるんですかねえ、それが効いているかはともかくとして。まあなのはちゃん主のフオー公ローは彼らがやってくれるでしょう。

このまま原作通りの流れなので放って置いてもいいんですけどねえ、あまり身近に寄っていくのは私のやり方に沿わないし。でもギクシヤクされても見ていて楽しいものでも無い、少しパワーバランスが原作と違う以上、メンタル面で支障をきたされると

前みたいは大怪我しそうになるかもしれないですからね、何より元の歴史通りなら暫くしたらジュエルシードに関わった人が休みますしね。少しフォローしておきますか。

私はそう考えて、なのはちゃんのフォローに回っている悠次君やらを横目にアリサ・すずかちゃんペアを追いかける。

原作描写通りなら階段で……おつ居た居た丁度話し合ってる？ でもどうやって話しかけようかな、特に親しくしたわけでもなかった訳だし、どうしようか。

そう考えていたら向こうの方から話しかけて来た。

「誰？……って、アンタ、神在だっけ？ 何？何か用なの？ 今アタシ凄く不機嫌なんだけど」

「ア、アリサちゃんそんな言い方しなくても」

ええー……其処までですか。他の人に当たるのはよくないですよ、私だったから良かったものの。あとすずかちゃん、微妙にフォローになってないです。しかし、そんな感情は表に出さず、関係ありませんと言わんばかりに私は話す。

「いえ、特には。ただ、あんな言い方をしてしまったら高町さんが可哀相ですし、次から顔合わせ辛くなつちやいますよ？」

「う、うるさいわね！アンタには関係無いでしょ!! それに、私たちを心配させて隠し事してるのが悪いんだから!!」

うくん、言い分はわからない事も無いんですけどねえ。やっぱり子供で女の子の考えは難しいですね、共有したがると言いますか、分かち合いたがると言いますか。それでも今回に限っては

「そうですね、この場でも只の通りすぎり、バニングスさんとも月村さんとも、そして高町さんとも特に親しくしてない私が何を言ってもしようがないとは思いますが、クラスの一員としてぐらいの進言はさせて貰えないですかね？」

クラスの雰囲気悪くなるのは止めて頂こうか、風景として、モブAとして溶け込みづらくならないか。

そんな私の言い方に少し動揺したのか怒りを和らげてくれた様子で答えるアリサ。

「な、なによ?」

「一つだけですよ。〃 どうしても人に言えない隠し事をしているのは、果たして高町さんだけでしょうか?」 っと言いたいだけです」

「!?!」

良くあるそれっぽい言い方したただけなのに二人とも驚き過ぎじゃないですかね? それじゃあ〃 私隠し事してます〃 っで自分からバラしてるようなもんですよ。

「……アンタ、何を知ってるの?」

「え? いや、何も知らないですよ? 良くある言い回しじゃないですか、さつき私が

言った言葉。思い当たる節があるんですか？」

「な、ないわよ！」

「そうですか。御二人とも誘拐されたりとか、月村さんは体質の事で何かあったりするんじゃないですか？」

自爆して貰うための餌を撒く。性格的に自分から直ぐに仲直りに行ったりはしないだろうけど考え始めてくれれば御の字でしょう。

「なツ!? どうしてその事を！ ホントに何も知らないっていうの!!？」

そう言つて胸元を掴んで持ち上げてくるアリサちゃん。いくら私の方が背が低いと言つても持ち上げられるとは……つて制服ワンピースタイプだから、脱げる、脱げちゃうから！

「わっふ、な、何も知らないですつてば。ただ御二人ともこの地方でも有名な家柄ですし、そういう事が有つても不思議ではない上に、そういう事なら人に言えない秘密ですし、月村さんは体育の授業の時とかに、いつも体調が悪そうな感じだったので、何か病気で患っているのかな？つて思つたからですよ」

嘘は言つてない。誰でも出来る予測をそれっぽく言つてるだけである。つがその予想内容であつても二人にはそのものズバリな内容に取れるように言つた言い回しだけだ。

「そ、そう。ゴメンナサイ。余りにも急に言われたから動揺しちゃって」

掴んでいた手を放してそういうアリサちゃん。取り繕えてないですよ。私はアルサナが居なくても身体強化ぐらいは掛けられるので全く問題は無いですけど。カツとなりやすいのはいづれ治しましょうねー。

「まあ、そういう事ですよ。なんでそこまでムキになったのかは御二人の事情を知らない私では何とも言えないですけど、そうなるまでに隠したい事が貴女にあるように、高町さんにも在った。そしてそれを伝えてしまうと何かが壊れてしまうかも知れないと、怖いから言えない、言う事が出来ない。そんな感じなんじゃないですかね」

乱れた襟首などを整えながら私はそう話す、でも感情に関しては完全に憶測でしかない。私はなのはちゃんでも無ければこの2人でもないのだ。当人だけが抱える事情などは分からない。それでも、隠し事があるのは私も例に漏れないのだ。むしろ隠し事の比重で言えば誰よりも重いかもしれない

「私にだって、大なり小なり言えない事ぐらい有りますよ、誰だってそうだと思います。その事で喧嘩できる友情は良いと思います、ですが長引くと仲直りのタイミングを失ってしまいますよ」

明確なズレが無い限り、今夜には街中での発動、そして翌日からなのはちゃんはアースラ陣営に入り学校も休むはずだ。確か描写的に5月の頭かそこら辺の時期だっ

たからGWに被ってるかも知れなかったが、今世ではGWにそこまで被っていない。色々勘繰られるのも嫌ですし最後に言いたいことだけ言って退散しますか。

「今から戻って、仲直り。つとかない事は判りますので、少しでも良いので考えてあげて。それと、高町さん、今夜辺りから連絡も付かなくなってしまうので、文面でも良いので『どんな事でも相談に乗る』みたいな事を早めに伝えてあげてくださいね」

私はそう言ってその場から立ち去ろうとする。去ろうとした時にすずかちゃんを腕を掴んで私を止めようとしたけど、これ以上聞かれても面倒なのでヒラリと躲す。そして本当に最後と言葉を付けたす。

「おっと。私は〃何も知りません〃よ。隠し事をして相談出来ないとする重<sup>想</sup>さも、仲直りの仕方も〃貴女方が知っている〃んですよ。それでは良い休日を〜」

言いたい言い回しを言えた！ 今度は邪魔されずに！！

そんなちっさい達成感に浸りながら私はそそくさとその場を後にした。

「……なんか〃言いたい事言えた〃みたいな凄く満足した顔して去って行ったけど、なんだったの、アイツ」

「わからないけど……神在さんが言ってた事は全部正しいと思うよ」



「わかってるわよ……なのはに怒ったのだって、ただの八つ当たりだって事も自覚してるわよ」

それでも、親友だと思ってる相手に相談されないのは気に障るものがある、越えて来て欲しい一線でもある。

「だけど……私たちはなのはおかげで親友に成れたのよ。その親友が悩んでいるのに力に成れないなんて……悔しいじゃない」

「そう、だね。でも神在さんの言うように、私達の事みたいは“簡単には言えない”事情なんだと思うよだから話してくれるまで待つてみようよ」

誰よりも友達だと思ってるから話してほしい、誰よりも友達だと思ってるから話せない。そういう事も存在するのだ。

「そうね。ま、まあアイツが言つてた事もわからないでもないからメールの一つぐらいは送つて上げようかしら」

「ふふ、そうだね」

「それにしても、アイツつて目立たなかつたけど、所謂“不思議ちゃん”つてやつなのかしらっ」

「ち、違ふと思うけど……不思議ではあつたかな」

行動したことで彼女たちの雰囲気は和らいだが、若干不名誉な称号を得たいつきであつた。

アリサちゃんおこイベントが起きてしまったと云う事はアレですよ、本日街中でジュエルシード発動つて事ですよ。この前のイベント進行がどうなったのか見逃しましたが、恐らくはまだ敵対状態でしようし、小規模次元震は問題なく起きますよねえ……起きないとアースラ組が来ない可能性もあるし自分で起こしても良いですけど、アルサナ居ない今”抑えられるか”わからない……でもやるだけやってみようかな？

「まあとりあえず、夜でしたっけ……既に夕方ですが探しに行きますかあ」  
まずは自宅に戻つて変装用の衣装もとつてこなくては。

□~~~~~□

またもや時間は過ぎて夜、服装はラフにアリサちゃん達の事件に巻き込まれた時と同じで大きめのショルダーバッグに色々詰め込んで街まで繰り出している。

「さて、どこから探しますかねえ。サーチはアルサナに任せつきりだったからなあ」

出来なくもないけれど、精度があるわけではないし発動痕跡や発動中の反応を完全に消せるわけでもない。現状の私の技量はその程度なのだ。

「原作だと……ああ、わからないから魔力を垂れ流してそれに反応するポイントを探ってたんでしたっけ。あれ？ だったら活性化前だと、アルサナという無駄スペックデバイスの補助なしの私では無理な気が……自分で探りを頑張ってもいいけど、ここは——」  
 確かにそこそこ（クロノ君程度）の魔力量を求めたのは自分自身だけでも、色んな要素・因子の影響でインフレ起こり掛けてそれで足りなくなる感じがしてくるとか聞いてないですよ。

そう心の中で愚痴りつつ、バッグに詰め込んだ中から一つモノを取り出す  
 「てってれー」 スマートフォン（皮だけ）の……っていか探知術式をこれでもかと詰め込んだ探知専用のアイテムを<sup>デバイス</sup>馴染み易い形に作ったただけですけどね」

機能は単純、某龍玉探知機と同じで特定波数を探知させているだけである、手元にはサンプル（ジュエルシード）が二つも在るのだ、二つでは比較パターンとして完璧ではないが、十分の探索精度はあるだろう。デザインに関しては似せようと思ったが、正直ダサ……”好みではなかった”ので変えた。明らかな未来デザインの外見だけど気にしない。どうせ現実でも後十数年もすれば作られるんだし。魔導があるミッドチルダとかだと空間投射だからこの手のモノは出来ないと思うけど。

「さあつて、マップおーん……反応は、まだ未覚醒なのかして微弱なのが……え？真横？」

作つたデバイスに間違いや失敗が無ければ反応は真横を示していた。そして其方を見てみるとビルの茂みに何やら光るものが確かにあつた。

「——どうしようかな、さつさと回収……したいけど封印が……でも放置するのも……いや、任せよう。アルサナ持ちのリニスもどうせ来るでしょうから、彼女達に任せよう。既に覚醒の爆心地に居るとか、流石に予想外すぎです、どうせ封印は無印しか出番ないしと思つてそれ用に特化したアイテム用意してないですし」

封印術式の必要性が全く感じられなかつたので創つていないのだ。魔力糸を用いた操糸術でぐるぐるに巻いてから掛ければ多分成功するとは思うけど、原作どおりならこのジューエルシードは最終的に小規模次元震を起こすまで覚醒するのだ、ハツキリ言うところ処まで力を使うのは「多分出来ない」からやりたくない、無理をやつて無茶を犯したくはない。

「もし出来たとしても、この未覚醒をそのまま封印ハイ回収。つてやつちやうと次元震おきなくて多分アースラ：管理局陣営来てくれるフラグ無くなつちやうし……でも、そのままならそのまままで、フェイトちゃん怪我しちやうし……アルサナがアッチに在るかから治療は完璧に出来るとは思うけど、うーん」

先手を打つと、管理局陣営が気が付かず、物語が破綻する。かといって放置すると特に問題が無いように一見思えるのだが、色々とインフレしちゃってる感じがするのでフェイトちゃん「止まれ……止まれ……」で抑え込み切れない可能性が在る、そこは手伝ってあげたいけどまだ表舞台に出ていくのは早計だとも思う。つまり……

「現状戦力下ではほぼ詰みですね。そもそも、アルサナが手元に居ない時点でバリアジャケツト形成にも不安が残りますしね。今手元には変装用の衣装と仮面ぐらいしか持っていないですし」

バリアジャケツトも無しに魔力の奔流に晒されるとか勘弁願いたい。

「とりあえずモノは見つけたので離れていつも通り様子見という事で」

自分に言い聞かせるように言い訳を述べて近場の陰になる所まで行く。

「それでも……必要なイベントフラグが、小規模次元震が起きる事、だけじゃなく、誰かが、大怪我をしてまで止める」という所まで必須なのだとしたら、まあその時は……

仕方ないよね？」

## # 1 2 Side : F 「変調」

「時間は少し遡つてある陣営」

とあるマンシヨンの一室に到着する3つの人影

「ここだよ。ここが私とアルフの、この世界での拠点」

そういつて扉を開き招き入れる身の丈ほどのマントを羽織つた黒衣の少女、フェイト。その後ろには、肌を多く露出させた犬耳の女性、アルフ。そしての二人の後ろから腕に不思議に捻じ曲がつた腕輪を付けた女性、リニスが付いて行く。

「こんな近場に居たんですね」

「まあ、一時的な拠点つてだけだからアタシ達は何処でも良かったんだけどね……」

なにやら言い辛そうに頬を掻きながら答えるアルフ。

「? 何か理由があるみたいですね、此処は結構上質な所のようにですし」

「いやーあつはつは……アタシやフェイトには理由はないんだけど、プレシアが、さ」

「どうやら彼女達とは別の人物の意思と指示により、拠点は決められていたようだ。聞くにプレシアと呼ばれた人物が彼女達の拠点を決めたようだ。」

「あのプレシアが……ですか」

『(マジで何処からズレてるんだ……いや、もうソレはいい、リニスが助かつてる時点で今更だ。"どこまで"ズレてるかを見極めるべきか)』

それに対して、もし自分の知っている人物だとすると少し前にも聞いたのだが、やはり行動があまりにもかけ離れていると考え込む者が二人いた。リニスとアルサナである。

——方やまだ自分が彼女の使い魔であった時代、その人物はそのような優しさを出せる余裕など持つてはいなかった。一つの物事に囚われ続け、自分が去るまで終つひぞそれは治らなかつたはずだった。

——方や自らの知り得ていた記憶、物語中でのその人物の描写。その人物はある人の蘇生の為に全てを投げ出し、ただその事だけに囚われ続けて居て、フェイトに対しても辛く当たっていた筈だった。

まだほんの一触りの外聞しか聞いてはいないが、その話を聞く限りでも二人のそれぞれが記憶している人物からはあまりにもズレていた。

『(リニス、お前はどうかしたい？ 恐らくお前が言えばフェイトはなのはに協力する方向にも動くだろうが、"プレシアにも聞いてみた方がいい"と促うながせば会いに行けるぞ)』

「私が決めてもいいんですか？ アナタが決めた方が良い方向に働くと思うのです



が」

『俺の立場はあくまでデバイスだ、そしてリニスは一時的とはいえ所有者、つまりは主だ。今の俺はお前の意思を尊重して、補助するのが役目だ。だがこちらの考えている事より大幅にズレたり、またはリニスの身に危険が迫った場合には容赦なく動くからその心算だけはしておいてくれ』

あくまで、主として動くのはリニスに任せべきであると、そう考える。リニスが生存している時点で、もはや物事の事象は原作に戻ることは無い。ならばせめて展開だけでも原作に“近付ける”様にしよう。そうすれば某運命石の扉作品曰くの“世界線を超える”様な大幅なズレを起こす事は無くなるだろうと。

そしてその為の一つの予防線が“この世界の基準となった物語に元から居る人物に行動させる”というモノだ。完全なIFの存在が介入するのではないのだ。確かにその行動の裏に自分たちの意思が在るけれど、影響はある程度抑えられると踏んでいる。

『(プレシアに会い確かめたいならさつきも言った通り、フェイトに一言“プレシアにも相談してみよう”と声を掛ければいいさ。どうもお前が知ってた人物像とはかけ離れてるみたいだがな)』

「(ですが、そういう演技をしているだけという可能性も)」

『(そういうのも含めて会えばわかんのだ。まずは“会う事”を考えろ。フォローはし

てやる。それにどうするにせよ、俺はお前に付いてないと動けないしな』

アルサナの言う通り、まずは会わなければ判断は付かないだろう、そう考えるリニス。自分が居なくなつた後に“何か”があつたのだろう。その“何か”を確認したいのはリニスだけではない。

『何が原因かは知らないが、あまりにも正史と違いすぎる。フェイトの言い振りだと、プレシアが病魔に侵されているのは正史どおりだろうし、アリシアもそうだろう。そしてリニスの言い方やフェイトが居る時点で、プロジェクトFは存在してるだろうし完成まではこぎつけたんだだろうな。なら改心したような形になつてる切っ掛けはなんだ？ ……全くわからねえ』

考えれば考えるほど、原因と切っ掛けに為る物が判らない。在るとする可能性が一番考えたくない“世代の違う転生者”という可能性。

そんな存在が居たら、自分達がいくら足掻こうとも正史に近付け整える難易度は跳ね上がる。“先手を打たれて布石を蒔かれている”など、もはや不利な状況という生易しいものではなくなる。

『(改心の具合にもよるな。ただ丸くなつただけなのか、今が大事だと気が付いたか。プロジェクトFの扱いに関してまで変わっているのか……)』

深く考えるアルサナを余所に、フェイト達は会話を進めていた。

「それで、フェイトにアルフ、どうしますか？ 私はあの子達、なのはとユーノは事情を話せばある程度の融通は利いてくれると思いますよ？」

「アタシもリニスの意見に賛成だね。あの子はどう見てもお人好しだよ」

リニスの意見に賛成するアルフ。彼女は良くも悪くも直感型なので自分の気持ちを素直に出す。それに対してフェイトも

「私もそう思うよ。あの子は魔導を扱う技術も拙つたなかった、多分あのユーノって子が見つけたこの世界の協力者なんだと思う」

つと同意する。リニスが「魔導師として一人前に」という契約の下にフェイトが教育されたのが数年前、其処から更に力を付けていたであろうフェイトは他人の力量を一度交えただけである程度は把握できるまでに成っているようだ。

「でも、あの子のまだ見えない才能？ っていうのかな、出て来ない部分は私を超えちゃう。そういう点では争いたくは無いかね」

「そうですね、あの子は才能という点で見れば、おそらくフェイト以上でしょう。ですが彼女はまだ魔導に関わって日が浅い。ジュエルシードを巡る争いに成っても2〜3戦ほどであればまだフェイトとアルフに分があるでしょう」

そこまで言ってから「しかし」と付け加え、話を続けるリニス。

「それも、私たちと正面からのジュエルシードを取り合う衝突が続いていけばの話です。おそらくそうなっていれば交える内にあの子はフェイトの技術を吸収してゆき、暫くもしない内にやられていたかもしれません」

そう付け加えた。原作でも最初の衝突から約半月ほどで何とか撃墜するまでに成長するのだが、常識的に考えてみても驚異的な成長速度である。

「そんなあの子と敵対するのは辞めておきましょう。控えめにみて損しかありません。幸い、あの子もこちらに歩み寄ってきてくれているので、受けない手は無いです」

これを利用しないのは愚か者だろう。向こうから無条件で歩み寄ってくれているのだ。此方が少し寄れば領いてくれると言っているほどまでに。

「ですが、コチラの意見ばかりを押し出すのは、交渉として悪手です。なのでコチラでどれだけの数が最低必要なのか確認しておきたいのですが……フェイト、わかりますか？」

「えつと……私も母さんから集めてくるようにお願いされただけで、多い方が良いぐらいにしか考えてなかったけど……」

「まあ、そうでしょうね。おそらくですがプレシア自身もジュエルシードの情報をどこから仕入れたのかはわかりませんが、それが総称で複数個はあるという事を知っただけで総数は知らなかったのかも知れません。だから“集める”という言い方に成ってし

まったのでしょ

「あつ、でも2く3個集めたら一度持つてくるように言われたよ。」どれくらいのモノか実際に確認したいから」つて」

リニスは考える。実際に確認”という事は”誰かからある程度は聞き及んだ”という事が在り得る。ならば

「フェイトは今いくつ持つているんですか？」

「えつと二つかな？ 少し前に初めてあの白い娘と対峙した時のと、リヨウが持つてきてくれたの……あつ、リヨウつていうのはね、この世界で出会つて協力してくれてる子なんだ」

おそらくは子猫の時に居たフードの子であろうとリニスは辺りを付ける。協力者なのに今夜も居なかつたしこの場に居ないのも少し気にはなるが、居ないのであれば仕方ないと考える。

「その子も確認して起きたい所ですが……いずれ会えるでしょう。それよりも2個ですが一応届けに行きますか？」

「うん、リニスに会えた事も母さんに報告したいから」

そういうと何やら英数字の羅列を唱え始めるフェイト。次第に足元に部屋いっぱいまで魔方阵が広がる。そこに色々抱えたアルフが近づいてくる

「途中から姿が無いと思ってましたが、その荷物はなんですか？アルフ」

「ん？ああこれかい？ プレシアへの土産やらこの世界の医薬品とかだね」

「土産は……まあわかりますけど、医薬品ですか？」

「なんでも、プレシア自身も病に罹<sup>かか</sup>ってるみたいでねえ。それが誰にも——それこそ魔導でも治せないらしくてね。ただ症状を遅らせるぐらいなら魔力を使って体に負担を掛けるよりも薬に頼った方が”まだ”良いって言ったのと、それぞれの世界で医療系の進化が違うらしくて”症状に対する方法を理解、解析して魔導に組み込めれば”とかなんとかも言ってたっけ」

「なるほど……」

一理ある。とりニスは思う。魔導は一般的にはプログラムに乗っ取ってデバイスで発動するものだ。それを組み上げるのであれば、特性を理解し方向性を示して組み上げる方が燃費も性能も良くなるだろうと。

「まっ、アタシにはそつちの話はさっぱり理解できないけどね」

つと笑って締めたアルフ。そうこうしている内にフェイトの転移座標指定も終わろうとしていた。

「……よし、繋がった。リニス、アルフ、行こう」

「わかりました」「あいよー」

三人は転移魔方陣に乗ると光が溢れ、部屋から姿を消した。

く時の庭園く

次元の海を漂う島の様な場所の一角に三人の姿が現れる

「つと、ここが母さんと今居るところだよ。多少、寂れちゃつてるけどね」

“寂れている” フェイトはそう言ったが、まだ草木は広がるように残っている。確かに、所々荒廃した様な雰囲気はかもし出されていたものの、整備が届いていないだけだろう。

「じゃあ、コッチだよ」

フェイトが先導して、アルフが持ってきた荷物を持って、リニスがそれに付いて行く。しばらく案内されると、少し豪華な扉の一室にたどり着き、扉をあける。

「母さん、ただいま。お願いされてたモノ探してきたよ」

扉を開けた先は広間のような所。その奥に大きめの椅子、そこに座っている人物が居た。フェイト達が入ってきた事に反応してその人物が声を上げる。

「あら？ もう戻ったのフェイト、アルフ。……それに貴女、もしかしてリニスかしら？」

その人物、プレシアが椅子から立ち上がって驚いた表情をする。フェイトとアルフはその意味がわからない様だが、プレシアはリニスが分かれた時にもう契約が切れ、魔力供給が無くなり消える運命だった事を知っている為だ。

「お久しぶりですね、プレシア。残念ながら貴女の“頼み事”の探し物はまだ見つかってないですよ」

フェイトから聞いた情報にあわせてプレシアに話しかける。もしプレシアが昔のままなら此方に合わせてくれる事は無い筈だ、だがそうでないのなら……

「……そう、貴女には難しい事をお願いしてしまつたわね。その事だけど、今フェイトとアルフにお願いしているジュエルシードが丁度代わりになりそうだから、ソレを手伝って上げてくれるかしら？」

リニスの考えは杞憂に終る。それでもまだ最終的な判断には至らない。しかしフェイトに関しての感情、あたりかたは以前のプレシアからは全く違うものであった。

「わかりました。以前の頼み事の件も念の為搜索を続けますが、今はフェイトとアルフを手伝えれば良いのですね」

「ええ、お願いするわ」

詳しい事情の確認等はアルサナも交えてまだ話すべきではないと決めていた。いずれ全てが終つてからなら、いつきの事含めて話しても良いとも。なんにせよ、フェイト・



アルフがいる状態でプレシアと余り話し込むと、共にボロが出かねない。早々に話題を変えろ。

「そういえばプレシア、その関係で少しフェイトから相談事があるのですが聞いてあげてくれますか？」

「ええ、大丈夫よ。フェイト、相談事ってなにかしら？」

「うん、散らばってしまったジュエルシードを回収するのを手伝って欲しいって言ってきた子供達が居たんだ。ソレで私達は協力してもいいかな？ って思ってるんだけど、母さんに話をしておきたくて」

プレシアの下に一度戻ってきた目的を話し始める、集めている最中、その本来の保ち者であろう者とその協力者と出会った事、そしてそのものから協力を申し出られたことについてだ。

「そうね……フェイト、貴方が協力しても大丈夫だと判断したのなら、それで構わないわ。でも、私の方もジュエルシードは必要だから、幾らか持ってきたのでしょうか？ 調べてみるから貸しなさい」

そういうわれて、バルディッシュからジュエルシードを取り出し渡すフェイト。ソレが手元まで渡ると調べ始めるプレシア。

「これなら……そうね、ムラがあるけれども低い方の数値から見ても後2〜3個ほどあ

れば十分かしら？ 複数在るのは此処に二つあるからわかるけど総数がわからない以上、その子達がどう反応するかわからないわね」

個数次第では協力したとしても望む数は得られないかも知れないと思案するプレスア、そこに言葉を重ねるリニス。

「それについてですが、一つ良いですか、プレシア」

「あら？ 何かしらリニス」

「見て分かる通りジュエルシードには個別にナンバーが振られているのですが、私の確認した限り、その協力を申し出てきた子が持つ一つのナンバーが“ $X_2 X_1^1$ ”でしたので、最低でも21個は存在すると思いますよ」

リニスが告げると「それなら」っと少し考えてから

「ならフェイト、まずは21個を最高個数として1/3、7個を一時的に使わせて貰う事を条件に言ってみなさい。勿論、悪い様には使わないと言ってね。それと使い終わったら直ぐにでも返すからともね」

“ 何に ” 使用するかは伝えることが憚はまかられるので避けるべきだろう。

「それでもおそろく、元の所持者からすれば快い返事は難しいと思うから、相手が考えるそぶりを見せたら、妥協として、ならば5個でもいいと伝えなさい。そうすれば向こうも協力を得るのであれば妥協すると思うわ」

交渉事における、吹っ掛けと見せ掛けの妥協。まだ精神的に成長しきれていないフェイトでは出ないであろう案だ。

「……これはあくまで建前よ。最初にも言ったけどフェイト、貴方が自分で判断した事なら、それでいいのよ」

協力者に対する返答もフェイトの好きにしているという事になり、土産や医薬品なども渡し終えて暫く話し終えた後

「フェイト、次はプレシアと二人きりで話させて貰ってもいいですか？ あの件はまたその後でも」

「うん、わかった。じゃあアルフと一緒に外で待つてるね」

フェイトとアルフが部屋から出ていく。ここから自分たちの本来の目的であるとリニスは少し雰囲気を変える。

「率直に言いますね。プレシア、何が貴方を其処まで変えたんですか？」

「……なんてことは無いわ、ただ気が付いただけよ。生まれはどうあったとしても、あの

子は私の娘だつて」

「そう……ですか、いえ、ソレが本当なら私から聞くことはありません」

完全に納得したわけではない。それが本当だとしても、いや、変わりようからして本当なのだろうけれども、“それだけ”で此処まで変われるとは昔を、そしてそうなった経緯を知つてる以上リニスは思えなかつた。

「私の事はまた機会があれば教えてあげるわよ。……それで、リニス。貴女はどうやって生きていたのかしら？」

「私はあの後、今ジュエルシードが散らばっている地球に辿りつき、其処でとある人物に助けられて今まで過ごしていきまして、その人が偶々魔導系統の技術を持つていたので生き長らえました。今現在もその人からの魔力供給によつて存在できてるんですよ。そして場所が場所ですし、この“時の庭園”も特殊な環境ですので、今まで自力では来れなかつたのですよ」

今までの自分の置かれていた状況を、簡潔に説明するリニス。特に嘘は無いが全てが事実というわけでもない。助けられた事は事実だし、今居る時の庭園の場所を把握できなかったのも事実だ。ただし、“誰に”助けられたか“いつから”助けられて居たかなどは伝えていない、いつきがどう在ろうとして居るかを聞いているリニスなりの配慮なのだろう。

「それで？ 貴女の現状は判ったけど、貴女が聞きたいのは私の気持ちだけではないの  
でしよう？」

プレシアの側から促がされたのでどうしても聞いておきたかった事を聞こうと決める  
リニス。今の彼女は「そんな事はしない上、おそらく出来ない」という事は感覚でわ  
かっている、こうなる前の彼女を知っているから聞かすには居られない。

「今回のジュエルシードに付いて、原因はプレシア、貴女ですか？」

「……私は、何もしていない」わ。そんなロストロギアを運んでいた船があること自体  
も知らなかった。そもそもリニス、貴女が居た時でも私にはそこまでの規模の魔法を安  
定して発動させるほどの力が出なかったのよ」

プレシアは項垂れながらそう告げる。ソレが事実だとすれば「何故ジュエルシード  
がばら撒かれたのか」が尚の事わからなくなる。

「ではプレシア、貴女は何処でジュエルシードの情報を手に入れたんですか？」

当然の疑問として残るもの。今や満足に動く事が出来ないプレシアなのは見てわか  
る。その具合から察するに既に半年程は前からは臥せていたのだろう。そんな彼女  
が自ら情報を集めて回ることは容易ではない。

「もう其方の方には手を付けてなかつたけど、情報だけがいきなり届いたのよ。」とある世界、地球という場所に君が求める物が少なからず在るだろう、そのロストロギアの名はジュエルシードだ” ってね」

情報源が余りにも不確定過ぎる。なのに情報としての正確性が的確過ぎる。曖昧に“ 少なからず” としてはいるけれども、それは“ 一つではない” と読むこともできる。

「名前も判らない相手からですか……」

「いえ、名前は存在を誇示したいのか署があつたわね。それに相手の一方のおおよその予想は付いていたから。確か——” J”」

その名を聞いてアルサナは考える。おそらく描写は無かつたがこの頃から多少なりとも何かしらの接触はあつたのだろう。エリオも何処からか漏れた情報を元に研究が継続された結果だつた筈だ。“ J” おそらくは、StS編の造りだされた悪らしい悪、ジェイル・スカリエツィ。プロジェクトFの基礎理論も確かこの者が作り上げたものだつた気がする。

それだけで在ればまだ“ 想定範囲内” であると考えて居たが、続く言葉に思考が切れる。

「  
& そして  
”

I  
”

つ  
と  
在  
つ  
た  
わ  
ね  
”

## #13 接触、受信

「うーん……この辺りにはないのかな？」

とある日、なのはレイジングハートを片手にジュエルシードの反応を探して夕方から夜に差し掛かった街を歩いていた。肩にはフェレット……もといユーノが乗っている。ここ数日ジュエルシードの反応は全くと言っていいほど無かった。その為反応を待つのではなく、自ら探そうと思いい立ち足をのぼしていた。またそれにもう一つ気になる事が彼女にはあった。

「ユーノ君どうしようか。フェイトちゃんは」ジュエルシードを幾らか一時的に使わせて貰えば最終的には全部渡すから」って言ってくれたけど」

「正直に言うとは危険なものだから一時的にでも使つてほしくは無いけどね。それでもこの世界で発動した場合を考えれば協力者を増やして早急に回収した方が良くとも思うんだ」

ユーノの考えとしては、ジュエルシード自体の危険性もあるがそれ以前にその危険なモノがこの無関係である世界に散らばっている、という危険性に対する対処が最優先であるというモノ。協力者が増える事自体には賛成なのだ。それにユーノはまだ伝えて



ないが猫が大きくなった時に出てきた人物の事も気にしていた、敵対している様ではない、かといってこちらに對しての協力者とも思えない人の事を。

「よつと。なのは、俺が確認した限りだと向こうの方にも無かったぞ」

そういう話していると歩いて近づいてくる人物が現れた、悠次だ。なのはやユーノとは別方向を探しに行っていたが成果は無かった様子である。ならば次はと違う方向に探しに行こうとした時、その方向から現れる人影が4つ

「ナノハ、向こうの方には無かったよ」

「俺とフェイト、アルフとリニスで別れて向こう側を探してみたが反応が弱すぎる所為なのか特定が出来ねえ。そつちは……俺達が来た方に行こうとしてたつて事はどうやら無かったみたいだな」

「なかなか見つからないねえ、いつその事この辺り一帯に少し魔力を流して活性化でもさせてみるかい？」

フェイト、亮夜、アルフ、そしてリニスだ。

なのは達とフェイト達は数日前に既に会合し少しだけ話をしていた。ジュエルシードの貸与等に関してはまだあまり纏まりはしなかったが、ユーノがその危険性を前面に出し説明したため「とりあえず全て回収してからまた話し合おう」という形に落ち着いた。

その際に一悶着あったのだが、悠次が「何故お前が！」と突つかかって行き、亮夜が

「お前がそつちに居るのと対して変わんねえ理由だよ」つと答え、猫の時の様に伸ばされただけなので割愛してもいいだろう。

「それは辞めた方がいいでしょうアルフ。もしもの事が在つてはいけませんし」

「大丈夫だつて。これだけ人数がいるんだし、フェイトとナノハがあらかじめ準備しておけばなんとかなるさ」

「はあ……ユーノ、実際にジュエルシードを発見しその危険性を説いた者として、大丈夫かどうか判断できますか？」

リニスがユーノに判断を仰ぐ。この場合は発掘・封印・運搬に至るまでこの地球にばら撒かれる前の一連に関わっていた者の意見の方が確かだからだ。

「やりたくはないですけどね。このまま大まかな位置も観測出来ない状況が続く中探するのはあまり思わしくない。フェイトさん達と初めて会った時を例に出すと、それこそ野良猫や野良犬が発動させないとも限らないんだ」

「だからこそ、多少のリスクは否めないがやむを得ない。つとという所ですか。結局、結界の魔力に反応しない様を探していた意味が無くなりますね」

魔力反応が微弱で“この辺りの街中の何処かに”程度しか反応が見られなかった、その上ユーノが発動させることのできる結界の規模はその反応が見られる範囲全てを覆う事が出来る程ではない為、万が一範囲外で在った場合に結界発動や維持の魔力に中<sup>あ</sup>

られてジュエルシールドが街中で発動する可能性もあった。

もつとも、リニスはいつきからの供給を未だに受けていて規格外のデバイスも所持している為、問題なく覆いきる結界を発動することが出来るのだが、そうなると今度は結界強度の関係で“暴走する予定”のジュエルシールドの反応が“とある場所”に届ききらない事に成ると元も子も無くなるのでアルサナが止めさせていた。

「では考えるだけ時間も勿体ないですしその方向で行きましょう。出来るだけ急激な反応をしない様に”弱く薄く広範囲に”魔力を流しつつ反応を特定出来るまで徐々に強くしていく必要があると思いますがユーノ、今のアナタに出来ますか？」

「まだ僕には出来そうにないよ。勿論なのはや悠次は魔力量に問題はないけどそこまで繊細な操作は出来ないと思う」

リニスに問われ、そう返すユーノ。彼も出来れば自分が行おうと思うが今の状態では魔力量が多くない為、その作業を行っている途中でガス欠になるだろうし、何よりユーノは自分には結界を張る役目があると考えていた。

「まあ道理ですね。では……フェイト、出来ますか？」

「うん、出来ると思うよ。でもリニスがやった方が良いんじゃない？」

「私は何か在るといけないのでフォローに回ります。それに周りへの認識障害もかけないといけませんし、ね」

辺りはすつかり暗くなり、人通りも少なくなってくる程になっていたがそれでもまだ完全に人の目が無いわけではない。そう言うやいなや、片手を振るい全員に認識阻害の魔法を掛けていった。

「コレでいいでしょう。フェイトは魔力を広げていって他の皆は反応探知に集中してください」

その言葉を合図に探知できる者は探知に集中し始める。だがなかなか反応を掴むことが出来ず、放出する魔力をある程度強めにしてから暫くしてなのはが反応を捉える。

「見つけた！ あっちの方！」

「あっちは……街の中心部か。端の方から探してりや見つからないわな」

認識阻害もかかっている事だと、皆一様に反応が有った方に駆けて行った。

「この辺りでしたね。では結界の展開を、ユーノお願いしますね」

「わかりました」

「そして、多少無理に反応させたのですからおそらくですが既に活性化しつつあると思いますので二人とも、結界が展開しきりましたら封印<sup>シーリング</sup>を行う準備を」

「わかったよ(の)」

ユーノが結界を展開していくのと平行してなのはとフェイトがデバイスを起動させていき、周りの風景が少し色あせ結界の構築が完了する。

「展開、終わりました」

結界を展開した魔力に反応したのかそれとも先に展開した魔力に反応していたのか、色の少し変わった世界の一角、ビルの生垣辺りで何かが光っているのを確認できた。

「見えましたね……フェイト、なのは、お願ひします」

「うん、バルディッシュ」『サー、封印形態、移行します』

フェイトがバルディッシュをシーリングフォームに変えていき、封印シーリングを施していく。

「それじゃあ、わたしも」

続くようにそういつてなのはもフェイトが封印シーリングを掛けている上から重ねていくのは。

「何もなく無事に回収できそうだね」

だがなのはがそう言いながら封印シーリングを重ね掛けしていると、少女たちの魔力に触発されてかそれとも何者かの干渉によってか、ジュエルシードが暴走し始めるかのように魔力反応を急激に増大させていた。

「これはいけませんね……このままでは”結界内で抑えきれずに”現実世界に影響を与えるかもしれません」

「そんなッ!? この前みたいになっちゃうかもしれないなら止めなくちゃ!」

リニスの発現を聞き、焦った表情でジュエルシードに向かっていくのは、そしてフェイトもそれに同行するように向かっていく。

「ッ! ダメです、それはもはや、貴女達で抑えられる段階ではありません!!」  
それにリニスが制止をかけるが、必死になっている者には届かない。

「ギリギリまで近づいて、封印の為の出力を高めれば!」

それが危険な行動である事は言われるまでもなく気付いていた。だけど、もうあの様な惨状を起こす訳にはいかない、そうはやる気持ち優先されていた。

「ここからならッ」

「ッ! 待って!」

「え? キャア!」

近づけるギリギリという所まで辿り着いた瞬間、唐突に少女2人の体に衝撃が走り”派手に飛ばされて”ジュエルシードから離れていき、アルフとリニスが二人をそれぞれ受け止める。そして飛ばされる前に彼女達が居た地点には、裾がボロボロになっているような全身黒のフード付きコートで身を包んだ何者かが蹴り終えた姿勢で立っていた。

「てめえ、誰だ! なんでフェイト達に! それよりもソレがなんだかわかってんのか!」

「ッ！ 待て、亮夜！」

悠次の待ったも聞かず、叫ぶと同時に双剣を構えて切りかかる亮夜。しかし、フードの人物が何処からか取り出した三叉が十字に近い角度で分かれた剣状の何かによつて  
“片手で” 捌かれてしまう。

「なッ！ その武器は、まさか“虚空ノ双牙”か！ なんでソレがここにあるんだ！」

そう、謎の介入者が手にしている武器は本来、彼が選んだ力の元となつた物語、その  
“ゲーム” に出てくるモノ。つまりは“データとして” しか本来ならば存在しえない  
筈のモノであり、またそれを知る人物は自分もしくは転生者と呼ばれる人物が造るしか  
ない。当然、亮夜はソレを作る技術も無かつた上、そんな“前世の知識” など荒唐無稽  
と思われることは誰にも話していなかつた。

「ツチー！ 今はそんな事はどうでもいいか！ 喰らえ！」

亮夜の双剣による乱舞が繰り出される。袈裟懸け・逆胴といった基本の斬り方から、  
大きく後ろから体ごと回転するように振り下ろされる二連撃、次々と加えられて行くが  
全てを片手で防がれる。そして終には

「クソッ！ 武器が……かはッ！」

双剣を重ねて突出したところを三叉の部分で絡め取られて相手の武器と共に遠くに  
放られた。そして武器を取られ気が其方に向いた瞬間に蹴りを入れられなのは達の方

向に飛ばされていく。

「亮夜！」

つられて悠次も飛ばされた方に行き、全員が何か所に集まる形となる。そしてソレをしかと確認した素振りを見せ、相手はいよいよジュエルシードに手を伸ばした。

「…………ツ!？」

だがその人物が両手で押さえ込もうとした瞬間、今までに無い輝きを放ち、ジュエルシードを中心に周りの空間が少し爆ぜた。そして外套と腕を覆っていた布が弾け飛び、万歳のように上がる両腕、其処に現れたのはまだ幼く白く細い両腕。衝撃の影響かその掌は真つ赤に染まり、腕には切傷のように線が走り血が流れていた。更にはフードの部分も捲れ、Fateのアサシンのマスク 骸骨の様な仮面を被った顔が露わになった。

「そんな!？」

「アイツでも抑えきれないのか!？」

悠次と亮夜がそう叫ぶ。まだ未熟とはいえ此処にいるメンバーの中では比較的強い側に位置する亮夜を軽くあしらった人物でさえ、簡単に封印出来ないところまでジュエルシードの暴走は局面を迎えてしまったのか、と。周りに居るなのはやフェイトも動揺している。自分達の行動によってこんな事に成ってしまったのかと。ユーノとアルフはもはや手の出しようがないといった表情をしていた。彼らは抑え込みは出来て



も封印そのものがデバイス頼りになる為行えないからだ。

「……」

仮面の者は負傷した両手を見て少し考えるそぶりを見せた後、懐に手を入れて何か緑色をしたボロ布取り出しジュエルシードを包んでいった。

「まさかそんな!? ジュエルシードの反応が消えただつて!!」

ユーノが驚愕の表情を見せる。封印を施しても、ジュエルシード自体の反応はどうしてもわずかに残る、それは運搬の為ユーノが一度封印を施していたにも関わらず、このばら撒かれた地でジュエルシードの反応を頼りに探すことが出来た要因の一つでもあるのだから。

「あつー！ 待ちなさいー！」

リニスガジュエルシードをボロ布で包んで持ち帰ろうとしている人物を止めようとするが、そんな声聞こえませんかと言わんばかりにさっさと懐に仕舞って立ち去ろうとしていた。つと言うよりその姿はリニス以外の皆が確認しようとしたときには既に無かった。

「皆さん、無駄かもしれませんが私は少し追跡してみます。それとフェイトにアルフ、遅くとも明日には戻りますので私の心配は無用です。では」

それだけ言い残すとリニスの姿も直ぐに見えなくなつた。

□~~~~~□

いやーあんな暴走の仕方するとは考え付かなかったですねー。魔力同士が干渉しあうだろうとは思ってましたが、まさかシーリングで多重封印とかにならずに波長が少し合わないだけで干渉しあって封印どころか、かえって活性化させるまでの魔力反応を起すなんて予想できるわけじゃないじゃないですか。

そんな事に成ったのだからもう傍観していたいとか考へてる場合じゃなくなりましてあのままだと更に暴走して無理に抑え込もうとした時に最悪、腕の一本ぐらひは吹き飛びかねなかつた程まで活性化しそうでしたしね。

そして彼は協力しているという気があるのだろうか？ 急な事態に混乱していたとはいえ一人に対して一人で挑んでいては多人数の利点がないではないですか。まあA's 編終盤までに直ってくればそれでいいですけど。あとはスキル？ って言いますかあのゲームに出てきた技を使つてなかつたのも気になるなあ、『<sup>レベル</sup>練度が足りません』みたいな元作品に合わせられた世界の補整を受けて無ければいいのだけれど。

それにしても、あの衣装は見せた以上もう使えないし、更にちよつとぐらいは仕方ないとは思つて居たが、まさか爆ぜるとは考えもつかずなんの防御も施していなかった結果、原作にあつた描写同様な感じに傷付いちやつたこの手はどうしようかなあ。使えない事は無いけど痛いものは痛い、原作のフェイトちゃんはこの痛みに耐えてたのか、偉いな。アルサナが戻ってきたらさっさと治そう。まだ完全にジュエルシードの封印も施せてないし。

そんな事を考えながらこれからアースラ陣営の確認にどうやって潜り込もうか練つていたらリニスが現れた。ナイスタイミング。

「おかえりなさい、でいいのかな。フェイトちゃんの方には居なくていいんですか？」

わざわざアルサナでも返しに来たんですかね？ 勝手に戻ってくるって言つたのに。まありニス用に調整を重ねたデバイスも渡したかったですし、ちよつと早いですが丁度いいと言えば丁度いいタイミング。なぜかなのはちゃんとフェイトちゃんが既に協力体制ですがその辺りはアルサナに確認すればいい事。アースラ陣営が強化されていたら原作展開になつた場合、あの場に來るのがクロノ君一人ではない可能性もありますからね。

「アナタは……」

わなわなと震えながらという表現がふさわしい感じになりながら喋り始め

「アナタは、自己犠牲を美德とする様な甘い考えをした物語の主人公にでもなるつもりでいるんですか！」

「へあ!!? なに、なんで私怒られてるの」

いきなり語気を荒げて迫ってきたリニス。ホントにワケガワカラナイヨ。

怒られるような事をそもそもしてない上に、なんでリニスが怒るのかも検討が付かない。でも、もしかして

「この手の怪我の事ですか? これは別に自己犠牲とかそんな甘っちょろい考えで負ったモノではなく、あの場ではこうする方が“一番被害が少ないであろう”と考えた結果ですよ。まあそれを自己犠牲って言われたらそうなんでしょうけども」

あの場ではもうこうするしか無かったと思う。仮に彼女たちが更に抑え込もうとしたとしても、そもそもジユエルシードが覚醒し始めたのは“彼女たちの魔力によるもの”だ。そんな状態で封印をしようにもおそらくは同一魔力の為に吸収されていただろう。では他の男子二名で封印を行えばよかったのか? となるが、彼らはまだ頼りないと思う以前にデバイス持っていないじゃないか、彼らの武器などはおそらく転生時の特典かにかの副産物だろうと思う。ならばあの場に居た人物で封印を施せるのは誰か? となるがもう残りはリニスしかいない。でもリニスにはフェイトちゃん側で活躍して貰う方向に変えたので怪我を負わせて活動し辛くするわけにはいかないのだ。

「それと私が主人公ヒーローになんてなれる訳ないじゃないですか。どこまで足掻いても私はしがないその他大勢モブですよ。だけどこの小さな手でも届く範囲は、被害を小さくしたいと思ってもいいんじゃないでしょうか？ それに、あんな反応で暴走状態になったジュエルシードをあの場合でどうにか出来そうなのは私かりニスしかもう残ってなかったですし、リニスはフェイトちゃん側に居たいんでしょう？ なら今はまだ私との繋がりが判らない様に、ああするのが一番だったんですよ。まあその結果がこの有り様ですけどね」

それでこの話は終わり、とりあえず早くアルサナ渡すかりニスが治療してください、手痛いのです。わりと。

“ 治してね ” と言わんばかりに手を差し出すとリニスに何故か両手を軽くであるが握られた。凄く痛い！

「そんな説明で納得するとも思ってるんですか、イツキ」

ええー、なんですか。それ以上の理由とか要らないじゃないですか。私以外みんな無事、私も目的のジュエルシードの予備が確保できた。みんなハツピーじゃないですか。

「大体ですね、あの場でそうするしか無かったとしても、せめて念話で私に伝えてくれれば、対立してるように見せつつも二人で協力して更に被害を少なくできてたかもしれないですよ」

まあリニスが言う事も尤もだし、彼女からしてみれば私もまた守るべき、守られるべき“子供”でしかないんでしょうね、中身がどうあれ。それでもですね

（“元の流れ以上の”に成るけど、怪我をするなら不利益を被るなら、私みたいなイレギュラーでいいんです。元々の物語には居なかつた者ですからね……それに、この世界に“女性主人公”は十二分ですから、足されて釣り合いがとられるとしたら、それは“男性主人公”に成れる彼らだけですよ……まあ、それでも、こんなのはこれつきりにして対策を多めに取らないとなあ……心配してくれる人も居る事ですし）

「聞いているんですか？ イツキ」

「ハ、ハイツ!!」

その後、先に腕の回復をお願いして回復して貰いさあ今日も一日終わったと思いきや、長きに渡るリニスの物理を伴わないSEKKYOUを頂いた。

治療の際、多種混合した魔力の影響なのか、はたまたただ単に傷が大きかつたせいか、微妙に治りが悪く、何故か痕も少し残ってしまったが気にする程ではないだろう、元に戻す目処はあるにはある事だし、それに回復魔法のプロセスや効果範囲、効果速度の詳細

細を突き詰めればプレシアさんとかの治療やA、s後のなのはちゃん撃墜時の治療の助けになるだろう。

(それにしても、回復し切れなかった原因はなんでですかねえ……)

~~~~~

Side:???

「魔力反応、おさまりました。発生規模は変動的で、最小値はかろうじて観測できる程度から最大値は中規模次元震が発生する程です。詳細座標は現在割り出し中ですが、発生場所は補佐が予想されていた通り、第97管理外世界・惑星名“地球”より観測されます」

計器を操作しながら観測していた人物がそう告げる。

「そうか、観測ご苦労。どうやら君の言ってた通りになってしまったようだな」

全身黒づくめの制服を着た少年が、自分よりも少し背が低い少年にそう語りかける。

「あくまで推測だったんだけどな。しかし事が起こった以上、思ったよりも危険な事に成ってしまっているみたいだな、クロノ……執務官」

「よせ、僕と君の仲だろ。まだ仕事モードに入るには早い。それに管理外世界だ、魔導師は居ないだろうし、魔導関連の技術もまともに広まっただけじゃないだろう」

「だからこそ、だろ。その通り魔導関連の技術が無いのだとしたら、むしろ発動したという事が恐ろしいよ。誰も抑えることが出来ないからな。だが今回は“収まった”。発生のタイミングと収まるまでの時間から考えて“誰かが再封印”したんだろうな。そのロストログアを運んでいた者、その人が搜索して再封印した可能性も考えられるが、その人との連絡は取れていない。管理外世界とはいえ魔法の才能がある人が一切居ないという訳ではない、そういう文化が一概に無いというだけで、現地の誰かにその才能があり、協力してもらっていると考えた方が良さそうさ」

少年はそう促す。貨物運搬次元航行船の事故、それは管理局には報せが届いていたが危険性の高いと見なされた物資が無い事や人手不足という些末な理由で調査を後回しにされそうになっていたモノ。クロノと呼ばれた少年と親しそうに話している少年が目を通し、艦の巡航の際に気を付けるアタリを設け、航行ルートに組み込まなければ、先ず見逃してたであろう次元震反応。

尤も誰が何をしなくても“たまたまその辺りを巡航していた艦がたまたま発せられ



た反応を観測したかもしれない”のだが、この少年は“そうなる事がわかっていたかの  
ように”準備をしていた。

「準備したのに間に合わなかったか……だが俺が居る時点でズレが生じてまだ初日だ  
という可能性もあるんだ」

クロノと共に居る少年。彼もまた“存在<sup>イ</sup>しな<sup>レ</sup>な<sup>キ</sup>な<sup>ク</sup>た者<sup>ラ</sup>”の一人である。

## #14 協力、局員

前回の街中の回収から数日後……なんてことは無く、普通に翌日。原作の時系列的に次は海近くの公園？のような所で木に宿ってしまったジュエルシードの暴走……だったかな？無印は話数順に時系列が並んでいて起きた出来事は憶えているけれどその日付まで憶えているかは別の話。

「今回はどうしましょうかね……アルサナは一回帰って来たけどまたリニスに持たせて帰りましたし、なのはちゃん達がもう既に協力体制に成ってるし、更には見せてもらった記録から見ると限りプレシアさんも脅威度が全くない」

なのはちゃんとフェイトちゃんは既に協力体制であることから、今後の危険性がぐつと少なくなる。無理に海の6つを活性化させるような事もしなくなるだろうし、する必要も無くなる。プレシアさんの態度が既に柔和しているのでアルフが怪我をしてアリス邸で保護される事も無くなるどころかもはやプレシアさんの原因によって原作で生じたフェイトちゃんの怪我やその他被害が一切無くなるだろう……多分だけど。

プレシアさんの変化はともかくとして、この協力体制の原因って私が偶然とはいえリニスを助けた事、そしてフェイトちゃんの下に帰らせたのが原因ですかね。

「結構変わっちゃってますけど、もう、なんででしょう。私のする事無いんじゃないですかね？」

「もしも、何かしらの行動を起こさなければイケなくなるのだとしたら、管理局陣営の過剰介入、もしくはそれに伴ってなのはちやん達が」回収しなくなる事」ぐらいでしょう。

けれど、今までの流れ上ソレは無いだろうと考える。まだあくまで予想の域を出ないがなのはちやん側に「番神悠次」という存在、フェイトちやん側にも「崎神亮夜」という存在、そして誰にも付かないフリーとして「自分」という存在が居る、このジュエルシードの事件で残る陣営は唯一つ「管理局」。テンプレ的な展開としても「アースラ側にも一人」いる可能性が在る。在るには在るのだが

「する事が増えるとしたら、管理局が出張ってくるかどうか次第ですか……でも私の「予想」が正しいなら」なぜ今まで出てくるのに時間がかかったのか」って事ですよねえ」

「そう、もし予想の通りなら」発生する事件が判っていたにも関わらず介入して来るまでが遅すぎる」のだ。いや、今まででもそうだったけど違いが多くして大きくはあるが概ねイベント事に関しては原作通りに進んでいた。ともすれば世界の修正力とも呼べる何かの所為でズレ込んだとかも大いに考えられるし可能性としては十分だ。

「……ま、そこは考えても仕方ないですね。それにしても腕の傷、治りきらなかったけどどう隠そうかなあ」

掌・腕、共に多少なりとも薄く傷痕が残ってしまった。おそらく注視されない限りは特定されることは無いだろうけれども、身バレ要素が増えた事には変わりはない。傷痕をどうにかしようとして少し試行錯誤したことによって回復／治療系魔法の“法則性”もある程度わかったので良しとする。消せる目処が無い事もないし。

「でもあの場で“誰も怪我なし”で終らせてしまつては、事件／事故に関わる時の自分に及ぶ危険性を認識する切っ掛けも無くなりますしねえ」

だからといって自分が怪我を負う必要性は無かつたかもしれないね。でも出来るなら、彼等には必要以上の負傷など負わず、真つ直ぐで素直な主人公ヒーローに成つて欲しい。成つてくれないとおそらく物語に影響して私のやる事が増えるので。

ああでもそうになると、自分のお話を聞いてもらう為にとりあえず力を示して動けなくなつてから交渉するネゴシエイト白い悪魔に成つてしまふ………が、運命さだめだし仕方ない。うん、しようがないつたらしようがない。後々を思い出すに必須フラグだろうし。

「とりあえず、今度こそ見物だけに止めますか。サーチャー飛ばして映像確認だけでも良いですけど、管理局が出てくる場面に差し掛かつて以上、逆探知とかされたら困りますし」

「アースラのセンサーは設備が整っているとあります……し？ あれ？ そういえばA's編ではやてちゃんの家が特定されませんでしたよね？ いや、あれはヴォルケンスの誰かの境界が素晴らしい性能なのかリーゼ姉妹が細工してたのだろう。アースラにハッキングしてみたみたいだし。多分おそらくめいびー。」

「そういえばプレシアさんの罪科ってどうなるんだろう……ジュエルシードのバラ撒かれには関わって居ないようですけど、プロジェクトFは行っていた訳ですし……その資料や反応結果や技術の提供とかで交渉に持ち込んだりするのか？」

原作だとフェイトちゃん自身は、気持ちを利用していたとか何とか色々誤魔化したんでしたっけ。今回、形はどうあれジュエルシード回収の為に協力していたりで、その辺りを押し通せば行けないかな。

「……それも追々考えますか。管理局陣営のズレが”どの方向に、どれだけ”かも確認してからという事で」

プレシアさんのズレはどちらかといえば物語の結末的には原作以上のGood EN D方向だったから良いものの、全てがいい方向に傾くだけとは限らない。その証拠にジュエルシードが反応起動した時の暴走具合は予想以上で在る事に加え、まだ一例しか見れてないけれど他の世界の影響も出てきてはいるので、意思を持たない物ではあるがジュエルシードを“敵勢力”と定義したらむしろ解決の為の難易度は上がっている感

じがしている。

「とりあえず、原作描写的にはお昼過ぎ？夕方？……反応出てからでいいかな。それまで今後の準備でもしておこう」

彼らが“ちゃんと回収してれば”だが、前戦闘のような形で武器も放置する形で渡して色んな意味でSttS編に向けて準備を整えて行きたいと考えている。ソレを行うと最終的に自らが大幅変更の基点に成ってしまうがSttS編は負傷者や被害が多すぎるのでどうにかしたい、むしろ六課の被害が減ればそれでいい。

SttS編に突入するま、というよりA's編では昨日とは違い怪我を負ってもらう事も、心苦しいですが少しばかりは致し方ないと思う。

“其処に至る為のフラグ”であるのならば……ま、まあ“怪我の度合い”は軽減させても大丈夫だよな？ 現状から考えるに“あの撃墜イベント”も確実にパワーのインフレで撃墜だけで済む気がしない。その辺りの対策は闇の書事件の結果次第ですね。最終章入ったら、もう自由にしてもいいよね。え？ Victim or Force の後に影響？私その話よく知らないもん、私になる前でさえ完結して無かったですし範疇外ですよ。

「時間がある限り、適当な便利アイテム作るぞーっと」

原作でも『凍結』の変換属性つて余り無かった気がするし、適性が無くてもデバイス自体が変換する凍結出力専用の物でも作ってみようかな？ “蒼き運命の物語”のユ

キアネサとか“素敵<sup>ソト</sup>ポエム<sup>ポ</sup>集<sup>チ</sup>”の氷輪丸とか良さそうですね、後者の作品の刀ってまあ見方によってはインテリジェントデバイスっていつても過言ではないだろうし、その“要素”とか無くても出来そうだよね！ 本当に作れるかどうかは別として、レッツチャレーンジ。

こうして無駄に時間は流れていく……

□~~~~~□

「えっと、この辺りかな？」

「また、何も無いように見えるけど、反応があつたのはこの辺りなんだよね、なのは」

海辺近くの公園。少し急ぎ足で現れたのは、なのはとその肩にのつたユーノだ。

「うん、そのはずだよ。フェイトちゃん達もこの辺りから反応を見つけたって言ってたし」

あれからなのはとフェイト達は話し合い、“自分達の他にもジュエルシードに関わっている人が居る”という事を考え連絡を取り完全な協力体制を取っていた。

「私達が5こ、フェイトちゃん達が2つ、そして昨日の人が1つかあ……ユーノ君、全部

で何個あるんだっけ？」

「全部で21個だね。なのは達のお陰でもう既に7個集まってるし、昨日一つ回収でき無かったけど、今日回収できれば残りは12個かな」

「まだ半分も集まってるんだね、21個って少ないようで多いなあ」

なのは達からすればまだ半分も集まっていないジュエルシード。協力者が増えたとしても互いのペースを省みても決して速いペースではない、更に他の回収者も出てきてしまった以上、これからも回収の上で衝突するかもしれない、そんな不安も抱えていた。「また、あの人が出てきたりするのかな？」

「わからないけど、用心した方が良いと思うよ」

「そうだよね、早くフェイトちゃん達と会って一緒に探さないと」

暫く歩き、時計塔の様なモニュメントが建つ開けた場所に行くと、合流予定だった人物たちは既にそこに居た。というより二人は何故か斬り合っていた。

「あれ？ もうみんな来てたの？ というより悠次君達はなにしてるの？」

「あつ、ナノハ。リョウヤ達？ 昨日の事があつてからちよつとでも対応力を付けるって『なののが来るまで模擬戦だ』って始めたんだ」

「ふーん？ よくわからないけど、二人がいいならそれでいいかも」

そんな光景を眺めながらなのはとフェイトは先日の事を思い返す。あの時自分たち



が飛ばされた後にジュエルシードが爆ぜた光景を見て、なのはとフェイトは『よくわからないけど、もしかしたら私たちは助けられたのかも』程度には感じていた。実際やられた衝撃は有ったが痛みは無く外傷も全くなかった。しかしそんな二人とは違い、男衆二人に取ってみれば“流れを知っている”というものが在り、そこに『原作には居なかった外敵』が現れたと考えていた、勿論それはその二人以外は誰も知らないのだが。「まああの二人はあのまま暫く気の済むまでやらせてあげましょう。どんなものであれ、経験は不測の事態に対応する為の糧となりますし。それでですが、フェイト達にはもう説明しましたけど、なのは・ユーノにも伝えますね。申し訳ありません、あの後追ってはみたのですが逃げた人物を見失ってしまいました」

そう切り出し謝罪するリニス。実際は追いついたしむしろ色々してきた後だがその事は何も伝えず、ただ“見失った”とした。だがそれだけでは翌日までかかった説得力に欠けるので

「ですが、手掛かりになるかはこんなものは拾いましたよ。一応、魔力残滓がありましたので周辺地域を広く探ってみました……駄目でしたね」

リニスを取り出したのは件の人物が身に纏っていたボロマントと仮面。手掛りは有ったが、ソレが結果に繋がらなかった。一夜探したのはソレが理由であったと付け加えた。

「そうですか……お疲れ様です、リニスさん！」

「いえ、成果は残せてませんので……それよりも、彼らは放つて置いていいのですか？  
なにやら模擬戦に止まらず、木の化け物みたいなのと戦ってますが、地球にはあのようなモノまで居るのですね」

「え？……ち、ちがいます！ 日本にあんなもの居ません！」

「リニスさん！ アレはジュエルシードがこの地の何かを媒体に発動した時にああいった形で暴走したりするんですよ！ なのは、直ぐに封印しよう」

「うん、わかった」

説明などを行っている内に、どうやら集まった後に搜索しようとしていたジュエルシードが暴走を始め、元々離れて遊模擬戦をしてんでいた男子二人が抑えに向かったようだった。

「フェイト、アルフ、手伝ってきてあげてください」

「え？ うん、元からそのつもりだよ、行くよ、アルフ」

「あいよー」

なのはの前に出て中距離からどちらも援護できるように出る二人。どうやらなのはに封印を任せて前衛二人の取りこぼしがなには行かないようにするつもりようだ。

「……彼は此処ユルが魔法文化の無い世界だという事を理解しているのでしょうかね？ 突発的な事とはいえ結界の展開も人払いもせずに事に当たって、もしあの子達の知り合い

に見られたらどうすんですか」

文句を言いつつも、結果を展開していくリニス。人払い自体はリニス達が先に到着した時点で済ませていた。何だかんだ言いつつも一番の年長者であるリニスは保護者的立ち位置が定着しつつあった。

そんなこんなで無事封印を終えたなのは達。

「なんかあつけなかつたな」

「勢い良く突っ込んで行った割にお前の双剣殆ど当たってなかつたけどな」

「うっせえ、片方全く形が違うからまだ慣れねえんだよ。それにお前だつてアルフやフエイトの援護が無かつたら怪我してたじゃねえか」

封印自体は前衛二人、中衛二人がいなししている間になのはがさつきと封印を行つてあっさりと終了した。したのだがなになが気に入らなかつたのか前衛二人が互いの至らなかつた所を指摘し貶し合つていた。

回収したジュエルシードについては今回はフエイト側で預かるように決まつた。つというのも、なのはとフエイトが互いに譲り合うように問答している所にユーノとり

ニスが「昨日の時のように正体不明の第3者が襲ってきて奪われる可能性も有り得るからなるべく一箇所にかためず分散して所持しておいたほうがいい」と言った為である。

そうして回収も終わり、皆一様に帰ろうかとした所で

「少し、いいだろうか？」

全身黒ずくめの若干ぶかぶかに見えなくも無いコートのようなものを纏った少年が現れた。

「僕はクロノ・ハラオウン。時空管理局の執務官だ、君達が今手にしているものはロストアロギアと言ってとても危険なモノなんだ。速やかに渡してもらえるとありがたい、アダア！」

クロノと名乗った少年が喋っていると、また別の少年が現れて喋りを遮り頭を叩いていた。

「な、何するんだ、ロディール！」

「なにすんだ」じゃないだろ、クロノ執務官。此処は「管理外世界」だって事、聞いて無かったのかよ。彼女達は確かに魔法を使っていたが、現地協力者の可能性が高いのは説明しただろう。そんな人たちが「時空管理局」なんて知ってるわけ無いだろう」

後から現れた少年も先に現れた少年と似通った衣装をしていた。なのはやフェイトは呆然とその様子を眺める。アルフやユーノ、リニスは少し警戒する様子で、悠次と亮

夜は“漸くか”といった感じだが予期せぬ事でもあったのか驚いている。

「ああ、自己紹介が遅れたね、俺はロディルⅡAⅡトレディオ。君たちに何の説明もなく少々高圧的な態度でいきなり現れたコイツ、クロノの補佐、まあ助手みたいなもんだ」

クロノと呼ばれた少年の頭を叩いて話に割り込んできた少年はロディルと名乗り説明を続ける。

「それで俺達なんだが……どう説明すればいいものか、君達が先ほど回収した様なものを捜索・管理している警察みたいなモノって所かな。そつちのフェレット君ならわかってくれるよな」

「あつ、ハイ、大丈夫です。もしかして僕の要請を受けて？」

「いや、ソレは……」

ロディルと名乗った少年が少し申し訳無さそうに頭を搔いて目を逸らす。どうしたものかとロディルが考えているとクロノと呼ばれた少年が口を開いた。

「ソレについては僕から説明しよう。どうやら君の要請は此方までは届いていなかったようだ。だが、ロディルが細かい所まで見ていて気が付いていたみたいでな、少し気に掛けて此方まで巡航してきたらこの管理外世界からあるはずの無い魔力反応を捉えたのでこうして訪れたというわけだ。それと此方からも一応通信はしていたんだが、相互に届いていなかったようだ」

「まあ、なんだ、その辺りについても説明をしたいし、君たちが集めているロストログアの事も知りたいんだ。申し訳ないが僕達に同行してくれないかな？」

クロノとロディルはそういつて彼女達に同行を求めた。

□~~~~~□

どうやら武器は拾っていてくれたみたいだ、安心安心。でもなんで片方だけで使ってるんだろうか？確かにアレは片方だけなんだけどクロスミラージュが待機状態のカード型から双銃になるように、デバイスと同じ感じで展開しようとすればちゃんと二本になるんですけどね、もうちよつと試行錯誤してくれないものですかね、転生者であるなら頑張つて欲しい物です。悠次君の武器は後々考えます、刀剣つて色々ありすぎてしつくりきそうなのが思いつかないんですよ。

そして彼はロディル君ですか……なんでしょう、とても見た事が有るような容姿ですね。それこそ今は執務官補佐服というか管理局服なので青いですがアレが赤かったら天使を父親に持つ響きあう物語の主人公みたいですわね！ 多分そうなんですわね。

これで彼の出身世界がミッドではなくどこかの管理世界でシルヴァラントとか言われた日には笑うしかないですね。あつてもミッドにも召喚魔法在るぐらいだし、系統的

には” テイルズシリーズ する物語が世界に混入存在してもさほど影響無さそうですね。

それに彼は言ってる事が外見から察する年齢以上にしっかりしてますし、もしかなくとも管理局側の” イレギュラー 転生者” って所でしようか？ そうなると地球以外にも居てしまうのですかね……

「彼らが話し合ってる内にもう帰るとしますか。原作通りになのはちゃんとフェイトちゃんが敵対したままだったらどさくさに紛れてアレも回収出来たんですけど、もうコレ以降は原作で描写の無かったモノを探すしか無さそうですね」

もうこれ以上の争いは起こらず、本来ならP・プレシアテスタタロツサT 事件に成る筈でしたがJS……だとStS編の事件と一緒にですね？ まあ略さずに”ジュエルシード遺失事件”みたいな感じに成るんですかね？

「なににせよ、管理局にもまともそうな人が居て……っていうかあの人は違うか。まあ イレギュラー 転生者であるならば、危惧したような”今後なのはちゃん達が関わらない”方向には行かないでしょう。コレにて無印編は危なげない回収を残して無事完結！ でいいんですかね？」

何か忘れてる気がするんですけどよね。なんででしょう？

・プレシアさん対策↓必要が無い。

・残りのジュエルシード回収↓現在私が3つ、なのはちゃんが5つ、フェイトちゃん

がさっきので3つ。原作通りなら海に6個と何処かに4つ？なのでその4つを先に回収すればいいので目標数には達する筈。

・管理局との接触↓ロディルと名乗る彼がおそらく転生者でまともな思考の持ち主なので必要なさそうですし、接触するにしても協力体制である以上、アルサナ持ったりニスが接触しますので予定とは違いますが結果オーライ。

よし、無印編の出来事は大丈夫ですね。A、S編まで適当に過ぎましよう。さて、帰りましようかね



「……誰も居ないな。確かにこの辺りからほんの僅かだが魔力反応、そして視線を感じたのだが。気のせいか？」

……どうやら局側というのも在って優秀っぽい？ですね、ロディル君。嫌な予感がしてとつさに偽・顔ダミー・フェイス・メイキングのない王羽織って無ければアウトだった。まだバレる訳にはいかないですよ、ではサラバダー!!

## #15 宝種、搜索

前回の海辺公園の回収から数日………も経ってないです。

なのでまだ休日、原作通りなら残り海の6つ以外の何処かに4つ在る筈のジュエルシードを搜索するため先日手に入れた街中の1個も解析してデータを組み込んだレーダーっを使い反応を追って散策しています。

「えーつと、この辺りに反応が………ってまたこの神社？ 呪われてるんですか、此処」

此処ってあの犬を媒介にして発動体に変な犬になった所ですよ。搜索する側としては反応が有るのが近隣でよかったですけども、アレですか？ 呪われてるのはこの街自体ですね。流石物語の主人公達が居る街トラブルには事欠かないですね。

「長々と搜索して見つかるのも御免ですし、さっさと探して他のモノも探しに行くと思いますか。恐らく原作組も別れて探索してたりするんでしょうし、リニスが来るなら良いですけど他の人だとダメですからね」

ロディル君の影響所為でなのはちゃん達がちゃんとアースラまで行ってアースラと協力したかどうかも判ってないですし、向こう側の現状が判らない以上アルサナを呼び戻して不測の事態への備えを減らすわけには行かない。プレシアさんがまともなので大丈

夫だとは思うけれど悠次君や亮夜君がもう少し頑張ってくれてるならこのような不安を抱える必要も無いのだが。ソレに加えロディル君という存在が明らかになり“地球以外のへ転生者”の存在が浮上、もはやどこまで準備や警戒を高めても安心できる要素などありはしないだろうと考える。

「気になる存在は、既に“J”と呼ばれる者の傍に居ると思われる“I”という存在ですか……誰なんですかねえ。推理小説とかだと事前定義として“犯人は人物像を明確に登場させておかなければならない”って有った気がしますますが此処は現実ですからねえ、そんなもの当てはまるわけ無いですしミッドに行つて探索とか出来ないからどうしようもないかなあ」

不安要素第一位は“J”（おそらくはスカリエツテイ）に組する謎の存在“I”。原作にはそんな奴居なかったはず、この人物が単なる“この世界の異分子”<sup>イレギュラー</sup>ならいいのだ、そこから生み出されるのはあくまでこの基準世界の技術でしかない、それであればどれだけ素晴らしい技術運用になろうともまだ“その程度”として済みますことが出来る。

だがもしも、その人物が“この世界への転生者”<sup>イレギュラー</sup>であった場合、対処のしようがわからさまに変わる。ソレこそ許されるものでは無いけれど人類そのものに対する何かであればまだ優しいほうだ。考えたくも無いのは使われる技術の作品次第では“世界そ

のもの”がどう成りかねない。幸い、この世界は“リリカルなのは”がベースであり、“リリカルなのは”な世界である為、“次元”の概念が確立されている。次元航行艦が通る為の次元間空間もあるし虚数空間もある。最悪の場合は其方への逃げる様の穴あけも可能にしておかなければいけないだろう。

「まっ、今（無印編で）考えてどう成る問題じゃないか。それにしても一回発動した残留魔力が有るのか反応が定まらないなあ」

今後の対策は今後取ればいいと結論を出し、絶賛神社周りの森で散策中。一向に見つかる気配が無い。反応が全くなくなる瞬間もある。休憩を挟んで気を入れ直したほうがいいかもしれないかな。

「ふう……結構広めですね、この神社の敷地。なにか手掛りは……ん、狐？　こんな所に？」

入り口のほうまで戻り、木陰で休もうとし腰を下ろした所で見たことも無い狐が姿を現した。へえ、狐とか居たんですねこの街。アニメが元となつて居るからか結構自由ですね。

「可愛い……おいでー」

手招きしたらコツチに寄ってきてくれた。手を伸ばして撫でる、うむ、可愛い、モフイ。こればかりはこの世界に転生して良かった事かも知れない。こういう風にどう

どうと可愛いと言ったり動物をモフれるのは※ただイケ。か女の子の特権ですよ、絵にもなるし。あつてもポ○モンの世界とかだったら普通ですよ、あの世界に行つたほうが争い事も少なく……無いですね、アッチの方がむしろ多いですね、天変地異も。

「和む……ジュエルード搜索とかもうどうでもいいかも」

予定してゐる必要数には足りないけど見つからないし。ああ……使い魔契約の魔法でも今度リニスに教えてもらおう、研究しておいて損は無いですよ。

——現実逃避はコレぐらいにしてもうちよつと探してなかつたら別の所探しに行きますか。最悪海にある奴回収すればいいかな。

「……こんな所に居るぐらいいだしなにか特殊な狐だったり？ 私こんなの探してるんだけど、何処かで見たことない？」

共鳴したりしたら危ないかな？ と思いつつ若干以上危険な賭けである気がしないでもないが可能性が無いよりはマシと考へて持つてきてたジュエルシードを一つ取り出して狐に見せてみる。

なーんて、狐が人の言葉判るわけ無いか。その証拠に手に持つたジュエルシード（完全封印済み反応が漏れる事は無い恐らく）を視て首を傾げたら何処かに去つて行つた。むう、行つてしまった。また此処にきたときにモフろうその時は何か食べ物を持つて

きて仲良くなるう。そういうえばペルソナ4にも御狐様いた気がしますね。

「丁度神社に居る事ですし、願掛けでもしておきますか。神様の存在は……知ってるけど、こんな形さまにしてくれやがりましたアイツを思い浮かべるのは些か以上に思う所がある……けれどもまあ第2の生をくれたのも事実、感謝だけはしておきますよ。原因は明確には教えてくれなかつたけど」

現状に不満があるわけではないが、やつぱり他の転生者の面々が軒並み男性である時点で思うモノが無いわけではない。彼らを転生させたのが私を転生させた奴と同一であるかは判る筈も無いのだから奴に当たるのも見当違いだ。

そんなことを考えながらお金を賽銭箱に放り投げる——と、投げた所で先ほどの狐に空中でキャッチされる。え、何が起きたの？　そして私は願掛けも許されないの？　狐さんそれどうするつもりですか、食べ物欲しいなら買ってきますから！　願掛けぐらいさせてよ！

心の中で喚いていたら、ふと狐さんが口に賽銭啜えたまま賽銭箱を覗き込みテシテシと叩く。なに、その中見ればいいの？

「ん？　何かあるの？　……へー、中が見えない様に傾斜が二つあるタイプじゃなくて中身が丸見えのタイプなん……だ……？？」

狐さんに促されるままに中を覗く、硬貨ばかりかとおもいきやお札もちらほらと見え

るので結構参拝者が居るらしい。でもそんな事はどうでもいい、問題はその中に見覚えのある菱形の青色に微発光している物体が見える事。間違いなくジュエルシードですね、本当にありがた——ってトリップしている場合じゃない。

狐さんはどうやら私の言葉を理解してここにある事を思い出し、賽銭を入れようとした所を遮って、普通だったら中を覗く事なんてまず無いからわざわざ教えてくれたんですかね。素晴らしく賢い狐だこと、しかしまあこういう世界の狐だしさもありなんって所でしょうか。

さて、問題は見つけたのは良いけれどコレを“どう処理すべきか”と言った所でしよいか。単純に考えれば回収して終わりですけど、その場所が問題ですよね、賽銭箱の中ですよ。

Q 1. 開けて回収する？

A 1. 誰かに見られたら賽銭泥棒と間違われます、子供だからいたずらしてると思われるかも知んですがこの年で前科者になりたくないです。

Q 2. 原作組の誰かが回収するまでこれは放置。

A 2. もしその前に誰かが来て、たまたま願いを呟いた時に反応する可能性が無いわけではない。

Q 3. 魔力糸で釣り上げる。

A3. 最初の問題とさして変わらないし、多分魔力反応が出てしまう。そもそもとして“格子蓋部分から入らない筈の大きさ”なのに入ってる時点で謎であり、当然入らない大きさという事はそこから出せる訳がない。

ふむ……詰みですね。結界を発動して速やかに回収する？ 問題しかない、アースラ組が登場してきた時点で魔法発動は極力避けたい。結界の様な大規模魔法なんて論外だ。封印行為自体は「偽・顔のない王」を全身を覆うように羽織ってしまったその中で行えば封印時の魔力波が漏れないのは確認済みだ、アルサナ無いから完全封印自体が出来ないけど。そうなると、コレを回収するべきはリニスに任せますか、まだあと3つ（多分）在るんだしそれらを入れて合計6つも在れば事足りるでしょう。そうと決まればリニスにこの場所を念話か通信で送って単独行動してもらい、回収した後に渡して貰えるタイミングがあれば私の下に渡して貰えれば更に＋1出来るわけで

「此処が初めてキーワード無しでレイジングハートを起動させた話の時の神社か、なん



の変哲もないが風情があるな」

そんな台詞を言いながら階段を上がってきて鳥居を潜ってきたロディール君。

——ナゼ、ピンポイントデ、ココニクルンデスカ。

そりや確かに貴方は他の方々とは違つて何故か地球に居ませんでしたが、でもそんな聖地巡り感覚で何してるんですか、探索は？ ジュエルシードの探索とかはどうなったの!? いやいやいや冷静になろうまだ私はバレたわけじゃない、うんちよつと前は凄く危なかつたけど大丈夫だ。彼は聖地巡礼に來ただけで此処のジュエルシードにはまだ気がついていないのだろうそうであつて欲しい。そしてあの場に残つてた何かしらで嗅ぎつけた訳でもないでしょう。ないよね？ とりあえずこの場から去ろうさうしよう。ゴメンね狐さん教えてくれたけどちよつとどうしようもなさそうです。今度お礼に來るから。

「ん？ しまったな、人が居たのか」

きやー、気付かれた。完全に気配を殺して去ろうとしていたのに。こうなつては仕方ない。

「聞こえていたのなら気にしないでくれ、独り言だ」

「なにか言つてたの？」

「あーいや、うん、忘れて」

「そうなの？」

今だけで良い、うなって私の（有るかわからない）演技力！

なのはちゃん達、この世界の元々から居る人たちならともかく転生者組相手に普段の言葉使いや態度だと怪しまれる可能性が出てしまう。それだけは避けたいですからね、フラグは押し折るものです。建ちそうな穴があるなら先に埋めてしまえばいいのです。先入観という力で。

「……、なにもない神社だよ？ 何しに来たの？」

「え？……と、友達に薦められてね」

「ふーん？」

「ハ、ハハハ……」

ロディル君、結構頑張ってくれそうだと思っただけど咄嗟の応用力が少し足り無さそうですね。まあA、S編には間に合わないですけど、StS編に間に合ってくればソレでいいかな。

とりあえず局側の人ですし、功績を少しでも稼いで貰いましょうか。クロノ君もStS時で提督？でしたっけ、に成ってますしこの時期の部下でしたら相当上まで行けるでしょう。

「あつ、でも一つ面白いものあるよ」

「さつき何も無いって言わなかったか？ いや、有るなら教えて欲しいな、なにがあるんだ？」

「うん、お賽銭箱の中にね、青色に光る石みたいなのが入ってた。お賽銭箱ってお金を入れるものなのにね」

「なっ!？」

私の言葉を聞いて賽銭箱まで駆けていくロディル君、狐さんとはいえばいつの間にか居なくなっていた。ロディル君そのジュエルシードは仕方ないから君の功績にするがいいー。

彼の武器は原作通りに為るよう、そうっつい 双対いったい 一体となる双剣でも作りますかー。右手が氷剣で左手が炎剣だっけ？ まあどっちでもいっつか、それっぽければ。前も同じ捨て台詞残した気がします、ではサラバダー！

……此処で持ち帰ってくればロディル君はもうアースラ待機になりませんかね？

□~~~~~□

「まさか、舞台となった所巡ってたらジュエルシード見つけてしまうとはな」

それにしても、いくら転生先をミッドにしていたからとはいえ、ズレと修正力はどっちが勝っているのかわからないな。ユーノのジュエルシード移送中の紛失についても何とかしようとしても出来なかったし、もしそうなっても原作の時点より最初のほうに訪れる心算つもりだったが、なぜか原作と同じタイミングになっちゃってしまっていた。

だというのに、原作に居ない人物が二人も増え、リニスまで生きている。それに既に協力関係にあるという点もかなりのズレと見ていいだろう。この原作に居ない男二人に関して俺と一緒に転生者だと考えるべきか。今度話し合っておかないとな。

なのはの置かれている環境や魔法に携わった経緯は原作と相違ない様子だったし、フェイト側の話を聞いた限りではプレシア自体の影響力もほぼ無いようだし、しかも善い方にズレている為問題は無いだろう。

しかし、この物語の終着点を読めないな。原作ではプレシアがジュエルシードを暴走させ虚数空間へと落ちていったが、この世界ではそうならないだろう。プロジェクトFを行っていたという経歴はどうしても残ってしまうが、コチラの裁量でどうか恩赦に持つていく事は出来るだろう。その為にわざわざミッドに生まれ管理局に入ったのだ。最もソレだけが理由の全てではない。最初から最後まで関わるならミッドの局勤めという設定の方が居易いし、何よりも地球に居てはほぼ救えない存在であるティアナの兄であるティーダさんやクイントさんを助ける事が出来るかも知れないというのもある

からだ。クロノの父親に関しては判っていない。原作通りなら既に手遅れかも知れないな。

「よし、ジュエルシード一つ回収完了つと。あと幾つ有るんだろうな」

気になるといえば、局員である立場を利用して無限書庫などで調べたがどうにも“夜天の書”に関する資料が軒並み探せなかった事も気になる。ただ単に無限書庫の未開拓地に眠っているとい可能性も否めないが、原作ではグレアムさんが資料を集めその未には、はやてごと凍結封印させようとした事から資料が無い筈は無いのに見つからなかった。グレアムさんが回収してしまったのだろうか？ それもこのジュエルシード事件が終ってから本格的に調べよう。決戦は原作通りであれば12月だ、まだ半年以上もあるのだ。焦る事は無い筈だ。

「こんな所で俺が見つけてしまうとはな。コレを教えてくれたあの子には事情は言えないが感謝を……つてもう居ないし」

しかし何処かで視た事が在る気がする子だったな。何処だったか？ コツチには来たばかりだから多分ミッドだと思うんだが、そんな訳はないな。この物語が始まるまで、地球とミッドの繋がりにあるのは明確な描写は無かったがグレアムさんだけだった筈だし。あの二人も使っているのは魔法ではないようだったしな。その辺りは考えても仕方ないし、クロノに連絡を入れてジュエルシードを持って帰るか。他の舞台となつ

た場所は後日また巡ろう。

「……ああクロノ執務官。コチラ、ロデイル。現地にて捜索中にロストログニア・ジュエルシードの一つを発見した。一度アースラまで戻る……了解、出来ればユーノ辺りを呼び戻しておいてくれ、残りの個数や各自で持ち合わせているナンバーの照らし合わせをして置きたい」

局の何処かで会ったような気がするんだがな。もしくはお世話になったあの人たちに似てたからそう感じたのかな。まあ確かに、さつきの子はこアニメが元になったの世界にしては珍しく黒色の綺麗な髪で可愛い子だったし少し見惚れてしまったから印象に残ったのかな。

「ん？　なんででしょうか？　妙な寒気が……気のせいですかね？　翠屋でシユーを買ってエネルギー補給したらもうヒト探索と行きますか。まだ時間ありますし」

どつかで妙なフラグでも建ちましたか？——まさかね。しかし、無印編でしかほぼ使えないけど、やつぱり封印用のデバイスも作ろうかなあ、作っておいたらStS編までのあいだ期間でユーノ君経由でスクライア一族と渡りを付けて辺境世界で発掘作業とか楽しそうですよねえ。

## #16 宝種、探索

前回より更に数日……も経つわけじゃないですか、普通に休日明けの平日ですよ。

アレから数日してアルサナを通して大まかな流れの説明の為の連絡があったのだが、どうやらアースラ組が主となる形をとって全員でジュエルシードを搜索する事となったようだ。原作通りユーノ君が人型に成つて驚かれたり、リンディさんの和?に対する感性が微妙だったり、展開自体はそのまんまだった様子。

その際にプレシアさんの事。『J』や『I』といった存在。などにも触れたようだが“目先の危険であるジュエルシードを回収して事が片付いてから対処をする”という事になつたらしい。

気がかりだったのはリニスの気持ちなのだが、プレシアさんの事もあり断るんじゃないかな? って思つたけど断らずに協力しているらしい。杞憂だったみたですな。

そしてそれならば、なのはちゃん達は原作みたいに学校休まずに済むんじゃない? と思つたけど、どうもそうはならなかった様で……



「高町は家族から連絡があつて暫く学校を休むとの事だ、どうも家族の間で片付けねば為らん事があるらしい。ああだが心配はするな、親戚の訃報だとかいう事では無いらしいからな」

「せんせー、じゃあ悠次や亮夜はー？」

「他二人については知らん、連絡も無いからな。だが、奴らも子供だとはいえ男だ、学校より優先すべきモノに出会つちまつたんだらう……」

それだけ言つて窓の外を遠い目をして眺める担任の先生。前から思つてましたけど原作の担任の人つて女性じゃなかったでしたっけ？ まあこれくらいは気にする程のものじゃないかな。

「せんせ、その年でまだ電波受信してるんですかー？」

「いい加減なおせよー」

「うっさいわ！ 男はいつまでも遊び心と共に生きる生き物なんだよ！ それにまだ20前半じゃ!!」

外面も繕つくろわずムキになつて子供と言ひ争う担任先生……こういうのが俗に言う“良い先生”なんでしょうね。

それにしても二人はともかくなのはちゃんまで休みましたか、原作からかなり変わつてしまつて結構平和な物語に成つて仕舞つているのに何故原作に沿う形に成つてるん

でしょう？ まあその方が私としては安心できますけどね。

しかしそうなってくると、ジユエルシード捜索人員は数多く且つ戦力も大きいという感じになってしまってるんですかね。原作で描写は無かったです。流石に他の艦員が捜索を全く手伝わなかった、なんて事は普通に考えたら有り得ませんし。

その辺りを考慮するとこの街周辺を主役陣が、その他周辺の郊外などをクロノ君やロディル君以外の局員が赴いたり、アースラの設備でサーチしたりといった感じでしょうか。そうなると主要人との遭遇リスクを減らす為に郊外に出たりする方が捕捉されてしまう可能性が高くなりそうですね。

ならば、まだ暫くは海鳴市を中心に探しましょう、学校が終わり次第探索開始だ！

「アンタの言ったとおり、なのはに暫く会えなくなっただわね……なんか知ってんだった

ら白状しなさいよ！」

つとはスムーズに行かず、只今絶賛アリサちゃんから詰問オハナシ受けてます。きゃーこわい……なんて言ってる場合ではない気はする。

「直接本人に連絡してくださいよー私は知りませんってばー」

嘘は言っていないよ、嘘は。詳細までは<sup>魔</sup>知らないので。それに原作の流れ的にアリサちゃんとすずかちゃんがこの事を知るの確か……12月？だった筈ですしそれまでに知つてると多分干渉するでしょう？貴女達の行動力なら。そんな事はさせません、私の安寧の為に！ 分岐要素は少ないに越した事はないですよ。

それよりもですね、既に学校終了しましたんで解放してくれませんか？こつちもこつちでのつびきならない事情（残り3つ程の行方不明ジュエルシードの探索）があるんですけど。

「だ・か・ら！ 私達から連絡しても連絡が付かないからアンタに聞いてんでしょーが！」

ツバーン！つと壁に迫いやられて顔の横に手を付けられる。

こ、これがかの有名な(?)壁ドンですか。本来の意味を知ってるので前世ですら、する側になる事も無かったけれど、まさか果てにされる側になるうとは。

それにしてもこれ、現在の私の体格なりの所為でそれなりの感じになっちゃってますよ

……存外ドキドキしますね。耳の横で大音が鳴るといふ事と迫られているといふ圧迫感で！

しかし、やはりあの告白アドバイスは余計でしたか、これはもう浅はかな行動をした自業自得の結果ですね。どうかあの後連絡しなかつたんですか？

既に違う結末が訪れそうなら変わつて来て見通しが立たなくなつてるので、例え表立つては本編に関わつて来ないアリサちゃんやすずかちゃんに対してでもこれ以上の過干渉はしたくないんですよねえ、どうしましょう。個人的な感覚で言えば“教えちゃつてもいいさ”と考えるが、この世界がリリカルでなのはな物語で流れという“運命”があると大局的に見てみると此処で教えると力のない一般人が友人を想い首を突つ込んで行くという、もうデスフラグ以外の何物でもないモノが建設される気がしてやまない。無印編はもう大丈夫っぽいですけど、これから始まるであろうA's編は危険性が未知数ですし。

どうしたものか、と考へつつ“そういえばストッパー役のすずかちゃんが居た！”とアリサちゃんの後ろに居るすずかちゃんをチラツと見ると、にこやかに笑つていた。「今回は逃がしませんよ？」と言わんばかりの笑顔で。あつ、これもう駄目ですね。仕方ないか。

「もう……ホントに知らないんですつてば。つて言つても納得してくれないですよね、

バニングスさんも月村さんも。じゃあ、ハイ、コレ」

そう言つて私はすかちゃんに向けてアンテナの様なモノが付いた小さな機械を投げ渡す。

「うわつと、神在さんこれは？」

「私自身、ちよつと前にああは言いましたけど高町さんの“現状”は本当に何も知りません。ですが、それでは言つた言葉に対して無責任過ぎますのでソレをさしあげます。ソレを携帯の充電口に挿して連絡してみてください、繋がる筈です」

「なんかよくわかんないけど、こんな持つてるのに何でアンタは何も知らないのよ」  
「だつて私、高町さん個人に繋がる連絡先知りませんし」

なのはちゃんの携帯の連絡先知らないのは本当だししようがないよね、ソレを用いた接続先は携帯じゃなくてレイジングハートさんだけでも。え？いつレイジングハートのコードを知つたかつて？アースラ組と協力することに成つた際リニス聞いてたみたいですよ、つまりはアルサナも知ってるんです。そしてアルサナからの連絡時に情報の一つとして有つたのですよ。勝手にソレを他者に伝えていいのか？この二人なら大丈夫でしょうし、コラテラルコラテラル。

手渡されたすかちゃんの元にアリサちゃんも寄つて行きモノをまじまじと見てい  
る、よし私は今自由になった。

「それじゃあ私はもう帰りますね」

「あつ、ちよつと待ち——」

「ませんよ。今、この場で二人は半信半疑であろうとも”それを使って高町さんと連絡を取る”という用事が生まれたように、私もやる事があつて暇ではないので……あ、それ私から貰つたというのは”一応”内緒でお願ひします」

さあ逃げよう。これでバレル可能性は増えてしまつたけれど、発端は自分の所為ですし仕方ない。今度から余計な事はしないように心がけよう。でも追求されたら全力で誤魔化しますけど。

□~~~~~□

「今日新しく反応を捉えたのは神社の件が在つた山の奥の何処か……原作に描写の無い場所に行くのは少し怖いですね、対処法がその場で生み出さないといけないですし。それにしても海の反応は相変わらず残つてるけど反応の仕方からして”複数ある”のは判るけど個数は不明ですね。原作通り6つなら良し。変わつていても増えるなら別に構いませんが減つてるとなると他の場所での事件が起こる事になるから勘弁

して欲しいですね」

今までがそうだったように、ジュエルシードの発生だけは原作通りになりそうな予感  
がしてますがどうもそれ以外の事柄が平和的プラスな方向に傾きすぎて不安がありますね。  
良い事が起こっているという事は悪い事が起こっていた、若しくはコレから起こると考  
えたほうがいいですから。

「フェイトちゃん達はなのはちゃん達（+管理局）と協力する方向のようですが、そう  
なるとジュエルシードは管理局預かりとなり、使おうと思っても使えない状態になると思  
うんですがその辺りフェイトちゃんは考えてるんですかね？ 原作通りの管理局だっ  
た場合恐らくはそんな融通は利きませんからね」

クロノ君は第一印象を遠めに見た限りその態度というか纏っていた雰囲気と原作と  
の差異は無さそうだった。第一声から管理局の統制こそ絶対正義とでも言いかねない  
様な感じが少なからず在ったしやはりまだ周りを見れていない様子が見て取れた。い  
くら魔法を使っていた相手だからと言っても魔法文化の無い世界に居る時点で、ソレを  
使って何かする無法者か、たまたま魔法に関わってしまった無知者のどちらかしかない  
と思うんですよ。前者であれば真正面から向かっていくには正々堂々とし過ぎてい  
るし、後者であるならば高圧的な態度で挑まれた方は混乱するだけである。

しかし、その辺りはロデイル君とやらが居てくれるおかげで改善されそうではありま

すね。彼は恐らくまともな思考の持ち主が転生者で、何の目的かはわからないけどクロノ君の近くに居て正してくれてるっぽいので今後も安泰ですかね。最初の時の弁明から察するにどうやら彼は彼で局側として考えた上で動いていてくれていた様ですし、もしかしたら彼を援護する形を取れば本格的に私が表に出なくて済むかも知れませんね。まあ“闇の書”に關しては彼らが早期にはやてちやんと接触したりは出来ない限り、影響はないと思ひ……たいなあ。

そんな彼らの変化や現状すべき事など考えながら、今回反応の在った山に入り更に奥へと向かいつつこれからに付いて思考してふと疑問に思ってしまったことが一つ

「そっういえばフェイトちゃんとの敵対が無くなったという事は、もしかしてS・L・Bスターライト・ブレイカーの習得イベント無くしちゃった……？ あれ、それってマズインじゃ……」

彼女を表すモノで秘奥義級の威力なのに波動拳並みの気軽さで放たれる代表技。後にオレンジの娘にも受け継がれるモノ。習得されない・受け継がれない程度ならまだ（良くは無いが）良いのだけれど、この技にはまだ役目が在った筈。まず次の事件である“闇の書事件”で最終的に保護防衛プログラム暴走体の防壁外殻を完膚なきまでに剥ぐ為の三位一体技の一つである事、そしてStS編でのヴィヴィオへのやり過ぎに見えなくもない正気への復帰法。どちらも物語の最終局面で最重要ポイント、どこかのタイミングで習得してくれるのを祈るばかりである。それが叶わないようであれば次の最



終局面前か騎士達との初戦後のやる気モードの時にでもリニスを通してでも習得してもらいましょう。悠次・亮夜・ロディル彼等がその事を気にかけてどこかで教えておいてくれるような感じであればいいのですがロディル君以外に期待は持てませんね、彼も若干不安ですけど。

「プログラム組んでおいてレイジングハートに刷り込ませて置くだけでもいいかも。基礎理論は確か」周辺宙域に散布されてる魔力素の収束、それをなんやかんや操作固定し、ぶつば」でいいはずだし」

メリットは改良してから渡すことが出来るので、原作で言われていた「年齢や技量に合わない、魔力量とセンスだけで組み上げた事による育ち切っていない肉体への負担」を減らす事がおそらく可能であるという事。コレがあればA's後の撃墜イベントも多少は軽くなると思いたいんだけど、アレは確か「カートリッジシステムや収束砲の使用等の今までの無理も祟って」という追加の原因も在った筈なので。まあ別の対策も用意する算段ではあります。

「デメリットは……あれ？特にない？強いて上げるなら、なのはちやんが」感覚で組み上げる」という感性の経験をしなくなる事ぐらいでしょうか？しかしそれも「戦い」がA's以降付きまといましますし大丈夫でしょう、まだ無印編も終わってませんし、ジュエルシードが共鳴して強大な何かが出る可能性もありますからね。

よし、コッチで作製して渡す方向で行こう。そうと決まれば早速今日の探索終了後から組み上げていこう、なるべく使用者への負担を減らしつつ、かといって全く負担をかけたらいけないようでは技量の上達に支障をきたしそうですね。レイジングハートには演算等の負荷を掛けてしまうかもしれないですが、その辺りも何かしら考えてあげましょう。そういえばこの世界の“デバイス”というモノ、PCなどの機械と同じ認識で大丈夫なんですかね？ アルサナが有能過ぎて気にも掛けてませんでした、可能なら魔導術式パッチや外部拡張アタッチメントも出来たりしたら面白そうですね。リニスに渡したデバイスで試しておけば良かった。

「さて反応も近くなってきた……ってなんですかこの場所は……」

気が付けば光もあまり入って来ない鬱蒼とした森の奥まで来てしまっていた、そしてそこに見えてきたのは朽ち果てているようだが形は原型を残したままに外壁に植物が這い巡っている洋館と思われる建物。

「うえ……此処探すんですか……帰りたい。前世から蟲、特に多足生物が苦手なんですよお……絶対大量にいますよこれ」

蟲、特に蜘蛛の類だけは本当に相容れない。益虫が居る事も判っている、だけど無理なものは無理なんです。それにしてもこの屋敷、何処かで視た事ある形状してますがは

て何処で視たんでしょうか？

「とりあえず中に入りますか……お邪魔しまーす」

入ってみると、外見とは裏腹に中は小綺麗としていた。入ってすぐには広いエントランスと目の前にも左右に2階へと上がる階段。その奥に少し広めのホールがあり、そこから更に奥に部屋があるようだ。

「うーん、この造りやっぱり何処かで？」

2階も在るようだが先ずは1階から調べていくのが定石だろう、地下への階段が見つかったら二階から調べるように変更しますけど。

この手の屋敷のような場所で超常現象が起きるとすればボルターガイスト辺りですかね？ そうなるとジュエルシードが作用している場合、部屋などではなく屋敷全体に作用していると思うので屋敷の中心辺りにありそうですね。

「さて、先ず一階奥は……食堂、ですかね？」

奥に進むとそこにはとても長細い机に十数個の椅子が並んでいた。左手奥には恐らくだが厨房の様な場所、右手奥は扉があつてその中までは見えないがおそらくは物置か何かだろうか。まずは左手奥に見える厨房らしき場所に向かう。

少し汚れてはいたが、鍋などの調理器具も多少汚れてはいるものの錆びては居ない、しかし生活臭がまるでなかった。厨房は確認したが何もない様子なので今度は入口か

ら見て右手側に見えた場所に向かい扉を開ける。周りの風貌から開けたら埃が舞うかと身構えたが、そんな事も無く薄暗く物が少し散乱している部屋だった。

「この部屋は……やつぱり物置かな？ 色々置いてあります。反応の大きさも変わりませんしここにも無さそうですね」

まあそんなに簡単には見つかりませんよね、地下への入り口もぱつと見無さそうですし細かいところは後にして次は二階に行ってみますか。

入り口から見て左の階段を2階に上がると、先ずそれぞれの階段を上がって直ぐの所にそれぞれ一部屋ずつ、更に中央に奥に広がっているであろう扉がある。階段直ぐの左右二部屋に入ってみるが何も無かった、ハズレですか。

そのまま奥の扉を開けると左右に広がる廊下、そして部屋は5つあるようだ。右奥から見ていきますか。

- ・ 一番右奥、なにもない！ 本当に何も無い。ハズレ。
- ・ 右から二番目、ベッドが一つあるだけで何も無い。ハズレ。
- ・ 真ん中、あれ、開かない？ ドアが壊れてるのかな？ 当たりの可能性あり。
- ・ 左から二番目、テレビがある、テレビしかないとも言おう。電気来てなさそうなのにテレビ？ しかも壊れてるよな感じもしない、こちらも怪しい。

・ 一番左奥、ダンボールやら何やらが色々在るがそれ以外に変わったところは無い、実

家から出て行った子供の部屋とかつて感じですね。ハズレ。

「真ん中とその左の二択かなあ……」

定石で考えればこの屋敷にはしかなかった電化製品であるテレビのあった部屋。常識で考えれば中央の閉ざされた部屋。が、その部屋を開ける手段が存在しない、鍵穴は有ったがその鍵が見つからない。探すのも良いが面倒、テレビを調べてハズレならそこから横に打ち抜こう、そうしよう。

テレビが在った部屋で搜索をするが何も無い。本当にコレが在るだけなのか。それにしてもテレビですか……まさかとは思うけれど。

そつと画面に向けて手を伸ばす、すると抵抗感もなく触れた所から波紋の様に画面が揺らぎ手がズブズブと入っていった。

「うっわ、入っちゃったし。でも引き連りこまれる様な感覚はないか。向こうに空間とか無いのk、へぶッ！」

顔を入れて中を覗こうとしたら画面にぶつかつた、どうやら入るのは手だけの様ですね。

目視する事が出来ずに手さぐりで中を掻き回していると手に当たる感触があつた。ピンゴ！

「よつと、ジュエルシード発見。……それにしても”テレビの中に入る”現象ですか、

やっぱり混じってますねえ色々」と

その原作の事件が起きない事を切に願う。まあ起こったとしても関わるのは私ではないでしょうし、私がお願ひされてるのはこの物語の調整リリカルなのはだけです。まあとりあえず、今日はこれで終わりですね。

「まだ私だけじゃ無理でアルサナがまた戻ってくるまでは封印出来ないから、とりあえず魔力糸でギチギチに巻いて抑えて……【偽・顔のない王】で包んで反応が漏れない様にして擬似封印」と

そうやってジュエルシードの回収を終えると、屋敷は何事も無かったかのようにその姿を溶かしていく。どうやら誰かの考えをもとに再現されていた場所のようだった。

「うわっと、そういうことですか。こんな山奥に普通は屋敷なんかあるわけないですね」

周りを見渡せば、鬱蒼とした森など無かったかのように疎らに木が存在し、時間も思ったより過ぎていたのか紅に染まった光が射ってきていて、良くある山の森の夕暮れといった感じになっていた。どうやら森そのものも影響によって生み出されたか変質していたモノだったようだ。

「さーて、そろそろ暗くなってきましたし、切り上げて帰りますか……ってあれは」

ふと屋敷が在った方を見ると降ってくる人影が二つ。何事!?!と驚いたがそのまま

では地面に向かって紐無バンジーそして激突ツとなりかねないので、落下地点に衝撃吸収陣を展開し落下物を受け止める。

「コレが今回の原因……って悠次君と亮夜君じゃないですか。物語を知ってる人物で、ある意味神の視点という原作知識持つてるであろう筈なのに、ジユエルシードに取り込まれてどうするんですか……」

なんだろう、もうこの二人にはこの事件の間は期待が出来ない気がします。成長速度とか諸々が原作組と一緒にじゃないですか。

いや、二人とも武器を持つてて衣（リアジヤケット）装も着替えてるといふ事は、秘密の特訓でもしてたんでしょうかね？ 次の事件の決戦までにゆくり行えばいいのに……まあカッコつけたがるのは男の性質（サガ）ですし、仕方ないでしょう。

このままにして『男の子だし大丈夫だよね』とか薄情な真似はしませんよ。とりあえず顔は以前ユーノ君に会った時の白皇さんの仮面をつけて、衣装もその時の（MHのレイア装備）に変えてつと、よし、大丈夫。

「お二人方、起きてください」

倒れてるままにして肩を揺さぶり覚醒を促す。何処かやられているかも知れないので、ヒーリングもかけつつに。

「……んあ？」 「逆刃刀が欲しい……」

亮夜君  
一人は覚醒しましたが、悠次君一人はまだですね。それにしても逆刃刀かあ普段は刃が無いようにして魔力刃発生させるようにすればそれっぽくて非殺傷の打武器になりますし良いかもしれません、でも本家番長はずっと抜き身で戦つてた気がしますけどね。  
「起きました?」

「あ、ああ……つて誰だお前は?!」

「んん……どうした亮y……つて誰だお前は、敵か?!」

「意見を揃えて頂けるのは答える側としては有難いですが、お答えしかねます。ですが私は敵じゃありません。もしそうであつたなら貴方達を起こしませんし逆に永眠させていたでしょうね」

それを聞いてか少し考え、青ざめる二人。もうちよつと危機感を持つてくださいね、A, s 編以降はバトルが続きますよ。

なんとか冷静に戻つたか彼らは次々と質問してきたので、当たり障りなく答えておいた。

——何故自分達を放置せず起こしたのか。と聞かれれば“こんなところに普通の子供が寝てるまま放置する方がおかしいでしょう”と返し、

——お前も同じ年くらいの見た目じゃねえか。言われれば“人の外見と年齢は必ずしも一致しないモノですよ”と返す。



逆に私が質問すると、どうやら二人一組で搜索していて、探し回るついでに特訓できる場所も探していると、丁度いい感じの場所がこの山奥だったのでついにて特訓を行っていたとの事、ある程度興が乗って来た所で目も開けられないくらいの発光が起きそこから今起きるまでの記憶がないとの事だった。偶然なのかそれとも……

「まあ何してるのか詳細は聞かれたくない事だと思うので聞きませんが、もう少し緊急時の事も考えておいた方がいいでしょう。今回偶々通りかかったのが私だったから良かったものの、貴方達が最初警戒したように敵と目される人物だった場合、最悪も——考えられますので」

「おう……」「肝に銘じます」

「なら大丈夫ですね。では、私はこれで」

「ま、待つてくれ、結局君は何者なんだ？ 何故顔を隠す？ もしかして俺達と同じ“転生者”なのか？」

問いかけてくる悠次君。どう答えましようか。それっぽく匂わせておいてもいいですがそれは愚策ですかね。これも当たり障りなく答えておきましょう。

「転生？ 死んで別のモノとして生き返るっていうアレですか？ もしその事なら“わからぬ”としか言いようがないですね。私も誰かが転生した後の人物かもしれないかもしれません。まあ少なくとも良くあるような“前世の記憶”とかだつたりは持ってませんの

で“私は私”としか言えませんね。この仮面は諸事情（表舞台にまだ出たくないという理由）で外せないんですよ」

「そうか……いや、変な事を聞いたな」

「いいえ。初対面の、しかも素顔を隠してる相手を疑うのは持つて然るべき警戒心です。それ一辺倒では駄目ですがあつて困るものでも無いので」

もつと周りへの警戒心高めてね、そうじゃないと蒐集されて“闇の書”が使える能力増えるなんて事態は勘弁していただきたいので。障壁系の機能を付けた武器でも今度渡しますかね？ まあ次が始まつて冬になるまでに考えておこう。

「もういいですか？」

「ああ、じゃあ最後にもう一つだけ。もし俺達が“これから起こる事を知っていて、それに協力してほしい”つて言ったら手伝つてくれるか？」

——ほほお、そうきましたか。むこうから切り出されたのであれば此方で条件を付けて優位に立ち、支援も簡単になるので各かでは無いですが……

「内容によりますが……多分これから言う私の言葉がそれに対する答えとなるでしょう。＼その知つているという『起こる事』に私や……貴方達は登場しますか？ ＼」

「……ッ！」

「わかりましたか？ それが答えです」

居る筈無いですからね私達が。貴方方が知っていると語る“原作”には。そして自分達も同じように其処には居ないので事象は変化すると自覚してください。もし変わらないなら私がつと樂で来たはずなんです、本当に。

「貴方達のその反応で判りましたが、その“起る事”とやらに私達は居ないのでしよう。ならば私が手を貸すと決めた時点で貴方達のその知識は無意味になります。ですが運命は固定ではありませんが可変ではあります。今は兎も角この先、私も共に行動する未来に変わるかもしれない。しかし現時点では私もやる事がありますので申し訳ないですが貴方達で頑張ってくださいね。それでは」

それだけ言い残しその場を去る。もつとも、そんな未来が来ない様に頑張ってるのでそこに到達させるわけにはいかない。あくまで私は頑張らない為に頑張るのだ、君達は表だって介入したんだからもつと頑張つてね。

さて、明日はどこを探しましょうかね。

「まるで知らない人物……か、敵でないのという感じがするのが幸いだな悠次」

「そうだな。少し会話した程度だが悪い人ではなさそうだ。彼女も言った様に機会があれば巡り会えるさ、その時にまたお願いしてみよう」

「ああ、最後の物語をより良くするには戦力が多い方が良くからな。……しかし」

「俺達の現時点での能力不足か……」

「はあ……」

転生者で在るにも関わらず、彼らの力は開花不良の様であった。頑張れ少年達、私たちの力の“原作”にも意識を向ける。

## # 1 7 事態、急展

前回の回収（森の館に男子二人が囚われた件）から数日経ってしまい特に成果は無く週末を迎えた。その間に有った事といえは、

アリサちゃん達はどうかやらかなのはちちゃんと連絡を取ることが出来たらしい（ちちゃんと動いてくれて良かった……あの機械が）その事を翌日には嬉々として語ってくれた。どうやら魔法の事などは話されてはいないようだったが、なのはちちゃん本人からどうしても外せない事があると聞けたという事、仲直り出来たという事など色々。そして、その事も含めて

“い、一応、アンタのおかげだから感謝してあげるわ”

とテンプレートな反応を頂戴しました。実際に目の当たりにすると良いモノですな。

でもデレ成分はまだいいです、其処から繋がりを持つと自然となのはちちゃん達に関わってしまうので。ところで今更だがなのはちちゃんは連絡が取れた事を疑問に思わなかったのだろうか？

つで、時間は流れてある日の放課後。残りの反応の詳細地を探して海岸線を散策中です。

「海以外の反応が見られなくなつたと思つたら、既に管理局組で回収済みですか……手元にあるのは4つ。一応目標最低には足りてますが予備は欲しいですねえ」

現状残るは海の反応のみ、アルサナからの連絡では局側で回収したのは2つ。残るは6つとなり原作通りに進んでいるようだ。それに対して私としては

“ 何もしなくて良いかも ” と嬉しい反面

“ これ以上確保できないのか ” と行おうと思つている行 ちよつとした改変 為の為の予備が確保できないであろうと残念にも思つてしまう。

「4つ在れば使用予定としては一応予備に1つ余るといふ事になりますし大丈夫といえば大丈夫ですかね。元々” プレシアさん達が原作通りであつた場合 ” を想定した対処の為に集めていたわけで、もしこのまま何もなく終われば管理局で保護延命処置を施される可能性もありますし」

原作の様なラスボスムーヴをしていないプレシアさんだったら、そう重い処分には成らないだろうし証言の為にもある程度の治療は施して貰えると思つている。そうなら

なかつたとしても1年以内に起こり解決する次の事件のモノを使えば、なんとかなると考えている。それというのも闇の書の蒐集魔法の中に治療系が全く無いとは考えにくい、どんな最強無敵の存在であれ回復手段は持っているのが定石だ、ましてや元々が様々な魔法の蒐集・研究の為に作り出された“夜天の書”だ、有るに決まっている……有るよね？　な、無い場合としてジュエルシードはこのまま確保しておく、海のモノも掠め取れるなら確保しましょう。

それにしてもこの変わってしまった流れでどうやって残りを回収するんでしょうか？　原作の場合、強制発動させて露見させ、浮上してきたモノを確保していましたが、今やその彼女たちは協力関係でありそんな無茶を周りが許すとも思えない。だとすると……潜るのかな？　この時期に？　デバイスのお陰とは言え凍結の属性を扱えるクロノ君辺りなら寒くても結構大丈夫なのかな。もしくは反応位置が安定していかないからすつごく広く結界を展開してモーゼ？

「なんにせよもう残りが海のモノだけとなった時点で、私が回収しに行く事は難しくなっている訳ですけどね」

海原という遮蔽物の無い場所にあり、何処にあるかもわからないように反応が定まらず、海開きもまだまだな春過ぎの海で行動を起こす。これが注目されないわけがない。結界を展開すれば管理局の計器に捕捉されるであろうし、展開しなければしないで舟の

一隻でも在れば探索出来るかとも思えるが、小学生の女の子一人で舟の操舵など一般常識的な視点で見ても在り得ない。

よつて私ともう出来る事といえは

“残るすべてのジュエルシードが管理局側のチームに回収されて21個全ての存在を確認する”

ぐらいですね。後でリニスカアルサナからの連絡で回収できた事とその個数を教えてもらえば良いだけかも知れませんが、やはり大事なのは自分の目視でも確認しておく事、それが一番安心できる。

特に、変わつてしまつている所為で“回収方法”が不明すぎる上

“事象だけはある程度正史のまま”

と今まで起こつて来ているので

“もしかすると回収の時に何もしていないのに暴走段階に入つてしまう”

なんて事もありえないとは言い切れない。

万が一そうなつた場合でも、前の街中の時の様に表立つて出て行くことはもうしたくないのでリニスに影から補助アシストを掛けるか、遠くからの視点という利点を活かしてアルサナ越しにリニスに指示でもしましょうか。あつ、でも視てただけで見つかりそうに成つた前例があるし……



もし原作通りに暴走しそうな形となったらどうするか考えつつも「まあなるようにしかならないか」と結論付けたりあえずモノの確認をしてからにしようと決めた。

□~~~~~□

風も穏やかで、波も余り立っていない風いだ海面が一面に広がり、それを見渡せる海岸線の防波堤に少年少女が複数名立ち沖の方を見ていた。

「形だけとはいえ民間協力者である君達や俺達の方でこの街を、俺達以外の局員やアースラの観測機で街以外の周辺を探ってジュエルシードは合計で11個集った。ユーノから聞いた限りでは全21個らしいがまだ半分。しかし、もう半分集まった。この調子で集めることが出来れば残りもあと1ヶ月もしない内に回収出来るだろう」

ロディルが集まった面々に先ずそう告げた。この時点で管理局側の皆が確認しているのは、なのはの持つ5つにフェイト達が持つ3つ、そして協力を始めてから見つけたモノが3つである。

「そして、今から皆で探索を行うのは一番人員が必要と感じつつも、人的被害を出さない事を優先して街や森など陸地を中心に探し、結果後回しになってしまった“海側”

の搜索だ」

つというが管理局側であるロディルやクロノをはじめとした「情報操作も楽ではない」とするアースラ組の本音であり建前である。物的証拠が目に見えて残るであろう陸地での被害は勘弁してほしいのだ。

「でも、皆で探しても見つかったのって3つだけだよ？」

「ぐっ。た、確かにそうだが」

「それに、私達以外にも集めている人が居たから、もしかしたら残りの10個ももう集められてるかも知れないよね」

「い、いや、確かに君達からその存在は聞いているが」

「なんだ？ まさか見つかってねーとか言うのか。アースラの設備もそこまで優秀じゃねえのか」

「俺達を助けてくれた人は良い人っぽかったが、前に街中に現れたボロローブの奴は明らかに敵だったからな、さっさと探してくれよ」

「うるさいぞ、亮夜・悠次！ 一時的とはいえ二人して探索の際に消息不明となり、気が付いたら知らない人に助けられて挙句その地に反応のあったジュエルシードを回収できずロストしたくせに偉そうに言うな」

「<sup>ロディル</sup>貴様、言うてはならんことを!!」

「事実だろうか！」

そう言うやいなや、取っ組み合いを始めるロディル含む3人。2対1の形に成っているのだが、生まれた環境のや経験の差か、悉たしひくないなされている。因みにまだ結界も展開されていないので生身状態でのバトルである。

「……なんだかすまないな、ロディルがあんな感じで。今まで同じくらいの年代が僕くらいしか居なかった上に局の立場上僕は上司、ああやって自分をさらけ出して言い合える奴が少なかったんだ」

「ううん、ああいうのって、もつと仲良くなる為に必要な事だと思うの」

「そうか、そう言つて貰えると……ん？」

「あの時は私とナノハはまだ友達つて関係じゃなかったから……私たちもああいう事した方がいいのかな」

「待つてくれ、そういう答えが欲しかったんじゃないし、キミ達がそのままをやつたら怪我を」

「だつたらバリアジャケットを展開して魔法戦でやるの！」

「そうだね、わかつたよナノハ。クロノ、場所の準備お願いします」

「話を聞いてくれ！ ええい、この世界の人達は喧嘩けんか早いな!!」

どこか外れたやり取りでいつの間にか原作通りに対決しそうな感じに成つて行つて

いるのはとフェイト。そして最初の登場を思えば人の事は言えないが、まだまともであらうとしているクロノ。

「あははー、私たちは別にこの世界出身ってわけじゃないけどねー」

「……（プレシア、少しフェイトを純粹に育てすぎです。そしてイツキ、コッチはちよつとフリーダムが過ぎて大変なので、回収作業もコレで最後かと思われますしソツチに戻つては駄目でしょうか？ 貴女と居た方がまだマシでした。」

“ 視てて飽きないねー ” などと、この状況を単に面白いと笑つて見続けているアルフとジュエルシードの探索に來ただけなのに何故こんなに騒がしくなっているのか、と頭を抱えるリニスであった。

「ん”ん”！ 少し脱線したが、今回の搜索はこの”海”方面全般だ。探すにあたつて集中的に反応を探つてみたがどうにも位置が安定していない、恐らくは海流に流されているかなにかしらの海洋生物と共に有るかだ」

一騒ぎ終え、既に少しポロポロになつて亮夜と悠次る二人とは違い、何事も無かつたかのように

無傷のロディルがそう仕切りなおした。

「前者である場合はイイが後者であった場合、その海洋生物に反応して暴走が起きる可能性が在る。君達は既に猫？だったか犬？だったかを媒体にしたモノと遭遇しているだろう。ソレらはまだ”1つ”が反応したからその程度だったが複数合わさった場合、最悪神話生物みたいなのが出来上がっても不思議じゃない、ロストログアというのはいういうモノだ」

回収しようとしている物の危険性を改めて説明するロディル、それによつて皆一様に気を引き締め直す。そして方法についての説明を始める。

「概要は簡単だ、それぞれが別れて適当に探す」

「……それだけですか？」

「……現状それ以外に無いんだ。それでも見つからない場合は多少危険ではあるが、最終手段として結界を何人かで重ねて発動しその中で魔力を放出し強制的に発動状態して浮かび上がった所を封印する。という方法も存在する」

間違つてもそんな手段に成るまで見つからない事が無いように全力で搜索するけどな、つとクロノが付け足してそれぞれが先ずは自由に探すことになった。

戦闘が行える者と探知が出来る者二人一組で4つ（なのユー&悠二、フェイト&亮夜、クロノ&ロディル、アルフ&リニス）に別れて搜索を開始、そして時間は掛かったがそ

れぞれが魚がくわえていた物や海草と共に流れていたもの、偶々探す時に打ち揚げられて引つかかっていたもの等を何事も無く一っずつ発見した所で再度集まった。

「特に目立った事も起こらず何事も無く回収できたな」

「ああ、アースラからの連絡でも反応を見た限りこれ以上は無いですだ」

ロディールとクロノからそう告げられ全員が“そろそろ全部の回収も終わりそうだな”“と思いながら帰還していった。

——一方その少し前から、遠目にソレを視ていた人物が一人

「色々考えてたのに、来てみれば何故か“回収しきつた”感満載で皆が満足してるんですが」

全部探し切ったんでしょうか？ 見た限り4つ？しか手に持っていないきがするんで

すけど、後二つはどうなったんでしようか。彼等は帰るようですし居なくなり次第コチラでもちよつと探してみましようか？それにしても

「ちよつと考えればわかったことですよね」彼らは日中から行動してる」という事に……」

物事が都合よく自らの時間に余裕があるときに起こるのは主人公特権だ。そんなもの私に在るわけが無いから私が探し始める夕方頃にはもう探索を終えて切り上げ作業に入ってるのは当然の事であろう。

しかし、原作で此処にあつたのは6つだ。そしてまだ回収できていなかったのも6つ、ここがズレるとは考えにくい。出来ればそのまま彼等の方で探してくれた方が楽なので、リニスに連絡をしてもう少し探すように……

「あつ、あれ？ もうだれも居ないし……」

気が付けば其処には誰も居なかつた。アースラの感知はそこまで優秀じゃ無いのかもしれない。

「まあ結果オーライですかね。さつて、探しますかあ」

視られる心配も一応減つたので、気兼ねなく探そう。

そう決めて残っているであろう未回収のモノを探し始めた

ら、さほど時間も掛からずあっけなく見つかった。堤防で釣りをしていたアロハシヤツの青髪の兄さんが

“ おう嬢ちゃん、こんな所でどうした？ ん、なんだ探しものか？ しかし可愛いのに飾り気がねえな、釣ったもんでワリイが俺あ魚以外今は興味ねえからコレでちったあ着飾れや”

つてくれました。どこかで見た事ある人物だったような気がしたが気にしない事にした。

□~~~~~□

「さて、今回4つ回収できたことにより俺たちの方で所在が確認出来ているのが合計1



5個と成った」

「そして、君達の話から残り6つの内、1つは既に正体の判らない人物によって持つていかれている為、実質的な残りは5個と言つていいだろう」

局員側である二人は現状をそう告げ

「だが残りの反応がこの街、及び周辺から感知が出来ない。もしかすると何処かに漂流してしまつてゐる可能性もあるし、考えたくはないがその謎の人物や他の何者かによつて既に回収されてしまつてゐる事も在り得る」

他の局員を動員したりアースラの設備を使つても探しきれない為、一時的に結論を付ける。ユーノをはじめ皆一様に少しだけ不安になる、なのはやフェイトなどはジュエルシードが力を発揮する様を見てゐるのでアレが悪用されたりなどしたら大変だという考えから、悠次や亮夜など特殊な経歴の者達は自分たちの知る物語とかなり違ふというモノからだ。

尤も、リニスだけは特に気にしてゐる様子は無い。というのもその謎の人物こそがいつきであるし、6つの内4つもいつきが回収済みであることを知つてゐる、後の2つも回収してゐるであらうと思つてゐる為である。

帰還する際に、ジュエルシードの反応をアルサナが捕捉してゐて回収しきれていない事はわかつてはいたが、同時にいつきの魔力も捕捉して居た為“活性化もしてゐないし

する要素も無い、みんなに言つて回収しても良いけどまあイツキに任せれば大丈夫だろう」という事で特に進言する事も無く一緒に帰還していったのだ。

「ひとまず、残りの回収はコチラに任せてもらおうと思う」

「ま、待つて！ 最後までやりきりたいの！」

そう切り出したクロノになのはが叫ぶがそれに対しまあ落ち着いて最後まで聞いてくれと返す。

「君がどういう経緯でこの件に関わつたかは聞いたし思っている事も色々あるだろう、しかし君達が全く歯が立たなかつた上おそらくは戦闘経験もあるであろう人物が居るんだ。聞いた限りだと僕達でもどうなるかわからない。だからこれ以上協力者であっても民間人でもある君達に危険な目に合わせるのも体裁が悪い」

「まあそれもあるんだけど、皆さん本来はまだ学生でしょう？ そちらの世界の平日で学校のある時は学校に行つた方が私は良いと思うのよ。やりたいと決めた事をやるのもいいけど、子供は学べるうちに色々学ぶべきだわ」

いち管理局員として話をするクロノに対して、いち親として話すリンディ。リンディにしてみれば立場もさることながらいくらか能力があるといつても、探索や対処ならまだしも“戦闘”は早いと考えての事だった。

それから幾らか話をして、せめて休日ぐらいはやらせてほしいとなのはに懇願されそれを了承したりなど有ってから、リンデイが「そうそう」と話をしだす。

「フェイトさんのお母さん、プレシアさんに関してなんだけど、良ければコチラ側で……つというよりアースラ側で治療を受けてみない？ 事情があるとは思うのだけど、このまま処置を受けないよりは良くなると思うわ」

「え……つと、私もその方が母さんと長くいられてうれしいけど、聞いてみないと」

「ええ、一度戻って貰って構わないわ。病気の具合によつてはこれからのこともお話ししたいしね」

フェイトとリンデイがそうやり取りを交わし、他の面々もそれに賛同していた。

ジュエルシードに関しては、あと数週間ほど探索し見つからなければ一度切り上げ、確保している分を一度ミッドチルダの管理局に持ち帰り嚴重に封印してから再度戻ってきて探索するという手筈になった。そうなったのもソレを狙う人物がいて、更にはその存在を知り「最初に次元輸送艦を襲った人物も判明していない」以上容易に転移されることや攻撃されることは無いとは思うが万全などありはしない。奪われる又はアースラが狙われる可能性もあるという判断からだ。

こうして不完全ではあるが（仮）ジュエルシード事件は総じてみれば何事も無いように進み

なのは達は「時間がある限りは全力で搜索を手伝います！」と意気込み

フェイト達は「ジュエルシードを使用可能な範囲、監視の有り無しで少しでも使えるのなら母さんの願いの為に使わせてほしい」と頼み込んでリンディに「うくん……内容次第かしらね」と曖昧ではあるが一応の約束を取り付け

他の“転生者事象を知る者達”は「なんか違うが平和に終わった方がいいか……いいのかわか？」などと話し合っていたり

アースラの乗員達も「ただの視察巡航がちよつとした事件みたいになったが、争いがあつたわけでもなく終わろうとしていた良かった」などと語り合つて

平和的な（陰でそうなるように努力している奴も居たりしたが）終わりを迎えようとしていた。

『《困るんだよねえ……勝手に”平和な物語”になつて終わつてしまうのは……》』  
そう、どこからか言葉がアースラ内に響いて聞こえてくるまでは

## #18 史変、帰結

『困るんだよねえ……勝手に“平和な物語”になつて終わつてしまうのは……』

何処からともなくそう男の声が聞こえてきた、その声色は聞こえてきた言葉の通りの困っているだけという様子ではなくどこか嬉々とした、そんな感じも孕んでいる声色で。

「!?誰だ、姿を見せろ!」

『ハッハ、ごめんよ。どうやら音声しか飛ばせてなかったようだね。生憎私はその場所に居るわけではないから映像としてしか姿を見せれないがね』

クロノが一度解いたバリアジャケットを再び展開し武装を構え警戒していると声の人物はそう答え、なのは達やクロノやリンディ等を含め主要人物全員が集っていた部屋の空中に映像が映し出された。そこに映しだされたのは顔全体を隠す道化師の様な仮面をつけた人物だった。

『《ぎげんよう、なのかな? キミたちが居る次元の正確な時間がわからないから何とも言えないけれど。まあそんな事はどうでもいいか》』

なんとも要領を得ない、自分本位で語りを進めるてくる相手。身振り手振りが全て大

げさと言っても良い程に大きく、正にコレからショーを行う前のピエロの様な何処か不気味な感じをさせつつ喋り続ける。

『《いやいや、実にスムーズに事を運んでくれたね。彼の世界にばら撒かれた全ジュエルシードも回収されてしまつて……おつと》君達だけ》では全部は回収出来ていないから既に残り全てが回収されている事は知らないのかな？』

「何故ソレを知っている」

『《言うわけないだろう？ 情報とは他人より優位に立つ為のモノであり、直接相対していない場合ではどんな武力よりも“力”を持つモノ。それをひけらかすのは愚物のやる事さ》』

クロノが冷静を装い言葉を交わしていくが何処か小馬鹿にされているような感じで一方面的な話が進んでゆく。

『《ある程度の情報を開示し、此方の優位性を出してやるのが流れだろうが、それを語つた所でどうせ理解できないだろうしね》』

「随分とこちらを下に見ているようだな」

『《事実としてその通りだからね。私はその気になればその艦のコントロールを奪う事も出来る、けれどそれでは面白くないし予定に無いからね》』

それだけ言い放つと、仮面の男はなにやら懐からど真ん中にボタンが一つしかない

モコンの様な、一目見ただけではオモチャと見間違うほど陳腐なモノを見せびらかすように取り出した。

『さて、そんな余計な事をしてもしようがないし、本題といこうか——さあ御覧在れ』

リモコンの様なその物体を振りかざし格好つけてボタン押すと、どこかの次元空間だろう場所が映し出されたホロウインドが現れる。

「なんだ、あれは」

「アレは……まさか、時の庭園？」

『《ご名答。そうだよ、ココに映っているのは其処に居るテストロッサ嬢が母親、プレシア・テストロッサと共に現在拠点としている場所さ》』

そこに映し出されていたのは空間に浮かんでいる孤島を思わせる場所、時の庭園そのものだった。フェイトやアルフといった直接其処に居た者やリニスや亮夜等の訪れた事の有る者達以外は初めて目にする者が殆どで、フェイト達から事前に話を聞いていた通り老朽化が進み寂れた様子が見て取れる。口々に小さく出るのは、何故形がまだ保たれているのか、やら、思った以上に荒廃が進んでいる、等様々だ。

「それを見せられて、僕たちはどう反応すればいいんだ」

『《別に？ ただコレから私がやろうとしている事を、君達にも見ておく権利があると



言った所からかな、親切心だよ』

「権利？ ソレは一体なんのことだ」

クロノの疑問は当然である、いきなり現れた不審人物に今現在も遺失物捜索に協力してくれている人物の拠点の映像を見せられ、何の要領も得ないまま“見ておく権利がある”とだけ告げられては、何をどう見ていけばいいかもわからないし、そもそもその場所はいずれ訪れる予定の場所だったのだ“見る権利”もなにもない、混乱するばかりである。

『《これから起こる……いや、私が起こす、かな？ その出来事を知る事を、観測<sup>み</sup>る事を、と言った方がいいかな》』

「なに？ さつきから一体何を……」

『《今この時、君達と語り合う言葉を、内容を、私は持ち合わせてはいないよ。ただ君達は今から行われることをただ観測し、事実として、事象として認識すればそれでいいのさ》』

クロノも会話を引き伸ばし、少しでも情報を引き出したり出来ないモノかと試してはいるがソレは叶わないようだ。なによりクロノではそういった交渉事の経験が不足している。

「それで、お前が行おうとしている、考えている事はなんだ？」

『《在るべき事象に沿つて貰わないと、来るべき出来事に繋がらない可能性が高くなるんだ。それはコチラとしても困るんだよねえ、”あの争いの時”が来てくれないと》』

告げられた目的にその場にいた誰も彼もが意味を理解できないで居た——とある事情を識る者達を除いてはだが。そしてそんな事情を知る者達も”今映し出されているコイツはもしかすると自分達と同じ……”と考え込んでしまい何の行動も起こせないで居る。

『《そしてコレから行う事は君達に止める事は出来ないし、止めるための行動を起こさせる気も、その時間を与える気も、私には無い》』

“これは一種の清算なのだ、ある特定の人達が関わってしまった事が及ぼした影響への”と区切り、懐からまた別の端末の様なモノを取り出した。先ほどの映像を映し出した時のモノと比べると些かボタンなどが多い様に見えるモノを。

□~~~~~□

周りの人達がそんな急展開に戸惑っていた時、ある意味その出来事を俯瞰から見ることが出来ていた者達も居た。アースラに協力しているフェイト側ではあるが、別の視点か

ら見ていたアルサナとリニスだ。

「あまり、こういう風に聞きたくは無いのですが。アルサナ——」アレは貴方達の行っている行動の一部ですか？」

『いや、あんな人物が登場する』予定や事象は知らない。恐らくだがアレは俺達も知らない』イレギュラーそのものだ』

「イレギュラー、ですか。それは以前教えて貰ったようにイツキや貴方が自分達の事をそう称していたような感じですか」

『そうだとも言えるかもしれないし、そうじゃないと言えるかもしれない。少なくとも現時点では情報が少なすぎて』わからない』としか答えようがないな』

アルサナの言う事も尤もだ。だが少なくともアルサナも此処には居ないにつきも、出てきた人物については一切の情報を知らないと言断するだろう。それほどまでに異質で唐突な人物の登場なのだ。

『それよりも嫌な予感がする。奴の言っている』在るべき事象』とやらにだけは少しばかり心当たりが在る。いつでも』時の庭園へ転移できる準備をしていてくれリニス。俺は俺でアイツに別の連絡しておく事がある』

「わかりました。何故その心当たりで時の庭園が出来るのかなど、正直聞きたい事は山ほど在りますが今は時間がなさそうなので貴方に従います」

そうして周りの人達とは別に行動する準備をし始めていた一人と一機だった。

□~~~~~□

『《さて、いつまでもこのように時間を浪費するものではないからね、始めようか》』

男がそういうと、先程取り出して手に持った端末のボタンを一つ、また一つと押していく。すると映し出されていた時の庭園の一部が爆発し炎が上がっていった。

「ツー！」

「待つてリニス!! あれ、なんで、なんで転移できないの!?!」

『《ハハ、少しばかり細工させて貰っているよ。〃彼女一人だけ〃が其処からあそこまで転移できるというちよつと特殊な細工をね》』

見せられた事が唐突で其処に居る人たちは動けなくなっていたが何かを察したのか咄嗟に転移していったリニス、リニスが転移した事を見てそれを追い転移しようとしたフェイトだったが何故か転移できなかった。そしてそれをとてもしそうに、自分の思っている通りに物事が順調に進み過ぎて仕方がないといった様子で語る。その様子にフェイトが声を荒げて問う。

「なんで！　なんでそんな事を!!」

『《うん？　必要だからだよ。》　彼女の存在はルールから外れている。だから此処で元のルールに私が戻してあげるんだよ』

「《ルール》？　一体何の話をしているの!？」

『《君達は別に知らなくてもいい事さ。これは私が私のやりたい事を成す為に、そこに行き着く為に必要だと思つたからやつているに過ぎないしね。最初から言つてるだろ？　必要だと思つてるからやつている》のだと』

言つている意味を、語られるている事を、ソレらを理解出来るものは正規の歴史には存在しない。そしてソレを知るであろう者達もあまりの展開に思考が動かさず口を出せずに居た。

そんな中いち早く意識を取り戻し意見したのがクロノであった。

「ふざけるな！　たとえどんな理由であろうとも、居なくなつていい」とか、必要の無い者など存在しないんだ！」

『《面白い事を言う。確かにその通りなのだろう。居なくなつていい者はいない。素晴らしい考え方だ、実に正義だね。……だがそれは君達側の感性であつて私にとってみれば、大事の前の小事》であり、必要なる犠牲》でしかないのだよ』

“物事の是非はね、見る視点で変わるんだよ”　そう付け加えて、その仮面の裏に隠れ

ているであろう笑みを幻視出来るかのような抑揚で語られた。

『君達がどう足掻こうとも、私は私のやる事に躊躇は無い！　そして私の目的の為に慈悲も見せない！　さあ、御覧在れ、次に繋がるショータイムだツ!!』

そう告げられた瞬間、ホロウインドに映し出されていた時の庭園の至る所から次々と爆煙が上がり崩れていき、崩れ落ちた端から次元の狭間に消えていく。

「そんな…嘘…リニス？母さん!？」

その声は届かない、連絡を取ろうにも一向に繋がらない。その相手が応じられる状態に居ないのか、ジャミングされているのか理由は定かではないが。

『《ふはははは！　綺麗なモノだな。急ごしらえなだったがなかなか上手くいった様だ》』

「いや……いやああああ!!」

フェイトの叫びが広がり、正体のわからない人物の笑い声が響く中、アースラに居る者達は、無残に崩れ去って行く時の庭園の最後の様を見せれた映像で眺めている事しか出来なかった。



今すぐ送った座標まで転移して来い？ 詠唱しなくてそつちからも渡れる様にポートを創って？ 何の為にそんな必要が、そもそも私の魔力保有量で次元転移陣なんて展開ならともかく設置構築とか出来る気がしませんし、それに私もう眠……説明してる暇が無さそうだからとにかく急げ？ ああ！もう判りましたよ！やればいいんですよ！！

……へ？” 3分間で支度しな”？ 混ぜるな！！そして無茶言うな！！もー、どこなんですかこんな長い座標の場所って！！”

自らに課されてしまっている運命やらなんやらに扱き使われていたりした。



## # 19 事情、躍者

あれから様々な人に色々な出来事があった。

時の庭園が爆破された後、動ける者からあの時転移したりニススの転移反応やフェイト・アルフから聞いて、時の庭園が在ったと思われる大まかな次元座標を割り出して“もしあの時脱出が出来ていたとしたら、漂着していたであろう座標”を予測し、その周辺を探索を行った。

フェイト自身も必死になって探し続けた。今回の件で知り合い親しくなった友人たちもその様子に中てられてか必死になり、また管理局の面々も“目の前で行われた犯行を止める事も出来なかった責任がある”と同じように親身になって探し回っていたが、その努力は実る事は無かった。

そうして時間が流れていき少しした頃、管理局の人達が一度本局の方まで戻ると切り出した。曰く、今回のジュエルシードに関しての報告、元々の任務が巡航調査で在ったことなどで帰還しなければいけないとの事。又、時の庭園が在った次元領域を詳しく調査するにも申告を行う必要がある為それも同時に行う為にといい事らしい。

その間フェイト本人は独断で色々な世界を渡って探そうと思っていたが、クロノ達管

理局側としては「本来、次元間の移動と言うのはそれぞれの世界での認可や相応の理由とそれに準ずる資格が必要である」と教える、管理局の自分達としては理由も解つていゝるし見逃して上げたいがそれを見過ごす事は出来ないと告げてきたのだった。

□~~~~~□

それから暫くしてフェイトを含めた管理局側の人達が本局の方に帰る時がやってきた。何か縁があればまた会えるが本来自分達は住む国どころか世界、いや次元が違う為必ずしもそうなるわけでは無いとみんな別れの言葉を交わし合っていた。

もっとも何も問題が無ければどうせまた再会するとわかっている一部の者はこれらの「物語の間」の期間についてをバラバラに話し合っていたりもしたが。

そして、なのはとフェイトの二人も連絡先など交換し話し合っていた。

「それで、フェイトちゃんはこれからどうするの？」

「クロノやロディル、リンディさんの薦めもあるし管理局に入ろうと思うんだ。そうすれば色々な次元世界に行くことが出来るし、もしかしたら母さんやリニスがどこかの世界に辿り着いて生きている可能性もあるって教えて貰ったし」

時の庭園が破壊されたのを見た、そこに転移出来なくなっているのも確認した。そし

てリニスやプレシアとも連絡がつかず魔力反応も感知出来ない事も確認している。それでも可能性は限りなく低いけど零じやない、そういう思いから。そして

「それに、時の庭園自体は無くなつてただけど、その周辺から観測された魔力残滓の中に” 私達の中であの場所を訪れた事のある人物と誰とも符合しない” ものが2種類見つかったらしいから」

という” まだ見ぬ何者かによって何処かに連れ去られた可能性” が生まれてきた。

そう思う根拠もいくつかあるが大雑把にいつてしまえばフェイト自身の出自である” プロジェクトF” の存在があつた。

理論だけは在つたが実用化まで到達していなかつた技術、ソレを完成させた者である” プレシア”。あの時通信をしてきた謎の人物と協力し亡くなつたように見せかけて何者かが連れ去つた可能性、それはフェイトが周りに自身の置かれていた状況などを説明していたのでプレシアがもう抵抗も碌に出来ない程弱っている事を皆が把握していた為その予測もたてられた。

「私は諦めない、可能性が少しでもあるのならその為に頑張るしなんだつてする。リンデイさん達が示してくれた道もあるから」

「うん！ 応援するよ、フェイトちゃん。私に出来る事はすくないかもだけど、何かあつたらよろこんで手伝うよ！」

「ありがとう、なのは」

「そういう言葉を交わし、再開の約束としてリボンを互いに交換したりなどして、ある者達から観て“原作1期の終わり”を迎えた。」

□~~~~~□

「さて、色々と思わぬ展開になってしまいましたが、別れのシーンも……と、特に何もなく大丈夫でしたね。次の物語が開始するまでは問題ないでしょう」

「そう自らに言い聞かせるように確認して、私は見ていたサーチャーの映像から目を離し自宅の一室の扉を開ける。」

「フェイトちゃんは親の為に健気に頑張った子としてまあ悪くは扱われないでしょう。なんとかして伝えたい事も多いですけどまだ早計ですかね」

「ハラオウン性になってもならなくても、ある程度は原作に沿う形になってるので良いんですけどね。絶対にいづれ教えてあげましょう。」

「——で、コレからどうします？ 表向きの情報や伝聞ですと、生死不明の行方不明というよりもはや死亡者扱いになってしまみたいですけど」

「私はそう部屋の中のベッドで上半身を起こし、顛末を聞く人物に向けて話を続ける。」

「あの時アースラからリニスが飛び出し、アルサナから緊急連絡として座標と通信を飛ばして貰っていないければ、お二人とも爆発に巻き込まれるかその際に生じた虚数空間への穴に落ちて居なくなる所でしたしね、”プレシアさん”」

あの時、時の庭園が謎の人物に崩壊させられるという事が起こっていたらしく、辿り着いた時には時の庭園がそこらじゅう現在進行形で爆破されていつてるわ、何故か虚数空間への穴が開いてるわで大変でしたが、これ以上は……という大事になる前に連絡を受けた私が転移してゆき、一緒にコチラに転移させました、ギリギリでしたけどね。あと少し遅れていれば本当に助けられなくなる所でしたから。

「……それで？ 貴女は何処の誰で、どうしてリニスと共に私と”アリシア”を助けてくれたのかしら？」

アリシアちゃん入りのポッドも救出できたのは、偶々その時のプレシアさんが居た位置が自室ではなくアリシアちゃんの傍だったからなんですけど、結果オーライですね。物語が平和だったのでアリシアちゃんの位置などをちゃんと確認しておかなかったのが最悪の場合助け切れなかった可能性が在った。

「私ですか？ 私は神在いつきです。助けた理由は……そうですね、リニスにお願いされたからでしょうか？」

特に嘘は言っていないですし、これぐらいの理由でもいいですよ。”人を助けるの

に、理由なんて要らないだろ？（キリツ）とか恥ずかしい事言えないです。私としては  
“誰かを助ける”ってそれだけで十分立派な理由だと思えますけど。

そんな事を考えているとプレシアさんが口を開いてこちらに聞いてくる

「カミアリ？　そういえばもう一つの呼び名がどうこうって……もしかしてエニシの――ちよつと、イツキだったかしら？　両親のどちらかはもしかして管理局員だったりするの」

あれ？　なんでプレシアさんそんなこと知ってるの？　リニスが言う……わけないです  
すね、リニスは私の事一言もプレシアさんに詳細伝えてなかったはずですし。もしかして  
お知り合いですか？

「え？　あ、ハイ。両親共に管理局員らしいですよ。今は私を一人にさせても大丈夫と思  
われたのか、此方に滅多に戻ってこずに向こうに行きつきりですけど。お知り合いだっ  
たのですか？」

「ええ、彼は一時期私の部下でもあったし、ちよつとした騒動の時は私の為に管理局に対  
して意見を言ってくれたりしてたわ、結局は無駄になってしまったけれども」

「へ、へえ。そ、そうなんですか」

吃驚何てモノではない。なんでそんな重要な干渉を我が今世の親は行っているのか。  
もはや、干渉すること自体運命付けされているみたいじゃないですか。いえ、実際その

通りなんですよ。もう大分干渉しちゃいましたし。

「それでなんですけど、改めて聞きますがこれからプレシアさんはどうしたいですか？」  
「そうね……リニスが見せてくれた映像の人物、アレが誰でどういう目的を持って私を消そうとしたのかは判らないけれど、生きている事が判ったらまた何かしてくるでしょうね。助けて貰えたのは有難いのだけれど、貴女にも迷惑はかけられない。それに私はどのみち病に冒されていてもう長くは無いのよ……」

俯きながら氣力をなくしつつある顔で彼女はそう答える。だがその問題はもう問題では無い。

「ああ、それなら」どちらも「多分大丈夫ですね。アレが誰かは私にもわからないですが、恐らくですが口ぶりから察するに目的自体は「プレシアさんの表舞台からの退場」だと思えますので少なくとも1年後……ですかね？ それまで姿を見せなければいいと思います」

この世界がどの軸を辿るのか、若干読み辛くなってきたのはいるが出来事の「本筋」は何故か起きている上に辿って行っている。ならばそのブレも含めてA's後にあの世界線にたどり着く可能性も十分にある。あの世界線でのプレシアさんやリニスはどういった経緯で出ていたのかは詳しくは知らないけれど「出ていた」という認識があればその時点に居る事自体はおかしくは無い筈だ。それ以降も「ズレ」という形で、せつ

かく助かっているのだし何とかして生存し続けさせてあげたい。

「あの人物が誰でどういった目的かは置いておいて、プレシアさんの病自体は私が治しておきましたよ。今までのような体の違和感を感じないでしょう？」

「……え？ええ確かに感じないけれども一時的なものではなくて？ いえ、ソレよりも私でもどうすることも出来なくて、どの医師でも治す事は出来ず、フェイトに協力してしてくれたリョウヤという子や白い魔導師の子と一緒に居た子、そして管理局の子が使ったような見たことも無い魔法を使う子達にも出来なかったというのに」

驚きを隠せないのか、自分の状態を確認しつつも動揺しながらプレシアさんは呟く。それに対して私はほかしながらも答える。

「詳細についてはまだお教え出来ないのですが、私の稀少技能<sup>レアスキル</sup>でも思っておいて下さる」

嘘は言っていないですしね。本当でもないですけど。只ソレを持ってしても

「じゃ、じゃあその稀少技能<sup>レアスキル</sup>でアリシアも！」

「……ゴメンナサイ、試してはみたのですが、”まだ”出来ませんでした」

「そう……なのね」

そう、アリシアは治す事は出来なかった。まだ”自分の想していた通り”要素が足りなかったのだと思う。



明らかに絶望の淵にまた立たされたような表情に変わるプレシア。心苦しいモノがあるが、私自身彼女を治せなかったのはある意味想定内の範囲内ではあった、治癒と蘇生は根本が違いますし。だからこれから行おうとしている事を告げる

「ですが、方法が無いわけではありません。もう少しだけ時間を下さい。今の段階で完全な治癒が施せないというだけで、可能性全てが無いわけじゃないんです」

プレシアさんの病を治す時に確認できたので、方法としては行えるはずだが、やはりまだ完全に施すには要素が足りていないのだろう。そして“ソレを創る技術”は今の私にはない。

「さて、それではアリシアちゃんの蘇生についてなんですけど「一体、一体どうやってするつもりなの!」……お、落ち着いてください」

がつつきすぎです、プレシアさん顔近いです。

「で、では説明を続けますね。方向性自体はプレシアさんが行おうとしていたものと然程違いはありませんね」

「昔の妄執していた頃の私が追い求めていたようにアルハザードで失われた知識や技術を手に入れるということ? でもそれは……」

「いえ、失われたという点では近いですがそうではありません。あとソレとは別に動力源として、この回収したジュエルシートを使います」

そういつて私はアルサナからジュエルシードを取り出す。

「フェイト達が数が足りないと言っていたと思っただら貴方が回収していたのね」

「そこそと回収させて貰いました。大変でしたよ？ 正体を明かさずに回収するのは。只でさえなのはちゃんやフェイトちゃん以外に協力者が居てイレギュラーだったというのに……まあソレはいいです、過ぎた事ですので。ソレよりもコレの使い道ですが、  
“ブースター”としてのモノ、そして“力の変質”をワザと起こします」

そう前置きをし話し始める、これはまだ準備段階でしかない。まだ万全を期す為には欠片ピースが足りていない。この後起こる事件で彼女を助ける事が出来ればあの技術を習得できるかもしれないからだ。

「“ブースター”としてというのは、ジュエルシードを願いの叶うロストロギアではなく、只の魔力結晶として使うと言う事ね。でも“力の変質”というのは？」

そこは疑問に思いますよね。コレは、悪いですけど一種の賭けになってしまう部分もありますが大丈夫でしょう

「“力の変質”というのはジュエルシードの“願いを叶える”という部分に少しだけ捻じ曲げた方向性を加えて、回復系統の魔導を変質させます。一応確実性を増すそのための補助装置も作成する予定ですので」

「それは一体どうやって……」

「そうですね、まだ完全な認識には出来ていないのですが」この世界の“という言い方が正しいかどうかは判らないんですけども、回復系統の魔導は方向としては“加算”方向の治癒であるという所ですね。ですので傷を“なかった事”にする“減算”ではなく“時間経過により治った”という方向に進ませるのが魔導による回復治癒の方式だと。ジュエルシードによってその概念を“戻す”という事一点に集中させて“逆さになれ”と願い叶えさせます。コレが“回復魔導を変質させる”と言った所ですね」

「そんな使い方が本当に? ……貴方は何処でソレを知ったの?」

驚きつつも冷静な表情で私に問う。わざと変質を起こさせる、なんて“正気では無い”もいい所ですからね。それに漠然とした方向にしか認識してくれないのでまだまだ安定はしない方法なんですけどね、プレシアさんの時は成功してくれて良かった。

「いえ、ジュエルシード自体今回の件ではじめて見ましたし、その願いが叶えられる所もこの事件の一環で視ただけですよ」

半分以上は嘘である。前世の記憶が無ければそんな事微塵も考えられるはずが無い。こっちはまだ9歳の身の上なのだ。

「ジュエルシードに関してはこれぐらいでしょうか。まだプレシアさんの容態も様子見の段階を抜けていませんので暫くは安静をお願いしますね。何かあれば私に直接か言いにければリニスにでも言って下さい、出来る限りの事はさせてもらいますので」

「そうね……本調子、とまではいかなくても動けるようになるまではお世話に成ろうかしら」

「それが良いですね、ですがさつきも言ったように早く動き回れるようになっても余り無茶はしないで下さいね。それに時の庭園が無くなってしまう以上、この家以外にアリシアちゃんの生体維持を行える設備は用意できないかと思えますので」

「そういえばそうね……貴女は先ほど“自分なら治せるかもしれない”の様な事も言っていた事だし、それまで居させて貰うわ」

「では、これからよろしくお願いしますね。両親をかしこご存じの様ですしあまり畏まれてもアレですでお気軽に」

「じゃあイツキ、これからリニス・アリシア共々よろしくね。機会があればフェイトとも仲良くして頂戴」

互いに挨拶を終え、プレシアさんはこの家に居る事となった。経緯は異なってしまうが、プレシアさんに関しては出来れば救いたい程度には最初から考えては居たので、ある意味予定通りとなつて良かった。StS編に向けて被害を少なくするための戦力を増やすという意味では頼もしい戦力だ。フェイトちゃんと仲良くするのはもうちよつと待つて下さい。

そして最後にと私はこの物語中<sup>「連の流れ」</sup>、ずっと疑問に思っていた事をプレシアさんに聞いてみた。

「そういえばプレシアさん、リニスから最初聞いていた人物像と大部性格が違ったのと、なんでアリシアちゃんの複製体を改心した後も寝かせていたんですか？」

「あら？ そういえばリニスにもキッチンと説明してなかったわね。いいわ、エニシの娘である貴女は十分信用に値するし何より私の恩人だものね、そうね——」

そう優しい顔で語り始めるプレシアさん。だがその口から語られた事に私は衝撃を受ける事になった。

「先ずなのだけれどアリシアの体は“複製体”なんかじゃなくて私の娘アリシア本人よ。私がこう言うのは悲しい……と言えば変に感じてしまうけど、複製を作るのにも“オリジナル”は必要でしょう？ 勿論、複製もたくさん存在していたけれど数年前のあの日を境に全て丁寧に処分……いえ、葬ったわ」

「……………え？」

「それと、これも自分で言うのも笑えてしまふけれど」まとも」に戻つたのはそのある日に誰も訪れる事が出来ない様にしていた筈の時の庭園にフラツと現れた、日焼けした様な肌で赤みの掛かつた髪をした少年に言われたのよ

『貴女が何を為そうとしているのかは知らないが、この娘はまだ生きてゐるようだ。死んでもいない者を生き返らせようとしても成功する筈が無い。』治す』方法を探すが良い、ソレも貴女が追い求める」アルハザード」の様な」魔法世界の失われた技術」が記されている物ではない、本当に新しい」治療法」を持つ者を』

つてね。勿論ソレだけではないわ、それを聞いたとき私は受け入れられなかつた、だつてどんな医者や治療魔法に精通した人に診せても、アリシアは死亡したとされていたもの。その事を問い詰めたら

『自分は魔法ではない』別の手段」で肉体や精神そのものを調べたから判る。貴女が病に蝕まれもう先が余り長くない事も。ただ残念なことに自分が出来るのは」解析する」事だけ。だがいずれ……そうだな、数年内には貴女もこの娘も治せる」モノ」が現れるでしょう。その時までもう一人の娘と」一緒に生き延びる」ことだけを考えていれ

ばいい』

つと真剣に言われたわ……そこまで言われたら、もう私の命は長くは無かつたしそれに絶するのをもまた一考ということまでを思い直して、フェイトやアルフと共に過ごし

て居たのよ。あの少年は“モノ”としか言わなかったから、私はてつきりその時から数年後、今からだと数ヶ月前かしら？ Jと名乗る人物から送られてきた文書にあったジュエルシードの事だと思っただわ。その世界——ああ地球の事ね——は魔法文化が無いのにソレが出てきたから勘違いしたのね」

プレシアさんは懐かしむように語るが、私はソレを聞いて頭が回らなかつた。最後に出て来た“J”という者もさることながら、全く姿を見せなかつた第4者の存在、そして先に説明した治療の方法で治せなかつたのが方向性が根本から間違っていたかもしれないという事、それによつて考えている治療法も見直さなければいけない。どうやらコレからも一筋縄では行きそうにないらしい。まあなんとか成るでしょう。それにこれ以降はバトルが続きますので

“介入するなら頑張つて”ですね。

私にその気持ちっもりは修正の為にちやちや入れする程度しかないので、私以外が。

それと今更ですがジュエルシードってもしかして持ってたらダメな類ですかね？  
って思い始めました。まあ管理外世界なので治外法権という体裁で大丈夫でしょう、う  
ん。

「ふむ……こんなものか。思っていた以上の”モノ”では無かったな」

眩きと共に、カタカタカタ……カリカリカリ……つと何者かが何かを打ち書きする音  
がその空間に響く



「彼等はまだ少し、公に大々的に華やかに、色々な要素を引き連れて乱してくれと思うていたのだが……」

その空間には灯りが少なく、照らしているのは、部屋全体に広がる空間ディスプレイの青白い灯りのみ。

「元から在る者とそこに居る者達。面白い具合に全ての場所に、それぞれ介入者が入っていたというのに……」

モニターに映るのは、様々な少年少女達

白い衣服を身に纏い杖を構える少女、

黒い衣装を身に纏い斧を構える少女、

双剣を構える少年に刀とも取れる剣を振る少年、

猫耳の女性や犬耳の女性や小動物に成る少年、

全身黒い黒髪の少年と少し赤みの掛かった茶髪で双剣が仕込まれている杖を扱う少年、

そして一番大きなモニターには、

「やはり要因は彼女か……」

場面場面で衣装が違うが、頑なに顔を見せないように映っている少女が映し出されていた。

「多様な広がりを見せつつも、介入者<sup>イレギュラー</sup>全ての”ある”共通点から、明らかに逸脱している

……」

無印編の舞台

”海鳴市”以外もちらほらと映し出しているモニター。そこには決まって”同年代

”に見える子供が映っていた。

「まさしくそれが特異点と”成っている”のか……はたまた”成ってしまった”のか……」

複数人映る映像、共通点は”物語”に携わっている事と年代のみ、その他である發揮される力量、行使される力、使う方向性、全てがちぐはぐで一貫性は全く無いに等しい中、されどその人物だけは”明らかに違う”と表現できる。

「君が表舞台に出るのを楽しみに待つとしよう。唯一の特異点、或いは修正力とでも呼ぶべきか」

モニターが映すは”過去の映像”のみ、そこには一縷の未来も無い、未来はこれから”紡がれてゆく”

「アレ程の事を起こしてやったのに、それでも尚表に出ず健気に頑張ろうとする……か、面白いな。ならば彼<sup>1期で無くなるはずだった人達</sup>女達の生存は見逃してあげよう。そして見させて貰おう、私<sup>キミ</sup>が確認できている中で、唯一である”彼女”が物語にどう巻き込まれるのか……」

モニターに映る映像を次々と静止させてゆき、手元の書の空白部に唯一動いている映

像の所動を紡いでゆく。

「出来る事なら、潰れてくれるな、隠れたいのであれば隠れ切つて見せてくれよ。次は<sup>今まで</sup>無印編<sup>で</sup>」以上に愉快になるだろう」

そう一言終え、紡いでいた書を閉じ、立ち上がる。

「私を楽しませてくれ。その為なら労力を惜しまず種を蒔き事を起こし紡ごう

”<sup>だれもがじゆうにえがくせかい</sup>貴方達の為の物語”を、な”

一人静かにそう語る、そして何処かに通信を繋げる。

「私だ、暫くは大人しくして居てくれ。なに、それも1年にも満たない間だそれくらいは開発に専念しておけ。上手くいけば面白い方向に転ぶ材料が手に入るかもしれない、それを手に入れれば、そうだな”10年後位には”もつと愉快で面白い出来事に巡り合えるだろうさ”

最後に通信相手にそう言い残し誰もいないその人物は部屋を出て行った。

そこに残されたのは全ての映像が静止したモニター達。そこに映るは、未来の活躍が約束された少年少女達。

そしてそれとは別の群には、本来居なかつたはずの者達。

その中で特異点と称された人物。その人物が映るモニターと周りを囲むモニターを見比べれば判る明らかな違い。

それは  
彼女<sup>女性</sup>  
が  
彼女<sup>その子</sup>  
だけであるのだから……

## #20 After idle talk

case:06 「危険分子の個別認識」

『……で？ お前、何してんの？』

自室で色々なホロウインドを展開したり、機材を創ったり弄ったりしている私にそう言ってくるアルサナ。無印編も——まあちよつとした予定外の出来事が在ったけれども——ある意味平和で元の歴史どおり？に終わり、次はA's編。

原作時間軸的にも最初のイベントまで時間が無いというかももう既に間近に迫ってますけどね、闇の書の覚醒（はやてちゃん誕生日）が。——しかしそれはそれ、私ごとと神在いつきはある確認に忙しいのです、それというのも

「ん？」 物理法則も在ったもんじゃ<sup>線</sup>ない力”とか”気合と熱血とノリで増大する力”とかの観測出来るかどうかの実験だけd

『ホント何してんの!? なんて危ない物生み出そうとしてんだお前はア!!』

んア！ いきなり大音量だささないでよ！

なにこいついきなり叫びだして、最後まで言わせて欲しいんですけど

「最後まで聞いて、観測出来ない」という事を確かめたいからやってるんです。勿論、今の急<sup>きゆう</sup>拵<sup>しちゆう</sup>えな機器たちでは、本当に観測出来ないか、なんてわからないですけど、あんな粒子や力なんて無いに越した事はない。というより、在ったら対処出来ませんし」

そう、アレらがあつた場合、危険なんて騒ぎではない。それこそ地球最後の日足り得てしまう上に、StS編のマッドドクターに渡つたらいくらコチラ側の戦力増加を図ろうとも無駄に終わる、勝てるわけがない。片方は粒子線そのものが生命みたいなモノで物理法則をかなり無視できる上にこの世界の虚数空間と似ているような、虚無空間でしたっけ？に居るエンペラーなんかは銀河一個分くらいの大きさ誇つて未だ尚成長中とかありましたし、もう片方も想いの力だけでどれだけでも増幅する上に、アンチ属性まで存在してしまう。そんなの相手に出来ないし、こちらも存在した場合、TV版の天元突破で「銀河3倍分」とされ、銀幕版の超天元に至つてはそれの更に「数十倍」。もうこれらが居た場合、転生者云々とかチート云々でどうこう出来るレベルを凄まじく超えている、どうしようもない。

「それに言つてしまうとアレですがこの世界、言い方的に“管理世界／管理外世界”ですが捉え方を変えればそれは“多元宇宙”とも取れてしまいます、それだと気合で割かしどうとでもなつてしまうドリル世界ですし、虚数空間なんて人智が及ばない空間って

意味ではげったーな虚無空間みたいなものでしょう?」

まあ多元宇宙は観測者がアレで創りだされた妄想空間なので、どちらかと言えば某忍者の無限月詠みたいなものですし、虚無空間の方は時間や次元の概念突破した無限闘争の世界だった筈なのでこれまた違うとは思いますがすけどね。

「よく、国を知るには歴史を識れ」っていうじゃないですか。アレとおなじで、まあ私にとつて見ればどれだけ現実と認識しても、やはりここは元となつてたのが異世界、<sup>アニメ</sup>世界、<sup>セカイ</sup>から潰していこうかと」

『それが切っ掛けになつて、観測出来て生まれてしまう可能性』は考えたか? “ 観察者効果 ” だっけか、そういうのを』

「……………」

『おい』

モ、モチロン考エテ、イタサー。考慮シテタニ、決マツテルデシヨウ。

「よ、よし。観測出来そうにないですから、辞めますか!」

『その方が良い。あの自称神の言うこの世界に色々な要素が混ざつていふという事、それには、未だ観測されていふ要素 “ や ” その要素を具現化 / 発現出来る体現者<sup>キーマン</sup>が居ない ” というだけの可能性も含まれているという解釈も出来るからな。不安要素を自

分から増やしに行くようなことは辞めるんだな』

「?まるで一度体験したかのような言い方ですね」

『んな訳ねえだろ……少し考妄想力増やせばえりや考え付くことさ。ついに頭の中まで見た目相応になつたか?』

なんと失礼な、そんな事になつたらもう私使い物にならないから世界が終りそうになつても何も出来ないポンコツ電波ちゃんなだけじゃないですか。だが

「もしそうなつたら、見た目相応年相応になつてしまった私を、それはもう沢山頑張つて動かしてくださいね?」

『あつ、それは勘弁してくれ』

自分から言つて置いて……まあそうなるつもりは毛頭ないですよ、何も起きなければね。

### case:07 「自己感覚の存在事情」

〃〃また別の日〃〃

「転生者?」と思われる方々が、元となった作品の人々に少なからず性格が影響されて



「いるのは何かあるんですかねえ」

唐突にふと疑問に思ったことを口にしてしまう。

『さあなあ、アレじゃね？』 “中身は外見せいしん にくたいに影響をうける” って良くある感じの』

「ああ、成る程」

『でも今更なんでそんな事を思ったんだよ』

確かに、もう無印編も終わって今更過ぎる疑問ですもんね。ただ何となく認識をしておいた方が良くと感じただけなのだが。

「仮にですよ？ この世界って”色々な要素が”って曖昧な説明を受けてたじゃないですか」

『そうだな』

「それでさきの疑問が浮かんだんですけど——前も話した通り観測されてない要素等は置いておいて——外見に影響受けてソレっぽいや性格に豹変してるだけならいいんですけど、“もし作品そのものが混ざり込んでしまっていて、その主人公が本物として居てしまった場合”を考えてしまいました」

在り得ない可能性ではない、現にその彼等と関わりが在り無し含め、それとかわしき地名や企業名を幾つかを確認できている。名前を見ただけでその地名の場所が全く舞台その通りであったり、その企業が行っている事がそのものであったりの確認は出来て

いないんだけれど。

『仮に居たとしても、それはソイツの物語として、コッチとは関係なく進んでいくんじゃねえのか?』

「それだけならいいですが、私に課せられてしまっている運命は一応は”リリカルなのはを基準と捉えた世界”の流れを在るべき方向に持つて行く事ですが、それはイコールでなのはちゃんの物語”だけ”に限った話だとは思えないんですよね」

『つまりなにか? もし他の奴らがそれに値する”物語”を発生させた場合、少なからず”流れを直す”という運命が働いて巻き込まれる可能性が在るって事か』

つまりはそういう事の危惧。ただ単に其方の物語だけで終わってくれるのであれば問題は無いし私がどうこうする問題でもない。だが仮にはあるが、hackの世界の出来事が起きたとする、そうなるのであれば世界単位で影響を及ぼした事件である未帰還者——ネットに精神を囚われ現実で意識不明となる——を生み出してしまっていたのだが、ソレになのはちゃん——は純主人公なので無いとは思いますがフェイトちゃんやはやてちゃん、すずかちゃんにアリサちゃん等——所謂”物語の主要人物やソレに関わる人”が当てはまった場合、それはクロスオーバーな外伝に成ってしまいかねない。そうなる”私も”物語修正の都合上”否が応でも参戦しなければならなくなってしまうだろう。

「他の人達がどれ程までに影響を及ぼす特典とやらを貰っているかはわかりませんが、その可能性が在る以上は対処法を考えて置くに越した事はないという事ですし」  
 『まあ杞憂に終わるとは思うがそうなる場合によつてはどちらかを〝見捨てる〝しかなくなるのか』

それは……なんだろう、嫌だな。確かにそうするしかなくなるし、そうなった場合の比重はどうしてもコチラリリカルなのはの物語に傾くだろう、それが例に挙げた、hackのネットワーククライシスで何百人ではきかない犠牲が出る出来事だとしても。

「そうなった時、割り切れる……でしょうか」

『人間一人が出来る事なんてホント小さな事だから割り切るしかないだろう。まあしかし、例に挙げた作品の主人公としての要素を備えた人物は幸いにもコチラの物語の“主要人物”に留まっている。ならその事件が起こる事はないだろうし、もし起こってもソイツが“主人公”としてその事件を解決するだろう』

アルサナのその言葉で、心にもやを残しつつも納得するしかない、そう思う事にした。

“私は私”としてこの物語リリカルなのはの一人物として自己を置いた以上、それ以外の作品に巻き込まれたとしても此処での立ち位置とそう変わる事は無いだろうと。

## case:08 「ほかの皆の戦闘衣服」

〜とところかわって〜

「そういえば、お前の選んだ能力の元になったのってハセヲだろ？　なんでそんなポンチヨスタイルになってるんだ、動きにくくないか？」

結界を展開し認識をズラした中で戦闘訓練を行っている最中、短刀を二刀逆手に持つて応戦している亮夜に対してそう切り出したのは、木刀を順手に持ち正眼に構えて切り込んでいる悠次だ。

「別にこれといった理由はねーんだけどな、元の1stスタイルの時の恰好って知ってるだろ」

「ああ、すごく軽装でへそというか腹全部出している奴だろ。なんだ、アレが恥ずかしいとでもいうのか」

「いや、それも有るがよ、まだアレちよつと肌寒いんだよ」

「お前フェイトと一緒に居たんだから合わせてやれよ、あの子の方が寒そうだろ」

呆れ顔で亮夜にそう言いつつ袈裟懸けや逆胴など剣道で言う切り込みの型をなぞり

つつ、創作上の振り方も出来ないかと剣を振り回し続ける悠次。時折『飛天御剣流』やら『平突き構えは』など聞こえたりしている。

「ん？ 女の子の戦闘服ってあんなもんじゃねえの？」

「いやいやいや、お前のその力の元となったゲームを思い出せ、あそこまでは居なかっただろ！ どういう考えしたらそういう結論になるんだ」

「あー……そうだったっけ？ 俺がこの力選んだのって動きがカッコ良かったからだからな、その辺あんま気にしたこと無かったわ」

彼にしてみれば、ゲームとはキャラを操作しその動きで楽しむモノであり、キャラの衣装などはあくまで画面を彩る為のついでのものという程度の認識しかない。そんな認識で在るが為に自分で操作していたキャラは兎も角、他の女性キャラがどういう衣装をしていたかなど記憶が曖昧でほとんど覚えてなどいない。

「つつかそれ言うならお前はどうかなるんだよ。なんで学生服なんか着てるんだ」

「元となった作品が作品だけに仕方ないだろう。まともなのが殆どないんだよ。それに“それらの類を含まなかった”からな。武器も木刀を自分で買ったコレだけさ」

言い返された彼の作品も、制服が主にと言うだけで他の衣装が全く無いわけではない——そう、無い事も無いのだが、殆どが“コスプレ”ちつくであるし、何よりもそういう『アイテム』に分類される類を“選ばなかった”と言うのが主な理由だ。

「そういえば服装と言えば、あの森で助けてくれた？子の服装も特徴的だったな」  
「あ？服装よかあの仮面の方が印象に残って覚えてねえよ」

彼等の話し合う者とは勿論この物語の主観主人公である者の事である。

「よく憶えているわけじゃないが、あの服はどこかで見た事があると思うんだ」

「それはコッチに来てからか？それとも前での話か？」

「前に、だな。あれもどこかの作品でみていたと思うんだが細部が違う気がするんだ」

「気になるんなら挙げてみるよ。お前が思い出さなくても俺が思い出すかもしれねーぞ。ついでに仮面についても考えよーぜ」

「そうだな——まずは」

そう言って話し合う内に彼等は自分達が練習として打ち合っているということも忘れて、座り込んで話し始めた。片方が作品を挙げればもう片方がソレには無かったはずだと言い類似したような衣装の出る作品を挙げて行く。幾らかの時間が流れて話し合っていくうちに一つずつ作品に思い当たった物が在った。

「仮面は”うたわれるもの”で出てきた仮面だろう。あれは物語が良かったからよく憶えている。ただ、今世であの作品が存在して無いかどうかは調べて居ないからあの人物が俺達と同じかどうかは」

「身に付けていた衣装は”MHシリーズ”に出てきたレイア装備っぽかったな。まあ鉄

の部分が無かったし、アレのデザイン自体が姫騎士鎧として割とよく有るデザインだから確実にソレっとはいえないがな」

二人して結論の様なものは出た。そう“様なもの”は出たのだが……

「つまり」

「ああ、そうだな。つまりは」

「『特に何もわからなかった』ということか」

「……」

「……」

二人は結論付けて目をあわせあい——

「次に備えて体術を身に付けるか」

「そうだな。わからないものを考えるより建設的だ」

最初、行っていた様に、対人戦が増える「A, s編」に備えて、自分の動きを確立させるために練習を続けていくのであった。

## #21 『Next A's』

「ハローハロー。聞こえてるかな？ まあ聞こえてなくても問題は無いのだけれど」

周りを見渡せば何処か見覚えの有る様な無い様な真つ白い空間、そして何処からか、随分と昔に聴いた事があるような声が響いてくる。これは夢で幻聴？

「おやおやおや、ある意味夢だけど夢でもないし幻聴じゃないよ？ 聞こえてはいるみたいだね、ならこのまま話を続けさせてもらおうよ。キミが認識する所の無印にあたる時系列完結おめでと〜」

アリガトウゴザイマス。所デ、アナタ、ダレデスカ？

「はははー判つてるくせに。」キミをそんな姿にしと……いや、新しい身体を与えた”通称：神だよ”

ああ、こんなシメイあと性別りにしてくれやがったアナタですか。それで、何用ですか。私、アナタの頼み事全うできてないと思うんですけど、ソレ関係ですか？ 真に申し訳ないと思っております

「いや？」結果的には”沿ってるみたいだから大丈夫だよ？ 内容や手段、変な介入者含めて、ね。それに私は最初からどんな手段を取ればいいのかどれだけ行えばいい、



とか指示しなかったらう？　つまりはそういう事だよ、一つの終点が次に繋がるようになれば後は世界が勝手に収まるようにするのさ。そしてそんなキミには1章クリアの褒美として情報を贈呈しよう」

え？ゲーム感覚ですか。確かに完全に受け入れきれない感じは残ってますけど私にとつてはもう現実なのでそういうのは止めて欲しいんですけど。

「キミと私達では感覚が違うのさ」

……まあいいです。貰えるモノは貰っておきます。しかし嬉しいですが、テンプレ的には追加能力では？

「それでもいいけど、キミ最初から力とか能力に興味なかっただろ？　それに某あめりかなな蜘蛛男の作品に『大いなる力には大いなる責任が伴う』っていう和訳が」

アツハイ、その通りです、力ありません、情報をお願いします。

「素直でよろしい。まあ未来に関しては最初にキミに伝えたとおり、あまり見えないから教えられないけどね。とりあえず知りたがっているであろう“他の人達”についてだが、能力などはキミの予測通りだと思うよ、という事と“私は彼等には関わっていない”と言っておくよ」

へえー。自分も関わっていないからどうして居るのかもわからないし、能力的なモノもあまり読み取れない、けれども“世界”にとつては異物の様なモノだからそういう存在

ではあると判る、つて事ですかね？

「概ねその通りだねえ。別の加護でも有るのか、良く見通せないんだよ、ゴメンね？」

まあ仕方ないですよ。神様つて万能つて思われて神格化されてますけど人の想像／信仰あつてこそ存在できる概念事象みたいなもんですからね

「うん……うん？」

そしておそらくへっぽこ具合は一番繋がりがある私がほとんど信仰してないのが原因でしょう、つまり私の所為でも有るので責められません。

「え、いや……キミがそう思っているのならそれでいいかな。それで、まださっきの情報だけだと報酬としては少ないと思うしキミからの質問もある程度受け付けるよ」

じゃあ、あの人達の他にも転生者つています？

「色んな要素混ざつちやつてる世界だからねえ。私も全部を把握してる訳じゃないけどそれなりの数は居るっぽいよ。でも君と関わるかどうかの可能性が在る人数で言えば、ソレに関しては多い数という訳じゃないね」

それでもまだ居るのか……居ちやうのね……これ以上頑張らないといけないのか。

「なんとか成るでしょう。キミに与えたモノはキミが思つてる以上だよ」

はえ？ソレつてどういう……今のところチート風味(○)な感じはありますが、概ね私  
が求めた程度ですけど

「気が付いてないのって怖いよねー、まあソレも仕方ない要素が関わってるけどね。あつ、言っておくと“ソレ”は私の所為ではないよ」

含みのある言い方ですが、現状の力で満足してますので疑問には思いますが答えてくれなくても別に良いです、私が聞きたかったのは主に他の者達に関する事だけです。

「欲がないねえ。もうちよつと神頼みしてもいいんだよ?」

では世界からプレシアさんに起こり得る影響を少なくつて出来ますか?」

「ん? それはどういうことだい? プレシア嬢は君の裏技的な治癒によつて健康体を取り戻したじゃないか」

それですよ、ソレ。健康体を“取り戻した”つていつてもやったことは『逆行』、自然の摂理に逆らう事です。どのような揺り反しが来るかもわからないのでそれらの帳尻合わせをですね。

「うくん、欲の少ないキミの願いだから叶えてあげたいけど、それはある意味世界への過干渉に価する類だから出来ないね」

……そう、ですか。

「まあ気落ちしなくてもいいよ。彼女の寿命は“最後まで”十分生きられるぐらいは持つよ、私が保証する。それにキミが用いた術は正しく世界に作用して、行われた事象の

通り〃戻す〃事に成功し認識されているよ」

え、それはそれで別の問題が出てくるんですけど。

「気にしなくてもさして問題はないさ。さて、他にはあるかな？ あと少しだけならこたえてあげるよ」

じゃあ最後に、他の人達を強くして私が余り積極的に修正に関わらなくてもこの世界は進んで行ってゆつたり暮らせるようにしてほし

「その願いは私の力を超えているため、叶えられないようだ」

どこのボル〇ガ様ですか!! 確かに干渉出来ない事と言ってましたがソレくらい頑張ってくれても良いじゃないですか!! せめて前者他の人の強化の願いは無理でも後者の願ゆつたり暮らせるいぐらいはいけるでしょ!! 進んで関わらなくて良くてちよこちよこ関わって行く程度ですむ平穩ぐらくれても

「ハーイ、最後に可能性の欠片を散らしてオサラバですねー。また次が無事に終わった時に逢いましょう」

あつ、ちよ、話はまだ終わってないでしょう!? ってどんどん声が遠くになつて……

『Fragments of The Next Episode……』

「ようやく始まるのか……一個前（無印）も色々在ったし、この後も色々あるんだろうなあ……」

「この間に俺が出来るのは、ただ情報を集めるだけ、か。もどかしいな」

「俺は消える筈のモノも救う為にこちら側に居るんだ。邪魔はしないで貰おうか？」

「蒐集された人が人だけに、本来在るはずのない異能が加わり、原作よりも強く……？ 有り得ると思っていましたがちよつとこれはまずいかも知れませんか」

「わたしを助けてくれる家族のような人達がいて、更に増えた家族が居る。わたしは今のこの在り方で居続けたい！」

「お前にしか救う事は出来ないなんて事は無いはずだ！協力する事は出来ないのかよ！」

「どうでもいいですけど、これだけ稀少転生特典技能持ちが居るのですから、協力すれば直ぐにでも解決しそうなモノなのに何故か対立構図。修正力と言いますか、収束力と言いますか、世界は妙に出来てるものですね」

「楽しい……実に楽しいぞ！ 黒い衣装のお前達は相当なやり手だな！この様な状況で無ければ更に楽しめたというのに」

「その力……もしかして”投影”か!? その力だけでは何も出来ないだろう！」

「シャマルのヤツ、一体何処に行ったんだ……あんまりはやてを心配させるなよ……！」

「採られていく魔力が多い？ 蒐集が思うように進んでいないのかもしくは第三者が行動を抑制してる？」

「俺の得物はあまり遠距離に向いてないからな、むしろここからが本番だ」

「ふむ、私と同じ型の者は居ないか。些か残念だが攻めるが私の役目ではないので仔細はないか」

「全く、この世界は短期間に事が起こりすぎだろう……だが規定に当てはめて管理世界にするような事柄もないしどうすればいいんだ……」

「双子猫が出てこないんですけど……え？ ジュエルシード事件は……まあ、大丈夫だったのにA'sだけ劇場版？ でもグレアムさんは居るはずですし……そもそも劇場版って劇中劇って設定だった筈では……」

「——友達の為に頑張ろうって、一度関わったのなら最後まで責任を持つ、って決めているんです。それが友達から教わった、大切な心構えだから」

「なんであの子たち、私を見つけれられるの？ まだ誰にも見つからないようにしてるの」

「そうかこの子はあの子達の……ならば、信じてもよからう」

「これつてもしかしてこつちも強化しないと危ないんじや……」

「君達の事情も、心情も理解できる——だが、僕達としても割り切れない事柄でも有るんだ」

「私を助けてくれたのはありがたいけど……なんでそこまでしてくれるの？」

「ちよつと、なんで私が狙われるんですかー！ 私どつちにも関わってないですよー!!」

「アナタは一体誰の味方でなにかしたいの？」



「短いあいだやったけど、一緒におれて、楽しかった！ ホントは……ホントはずっと一緒におりたい！ でも、最後は笑って送り出したんや、さよならや、ラインフォース」

「また……情報も集めたのに救えなかった……だが、これをあの人に渡せれば……」

「これで……いいんだよね。ラインフォースさんも、最後は綺麗な笑顔だったし……」

「俺が、こつちで頑張って居たのは、意味がなかったのか？」

「俺達は力を付けていたつもりだった、ああ、確かに付いていたがソレはホントに表面上でしかなかったのか」

「考える事があんま得意じゃねー俺でも、何とか出来る事件だと思っただがなあ、クソ」

『斯かくくして、收拾から蒐集へシフトした物語は一旦の休幕を迎え、次なる”記録されぬ物語”へと紡がれていくのであった』……私が言えた義理では無いがまたもや”予定調和”に終わってしまったか』

『回収して救えたモノはあったが、正史からズレて歪問題みは生まれる……か』

「……う？　ここはどこでしょう？　そしてみなさんはどなたでしょうか？」

The following Story「A's」